

1996年度教育改善推進経費

言語研究 VII

1 9 9 7

東京外国語大学

特集

基本語彙・基本構文

——頻度数等の観点から——

まえがき

現在、本学の「言語研究（言語教育も含む）」が「東京外国語大学」という名前にふさわしい形で実践されていると言えるであろうか。—— この問いは、本学の「言語研究」が、それぞれの当該分野において、日本の最先端に位置しえているかどうかを問うことだけではなく、本学の「言語研究」に（社会的あるいは学術的に）どのような課題が課せられているかを問うことも当然含む。本学の「言語研究」を正しい形で「自己点検」するためには、本学の「言語研究」に課せられた課題を明確に意識することが不可欠な前提になろう。また、そこに初めて、私たち個々人の努力すべき方向が明らかになり、実践すべきステップが具体的に描かれると考える。

本研究報告書「言語研究Ⅶ」は、以上のような問題意識に基づき、一つの実践的試みとして計画したプロジェクト「基本語彙・基本構文 — 頻度数などの観点から」の成果をまとめたものである。本プロジェクトは、各種の言語の基本語彙・基本構文というものをどのように捉えるべきかを根本的に考え直しつつ、各種言語間に見られる、基本語彙・基本構文の共通性・特殊性を抽出することを目的にしたものであるが、本研究報告書が当初の目標をどの程度達成しえたかに関しては「志半ば」以前の状況と言えよう。しかし、このような小さな試みが、いつの日にか、本学における他の同種の試みと相働き合い、本学の「言語研究」を他教育研究機関に類を見ない、独自の存在意義を持つものへと「育っていく」ための一助になることを心から願うものである。

1997年3月5日

在間 進

目次

基本語彙・基本構文の分析ツールの調査	 佐野 洋	1
1 1 7 0 語の基本単語		
—トルコ語の基礎語彙に関する一考察—	 川口 裕司	29
Heinrich Böll: Brot における使用語彙の 頻度分析	 在間 進	84
中国語の基本語彙「了」について	 望月 圭子	97
マレー語の準動詞が作る構文	 正保 勇	117
文の普遍性と普遍人称文	 中澤 英彦	133
Essai de classement des constructions transitives en français	 Yoichiro TSURUGA	143

基本語彙・基本構文の分析ツールの調査

佐野 洋

概要

本稿では、コンピュータを利用した基本語彙，基本構文の調査のための分析ツールについての調査結果を概説する．語彙・文字処理では，英語と日本語を分析の対象とした分析ツールを紹介する．これら分析ツールに共通に利用されている正規表現についても説明する．幾つかの形態素解析ツールを紹介する中で，形態素の解析メカニズムを説明するために形式文法を導入し，正則文法とパーザーの概念について説明する．著者が作成した日本語形態素解析規則も紹介する．日本語以外の言語の形態素分析の例として，PC-KIMMO システムや Xerox 社の多言語解析のためのホームページについても言及している．

1 はじめに

本プロジェクト(「言語研究」VII 基本語彙・基本構文)は、諸言語(英語、ドイツ語、フランス語、ポルトガル語、ロシア語、モンゴル語、マレーシア語、中国語、日本語など)を対象にした調査・研究によって、その共通性と特殊性を分析しようとするものである。言語学的なアプローチによる比較対象研究だけでなく、分析結果を本学での語学教育に応用することも視野に入れている。

本稿は、情報技術(Information Technology:IT)を利用した基本語彙・基本構文の分析ツールについての調査報告である。これら分析ツールは、これまでの「言語研究」1～「言語研究」6で得られた理論的な枠組を実データに応用するためのものである。理論的な枠組を基本に情報技術を応用することで、電子化されたテキストデータやコーパス資料などのデータベースを効率良く操作することが可能になり、規模の大きなデータで理論検証や実証が行なえるのである。

次の点に考慮して分析ツールの調査を行なった。(1)パソコン(Windows95/NT, Macintosh, DOS/V等)で利用可能なものであること、(2)基本的にフリーソフトであって、入手が容易に可能であるもの、(3)利用する上で、技術的な詳細に立ち入らなくてよいということに視点を置いた。

以下、第2章では、語彙・文字調査ツールを紹介し説明する。第3章では形態素分析ツールを説明する。日本語と英語の分析例を中心に、その応用事例を示すことで他言語への応用に配慮した。第4章で本稿を終える。付録には各種分析ツールの入手方法、利用の仕方などを紹介している。

2 語彙・文字調査ツール

2.1 目的と調査範囲

本章は、コンピュータで語彙や文字データを扱うための分析ツールを説明する。自然言語の処理にコンピュータを応用する試みは、コンピュータが開発された当時から行なわれてきた。すでにワープロを始め、機械翻訳システムも商用化されていて研究蓄積も膨大である。本稿では、その中から範囲を限定して分析ツールを紹介することになる。まず、動作するプラットフォームをパソコンに限定した。また目的が分析ツールの諸言語の研究への応用にあるため、技術的な詳細には触れない。

ほとんどの分析ツールは正規表現を利用しており、次の節で、正規表現について若干の説明を行なっている。基本的なテキスト処理の分析ツールとして二つの AWK プログラムを、統計情報などの処理も含めた応用例として、国立国語研究所の日本語語彙調査プログラムを取り上げる。

2.2 正規表現とその構文

正規表現 (regular expression) とは、パターンとしての文字列を指定するために用いられる記法である。文字が単語を形成し単語の連鎖が文になる。文の意味的な内容表現を無視することによって、ことばは文字の列として捉えることができる。文に対応する文字列の形態上の性質に注目し、それをパターン (pattern) として認識することが可能である。例えば、“Th” で始まる文字列とか、“ed” で終る文字列というパターン表現が可能なのである。本節では、[3] に従って正規表現の構文を以下に示す。

2.2.1 文字列と超文字

文字列 (string) とは、ゼロ個以上の文字の並びを意味する。文字を含まない文字列を空列 (null string) と言う。明示的に「 ϵ 」を使って示すこともある。部分文字列 (substring) は、文字列の中のゼロ個以上の隣接する文字の並びを指す。

超文字 (metacharacter) とは、文字ではなく、パターンとしての文字列を表現する記号として用いる。以下にその一覧を表 1 に示す。

表 1: 超文字

¥ ^ \$. [] | () * + ?

2.2.2 基本構文

正規表現による文字列パターンの表現の仕方は次の通りである。

α 非超文字 α それ自身を示す

¥ エスケープ

超文字の正規表現上での機能を無効にして、文字として表現する

^ 文字列の始め(先頭の文字)

“ $\wedge$ α ”は α から始まる文字パターンを示す。例えば、“ $\wedge$ pro”は、“pro”で始まる文字列を表現する

\$ 文字列の終り(末尾の文字)

“ α \$”は α で終る文字パターンを示す。“\$ able”は、“able”で終る文字列を表現する。

. 任意の1文字

“.”は任意の1文字を示す。ワイルド文字とも呼ばれる。“riv.”は、“rival”, “riven”, “river”, “rivet”を表現する

[,] 文字の範囲

ある範囲の文字だけを示すことができる。例えば、“s [iau] ng”は、“sing”, “sang”, “sung”を示す。“-”と“^”を利用することによって、文字の順序による範囲表現と、範囲の除外による文字表現が可能である。“[0 - 9]”は数字を表現し、“[^ 0 - 9]”は数字以外のすべての文字を示す

| 選択演算子

正規表現式“a | an”は、文字列“a”もしくは“an”を示す

α β 連接演算子

非超文字 α の直後に β が接続することを示す

(,) 文字のグループ化

“playing | played”は、文字列“playing”もしくは“played”を表現するが、グループ化を使うことによって、“play (ing | ed)”のように共通部分をまとめることができる

* 閉包

0個以上の文字の繰り返し表現する。空列「 ϵ 」を含む。例えば、“(younger) * sister”は、“sister”, “youngersister”, “youngeryoungersister”,...を表現する

+ 正閉包

1個以上の文字の繰り返し表現する

? 1項選択子

正規表現式“ α ?”は、空列「 ϵ 」かもしくは α を示す

2.3 テキスト処理への応用例

次節では、正規表現を言語処理に応用する事例として AWK プログラム(2.3.1節を参照)を2つ、文献[4, 220~228頁]から引用して取り上げる。(1) 任意の単語検索, (2) 文の検出の2例で、いずれも基本語彙と基本文型の調査に基本的なツールである。尚、プログラムは、MS-DOSもしくは、Windows95/NT のMS-DOSプロンプトで動作する。

2.3.1 AWK プログラム言語

AWK は、強力なパターン処理を行なうためのプログラム言語である。入力パターンに応じて様々はアクションを実行することができる。言語処理への応用についてみると、正規表現を使った文字列マッチング機能が強力であることが大きな特徴である。この機能を使うことで様々な言語処理操作を簡単に行なうことが可能となっている。

ここでは、AWK プログラミング言語については説明しない。AWK プログラム言語を学ぶためには、文献[4, 3, 8]を参照するとよい。

2.3.2 単語検索プログラム

文献中で、サンプルプログラムとして提供されている単語検索プログラム(word.awk)を紹介する。単語検索プログラムは、正規表現を使って目的の単語を文章中から検索する。文献[4, 222 頁を参照]によると、単語(word)の出現位置¹を示す正規表現は次のようになる。

$$(\sim|[\wedge A - Z a - z 0 - 9 ' -])\text{word}([\wedge A - Z a - z 0 - 9 ' -]|\$) \quad (1)$$

下記の文章(gawk.txt)[8, Manualから引用]を対象に単語検索を行なった。

History of awk and gawk

The name awk comes from the initials of its designers: Alfred V. Aho, Peter J. Weinberger, and Brian W. Kernighan. The original version of awk was written in 1977. In 1985 a new version made the programming language more powerful, introducing user-defined functions, multiple input streams, and computed regular expressions. This new version became generally available with System V Release 3.1. The version in System V Release 4 added some new features and also cleaned up the behaviour in some of the "dark corners" of the language. The GNU implementation, gawk, was written in 1986 by Paul Rubin and Jay Fenlason, with advice from Richard Stallman. John Woods contributed parts of the code as well. In 1988 and 1989, David Trueman, with help from Arnold Robbins, thoroughly reworked gawk for compatibility with the newer awk.

Many people need to be thanked for their assistance in producing this manual. Jay Fenlason contributed many ideas and sample programs. Richard Mlynarik and Robert Chassell gave helpful comments on drafts of this manual. The paper A Supplemental Document for awk by John W. Pierce of the Chemistry Department at UC San Diego, pinpointed several issues relevant both to awk implementation and to this manual, that would otherwise have escaped us.

Finally, we would like to thank Brian Kernighan of Bell Labs for invaluable assistance during the testing and debugging of gawk, and for help in clarifying several points about the language.

次のコマンドを実行すると、画面には、“awk”と“gawk”の出現位置が表示される。

```
c:> jgawk -f word.awk +41 gawk.txt
(g)?awk
```

¹英文を検索対象のデータとしている。

“(g)?awk”が検索単語の正規表現による指定部分である。この場合、文字列として“awk”もしくは“gawk”を指定して、プログラムに対して検索することを要求している。

ここで引用したプログラムでは、コンピュータ画面に検索結果を表示すると同時に、“word.tmp”というファイルに付加情報を出力する機能もある。表2に示すように行番号、カラム数表示による先頭位置と終了位置が得られる。尚、検索単語を指定する場合に、正規表現を工夫することで部分文字列や慣用表現の検索も可能である。

表 2: 付加情報ファイルの内容

1:	12-14;	awk
1:	20-23;	gawk
3:	10-12;	awk
5:	1- 3;	awk
11:	25-28;	gawk
14:	47-50;	gawk
15:	16-18;	awk
20:	48-50;	awk
22:	25-27;	awk
26:	48-51;	gawk

このプログラムは単語検索には極めて有用で、各種言語に応用することで、各種の言語におけるテキスト中の単語の出現頻度や出現位置などが容易に且つ高速に調査することができる。

2.3.3 文検出プログラム

文章から文を切り出すプログラムを紹介する。このプログラム(sentence.awk)は、1文が複数行に渡っていても正しく文を検出する。

まず、文の正規表現は次のようになる(文献[4, 226頁を参照])。

$$([A-Z0-9][^,]) ([^.!?']| [^,] ,) * ([. !?']| [^,] ,) | [^,] \quad (2)$$

文章(単語検索の場合と同じ文章を使用)から文のセットを得るためには次のコマンドを実行する。

```
c:> jgawk -f sentence.awk +record gawk.txt
```

“+record”は、実行結果の出力ファイルを指定する部分である。ファイル“record”に記録された文のセットを次に示す。

```
1: 1 - 3: 64 > History of awk and gawk The name awk comes from the initials of its designers: Alfr
4: 1 - 4: 13 > Aho, Peter J.
4: 15 - 4: 38 > Weinberger, and Brian W.
4: 40 - 4: 49 > Kernighan.
4: 52 - 5: 24 > The original version of awk was written in 1977.
5: 27 - 7: 42 > In 1985 a new version made the programming language more powerful, introducing .....
```

```

8: 72 - 10: 46 > The version in System V Release 4 added some new features and also cleaned up .....
10: 65 - 12: 52 > The GNU implementation, gawk, was written in 1986 by Paul Rubin and Jay Fenlason, ..
12: 55 - 13: 38 > John Woods contributed parts of the code as well.
13: 41 - 15: 19 > In 1988 and 1989, David Trueman, with help from Arnold Robbins, thoroughly reworked
17: 1 - 18: 7 > Many people need to be thanked for their assistance in producing this manual.
18: 10 - 18: 65 > Jay Fenlason contributed many ideas and sample programs.
18: 68 - 20: 7 > Richard Mlynarik and Robert Chassell gave helpful comments on drafts of this manual.
.....

```

尚、標準的なスタイルから外れる文章では、上記の正規表現を修正する必要がある。また、英語以外の文章に適用する時には、対象言語の文章スタイルを予め分析して、その結果を正規表現式に反映することが必要である(プログラムの基本部分は変える必要がない)。諸言語について正規表現を用意することで、大量のテキストから文のセットを得ることができる。

2.4 国立国語研究所の日本語語彙調査プログラム

2.4.1 「パソコンによる日本語研究入門」

中野による著書「パソコンによる日本語研究入門」[2]は、国立国語研究所において開発された日本語研究プログラム集(MCL)を紹介したものである。このMCLは日本語の語彙・文字調査のための研究ツールでAWKプログラム言語で記述されている。[2]には、解説されているプログラムとその実行環境であるjgawkがフロッピーに納められ添付されている。尚、プログラムは、MS-DOSもしくは、Windows95/NTのMS-DOSプロンプトで動作する。

2.4.2 ツール一覧

文献[2]の第2章には、「日本語研究に便利なプログラム」というタイトルで、以下に示すツールが解説されている。

汎用プログラム データ抽出、頻度計算、散布図作成、帯グラフ表示、辞書引き

文字調査 文字頻度表、文字種分布表、語数のカウント、散布図、頻度散布図

語彙調査 語レコード作成、情報付加、語彙表、頻度分布、語種、品詞分布、代表形と異形態の頻度表

一貫処理 読み仮名つけ、単語分割、品詞認定、語彙調査

対象研究 2カ国語対象用例表の作成

索引作成 文字索引表(KWIC)、文脈つき用語索引(KWIC)

分析対象は日本語のみに限定されているが、上記に示すように基本的な語彙・文字処理プログラムだけでなく、分析結果のグラフ表示や分布図表示プログラムなど語彙・文字処理に必要なツ

ルが網羅的に解説されている。説明のための用例も豊富で分かりやすい。さらに、中野 [2] は「基本的なツールを用意し、それを研究目的に沿ってプログラムを作り直すことを」を推奨している。

この意図に沿って、MCL プログラムはソースコードが公開されており、本文中のツールに対する丁寧な説明によって、日本語だけでなく多言語の語彙・文字調査に利用することが容易である。

3 形態素分析ツール

3.1 目的と調査範囲

本章は、形態素分析のための分析ツールを説明する。形態素解析システムは、商用化された機械翻訳システムの一部として組み込まれているほか情報検索エンジンにも応用されている。本稿では、範囲を限定して分析ツールを紹介することになる。まず、無償で入手できる分析ツールに限定した。目的が分析ツールの諸言語の研究への応用にあるため、技術的な詳細には触れない。

次の節では、形態素分析ツールを利用する際に必要となる形式文法について若干の説明を行っている。分析ツールは、国立奈良先端科学技術大学院大学と京都大学からリリースされている JUMAN システムを中心に説明する。これらのツールはワークステーションで開発されたもので UNIX OS 上で動作する。パソコンでの利用を考慮し、MS-Windows や Macintosh を UNIX プラットホーム化するための方法についても説明している。

筆者が開発した汎用日本語形態素解析規則と辞書についても若干の説明を行なう。この規則と辞書は JUMAN システムで利用できる。MS-Windows 利用者のために、Windows95/NT で利用可能な形態素解析システムについても紹介する。

3.2 形式文法とその基本概念

日本語など自然言語の文は、構成要素としての単語が線状に並んだものである。その並びはある種の規則に従って定められたもので、こうした規則を一般に文法規則と呼んでいる。

図1は、例文「彼がゆっくり歩いた」の構文構造を示している。図の下から上の方へ解釈を進めてゆくと、表3に示す書き換え規則²が順次適用されて、文が生成されていると考えられる。

表 3: 書き換え規則

< 文 >	→	< 補語 > < 述語 >
< 補語 >	→	< 名詞 > < 格助詞 >
< 述語 >	→	< 動詞句 > < 活用語尾 >
< 動詞句 >	→	< 副詞 > < 動詞 >
< 動詞 >	→	歩
< 活用語尾 >	→	いた
< 副詞 >	→	ゆっくり
< 名詞 >	→	彼
< 格助詞 >	→	が

このような生成文法の解釈の概念を抽象化し、形式的に表現したものが形式文法 (formal grammar) である。以下に形式文法における用語を説明する。

²矢印(→)の左側の項は右側の項によって書き換えられることを示す。

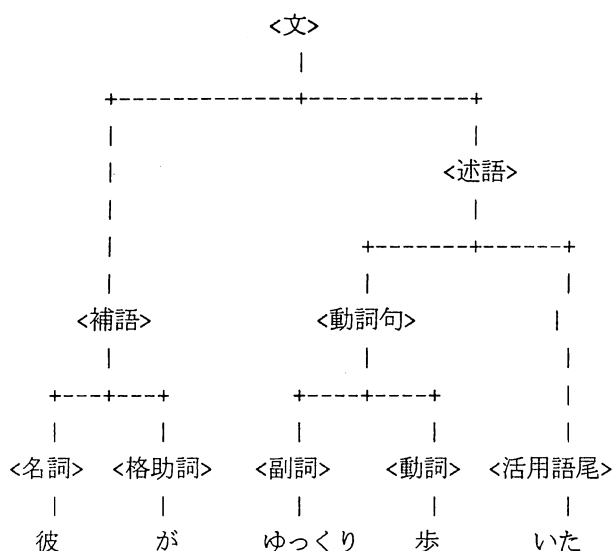


図 1: 例文の構文構造

文(sentence)を構成する最小の単位を終端記号(terminal symbol)と呼ぶ。図1の各単語は終端記号である。それぞれの文法について、扱う終端記号のセットは予め決められていて、しかも有限な数であることを前提として、辞書として示される。文の生成の中間過程に現れる文法概念を非終端記号(non-terminal symbol)と呼ぶ。この非終端記号も有限なセットとして示される。非終端記号の中で<文>のように文の生成の開始点となる機能を開始記号(start symbol)と呼び、文法にひとつだけ規定される。書き換え規則は生成規則(production rule)とも呼ばれ、規則の左側の項は少なくとも一つの非終端記号を含むものとされる。

形式文法は、正則文法、文脈自由文法、文脈依存文法、句構造文法などに階層的に分類されるが、一般に形態素解析の文法枠組で利用されるものは、正則文法である。ここで、形式的な表現を導入して、正則文法を示す。

非終端記号の有限集合を N 、終端記号の有限集合を Σ 、生成規則の有限集合を P 、開始記号を $S(S \in N)$ とすると形式文法は、次のような表現になる。

$$G = (N, \Sigma, P, S) \quad (3)$$

例で挙げた文を生成する文法は次のようになる。

$$\begin{aligned}
G_j &= (N, \Sigma, P, \langle \text{文} \rangle) \\
N &= \{ \langle \text{文} \rangle, \langle \text{補語} \rangle, \langle \text{述語} \rangle, \langle \text{動詞句} \rangle, \\
&\quad \langle \text{動詞} \rangle, \langle \text{活用語尾} \rangle, \langle \text{副詞} \rangle, \langle \text{名詞} \rangle, \langle \text{格助詞} \rangle \} \\
\Sigma &= \{ \text{歩, いた, ゆっくり, 彼, が} \} \\
P &= \{ \langle \text{文} \rangle \rightarrow \langle \text{補語} \rangle \langle \text{述語} \rangle, \langle \text{補語} \rangle \rightarrow \langle \text{名詞} \rangle \langle \text{格助詞} \rangle, \\
&\quad \langle \text{述語} \rangle \rightarrow \langle \text{動詞句} \rangle \langle \text{活用語尾} \rangle, \langle \text{動詞句} \rangle \rightarrow \langle \text{副詞} \rangle \langle \text{動詞} \rangle, \\
&\quad \langle \text{動詞} \rangle \rightarrow \text{歩}, \langle \text{活用語尾} \rangle \rightarrow \text{いた}, \langle \text{副詞} \rangle \rightarrow \text{ゆっくり}, \langle \text{名詞} \rangle \rightarrow \text{彼}, \\
&\quad \langle \text{格助詞} \rangle \rightarrow \text{が} \}
\end{aligned}$$

3.2.1 パーザー

開始記号を S として、文法 P で生成可能な、すなわち受け入れられる記号列 (文字列) に対して yes を出力し、それ以外の記号列に対しては no を出力する認識機械 (recognizer) をパーザー (parser) と称する。認識機械で yes を得るような入力記号列はパーザーに受理 (accept) されるという (図2を参照)。

```

+-----+
----->| Accept/Reject |----> yes/no
Input Strings | Formal Grammar |
              | G=(N, Σ,P,S) |
+-----+

```

図 2: パーザー

入力の記号列は、言語処理においては単語とか文に相当する。終端記号の有限集合 Σ は、ある言語の語彙エントリ全体であり、生成規則の有限集合 P が、一般に文法規則と呼ばれているものに相当する。

3.2.2 正則文法と形態素解析

正則文法 (regular grammar) (または正規文法) とは、(3) 式で示される形式文法 G において、生成規則が次の形式であるものをいう。

$$A \rightarrow aB \quad (4)$$

$$A \rightarrow a \quad (5)$$

ここで、 $A, B \in N$, $a \in \Sigma$ である。

ことばを機械処理する際に、一般に形態素解析を行なう上で利用される形式文法の枠組は正則文法である。(4)式で記述される部分を接続規則、(5)式で記述される部分は辞書規則と言い、両方をあわせて形態素解析規則と呼んでいる。(5)式で示される規則の左側(非終端記号部分)は、品詞と呼ばれる文法概念に対応する。

図3に形態素解析システムのプロット構成図を示した。形態素解析規則と形態辞書を作成し、そのデータからパーザを作成する。パーザ部分は形態素解析エンジンと呼ばれることもあり、プログラムとしてみた場合に、コンピュータ上の実行モジュールに相当する。このようなことから、規則と辞書からパーザを作成する過程を、それぞれ規則のコンパイル、辞書のコンパイルとも言う。

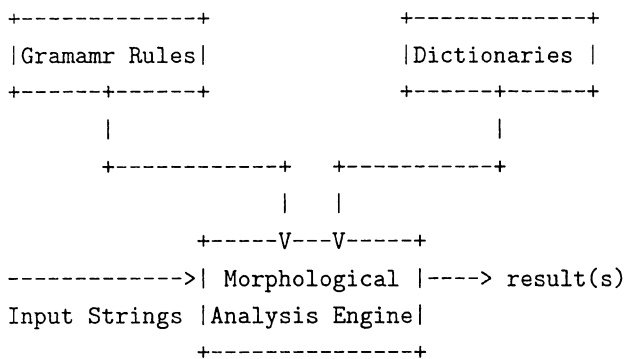


図 3: 形態素解析器

パーザを実装するには幾つかの工学的な手法がある。これらの手法は、実行速度、記憶領域や必要記録媒体量などの対コンピュータ資源における効率の点で評価されている。

3.3 日本語形態素分析

3.3.1 日本語形態素解析システム - JUMAN/Chasen

JUMAN システムは、奈良先端科学技術大学院大学・松本研究室および、京都大学・長尾研究室からリリースされている日本語形態素解析システムである。C 言語³でインプリメントされている形態素解析エンジンと、JUMAN 標準文法と呼ばれる解析規則と約 10 万語からなる形態辞書から構成されている。

JUMAN システムには、標準文法に基づく形態素解析規則が付属しているために、入手と同時に文の形態素解析に利用することができる。優れた特徴の一つは、JUMAN システムの利用者が

³C 言語: OS などの制御プログラムを記述するのに適したプログラム言語の一つ。米国 AT&T ベル研究所で開発された。

独自の文法規則を容易に、JUMAN エンジンに実装することができる点にある。

現在、JUMAN は Version 2.0 が改良されて、新しく、奈良先端科学技術大学院大学・松本研究室からは、茶筌 (ChaSen) 1.0 beta としてリリースされている。茶筌は、従来の JUMAN にあった色々な制約を緩和し、より柔軟な形態素解析システムの実現を目指したものである。

京都大学・長尾研究室からは、JUMAN 3.0 版として形態素解析規則が強化されてリリースされている。入手の仕方については、付録に載せている。

3.3.2 IFS 汎用日本語形態素解析規則

IFS 汎用日本語形態素解析規則は、著者が開発した日本語形態素解析規則である。ICOT⁴フリーソフトウェアの一つである形態素解析システム LAX の解析規則部分を JUMAN エンジン用に移植し改良したもので、新たに辞書データを作成した。

この形態素解析規則は、日本語サブセットを分節(形態素解析)する能力を持っている。この形態素解析規則が前提とする形態組織の体系は、いわゆる構文文法の品詞体系にできるだけ依存しないものであり、そのために、この規則による解析の結果は、中立性が高く言語研究から各種アプリケーションまで応用分野が広く応用できることが特徴である。

機能語(助辞と接辞)辞書が規則とともにリリースされている。いわゆる内容語については標準的な辞書を持っていない。なお、リリースソフトウェアには、IPAL 動詞辞書⁵と形容詞辞書の辞書エントリを基に作成した規模の小さい辞書が添付されているほか、JUMAN 辞書から変換して作成した 38,000 語(名詞を除く)の辞書も添付されている。

3.3.3 形態素分析例

JUMAN エンジン、紙幅の都合上、形態素解析規則の詳細には言及しない。以下に、日本国憲法の前文の第 1 文を形態素解析した結果だけを示す。

```
starchild% cat MISC/CORPUS/CNST/kenpo.1 | MISC/LIB/kaiseki
```

```
日本（にほん）体言語基（自立体言語基）  
国民（こくみん）体言語基（自立体言語基）  
は（は）係助辞（係は）  
、（、）区切り記号（点）  
正当（せいとう）情態語基（ナ型）  
に（に）副用助辞（副用に）  
選挙（せんきょ）用言語基（ウ系サ変）  
さ（さ）語基連接辞（ウ系サ変）  
れ（れ）受身接辞（*）  
た（た）ウ系弱活用助辞（完了形）  
国会（こっかい）体言語基（自立体言語基）  
に（に）格助辞（格に）
```

⁴Institute for New Generation Computer Technology: ICOT, いわゆる第五世代コンピュータ技術開発機構。

⁵特殊法人 日本情報処理振興事業協会・技術センターからリリースされている電子化日本語辞書。動詞辞書、形容詞辞書、名詞辞書が無償で公開されている。

おけ（おけ）用言語基（ウ系弱変化）
 る（る）ウ系弱活用助辞（現在形）
 代表者（だいひょうしゃ）体言語基（自立体言語基）
 を（を）格助辞（格を）
 通じ（つうじ）用言語基（ウ系弱変化）
 て（て）ウ系弱活用助辞（完了中立形）
 行動（こうどう）用言語基（ウ系サ変）
 し（し）語基連接辞（ウ系サ変）
 、（、）区切り記号（点）
 われわれ（われわれ）体言語基（自立体言語基）
 と（と）副助辞（副と）
 われわれ（われわれ）体言語基（自立体言語基）
 の（の）連体助辞（*）
 子孫（しそん）体言語基（自立体言語基）
 の（の）連体助辞（*）
 ため（ため）形式体言（副用の類）
 に（に）副用助辞（副用に）
 、（、）区切り記号（点）
 諸国民（しょこくみん）体言語基（自立体言語基）
 の（の）連体助辞（*）
 協和（きょうわ）体言語基（自立体言語基）
 に（に）格助辞（格に）
 よ（よ）用言語基（ウ系強変化ラ）
 る（る）ウ系ラ活用助辞（現在形）
 成果（せいか）体言語基（自立体言語基）
 と（と）副助辞（副と）
 、（、）区切り記号（点）
 我が国（わがくに）体言語基（自立体言語基）
 全土（ぜんど）体言語基（自立体言語基）
 に（に）格助辞（格に）
 わた（わた）用言語基（ウ系強変化ラ）
 って（って）ウ系ラ活用助辞（完了中立形）
 自由（じゆう）体言語基（自立体言語基）
 の（の）連体助辞（*）
 もたら（もたら）用言語基（ウ系強変化サ）
 す（す）ウ系サ活用助辞（現在形）
 恵沢（けいたく）体言語基（自立体言語基）
 を（を）格助辞（格を）
 確保（かくほ）用言語基（ウ系サ変）
 し（し）語基連接辞（ウ系サ変）
 、（、）区切り記号（点）
 政府（せいふ）体言語基（自立体言語基）
 の（の）連体助辞（*）
 行為（こうい）体言語基（自立体言語基）
 に（に）格助辞（格に）
 よ（よ）用言語基（ウ系強変化ラ）
 って（って）ウ系ラ活用助辞（完了中立形）
 再び（ふたたび）副用言（一般型）

戦争（せんそう）体言語基（自立体言語基）
 の（の）連体助辞（*）
 惨禍（さんか）体言語基（自立体言語基）
 が（が）格助辞（格が）
 起こ（おこ）用言語基（ウ系強変化ラ）
 る（る）ウ系ラ活用助辞（現在形）
 こと（こと）形式体言（体用の類）
 の（の）連体助辞（*）
 な（な）形容語基（イ系ナイ）
 い（い）イ系ナイ活用助辞（現在形）
 よう（よう）ムード接辞（ムード接辞よう）
 に（に）副用助辞（副用に）
 す（す）用言語基（サ変格）
 る（る）サ変格活用助辞（現在形）
 こと（こと）形式体言（体用の類）
 を（を）格助辞（格を）
 決意（けつい）用言語基（ウ系サ変）
 し（し）語基連接辞（ウ系サ変）
 、（、）区切り記号（点）
 こ（こ）指示語基（*）
 こ（こ）指示接辞（指示接辞こそど）
 に（に）格助辞（格に）
 主権（しゅけん）体言語基（自立体言語基）
 が（が）格助辞（格が）
 国民（こくみん）体言語基（自立体言語基）
 に（に）格助辞（格に）
 存（そん）用言語基（ウ系サ変）
 す（す）語基連接辞（ウ系サ変）
 る（る）ウ系サ変活用助辞（現在形）
 こと（こと）形式体言（体用の類）
 を（を）格助辞（格を）
 宣言（せんげん）用言語基（ウ系サ変）
 し（し）語基連接辞（ウ系サ変）
 、（、）区切り記号（点）
 こ（こ）指示語基（*）
 の（の）連体助辞（*）
 憲法（けんぽう）体言語基（自立体言語基）
 を（を）格助辞（格を）
 確定（かくてい）用言語基（ウ系サ変）
 す（す）語基連接辞（ウ系サ変）
 る（る）ウ系サ変活用助辞（現在形）
 。（。）区切り記号（マル）
 EOS1
 1 sentence(s)
 starchild%

3.4 プラットホーム

JUMAN システムを動作させるためには UNIX OS が搭載されているコンピュータが必要である。UNIX OS は一般には、ワークステーションと呼ばれるコンピュータで利用されている。工学・理学系の分野では一般的に使われるものの、文系・社会科学系の分野で使われることは稀である。本節では、安価なパソコンを UNIX 搭載マシンにするための PC-UNIX について解説する。

3.4.1 UNIX OS

形態素解析システム JUMAN は UNIX OS が稼働するワークステーションで開発されたもので、本来はワークステーション上での利用が想定されている。しかしながら、現在、PC-UNIX が安価な値段でもしくは無償で入手可能となっており、こうしたシステムをパソコンに導入することによって、JUMAN システムを利用することができる。

- 無償提供されているパソコン用 UNIX OS

Linux Linus Torvard 氏が作成した UNIX システムで、コンパクトでありながら性能も高く、広く使われています。

***BSD** Free BSD/Net BSD など BSD 系の UNIX OS である。特に Free BSD は、カリフォルニア大学バークレー校の BSD UNIX から作成された 4.4 BSD-Lite を基本にしています。

MkLinux Power Macintosh で稼働する Linux である。Power Macintosh を実用的な UNIX マシンとして利用するのに十分な機能を持っている。

- 商用ベースで提供されているパソコン用 UNIX OS

Solaris x86 SUN ワークステーションの UNIX OS である Solaris 2.X をパソコンで利用できるようにしたものである。SUN SOFT から販売されている。

SCO UnixWare AT&T 製の SVR4 を基本にした UNIX OS である。ノベル社が販売していたが、現在は、SCO 社がリリースしている。

Linux MLD Linux MLD(Linux Media Lab. Distribution) は、ハードウェアや UNIX の知識がなくても Linux のインストールが容易にできるようにした製品である。

MachTen マッキントッシュのフォルダに UNIX OS をインストールするもので、Macintosh OS と BSD OS が共存するかたちで UNIX OS が動作する。Power PC 用の Power MachTen と 68K マッキントッシュ用の Professional MachTen がある。

3.4.2 JUMAN on Windows95/NT

JUMAN システムの形態素解析エンジンを Microsoft Windows へ移植する努力が行なわれている。

1. JUMAN for Windows

日本電子計算(株)が奈良先端科学技術大学院大学と共同で、JUMAN システムの形態素解析エンジンのMicrosoft Windows への移植を進めている。1997年2月下旬を目処に開発が進んでいる。同年、3月上旬には、本学で利用可能になる予定である。

2. 株式会社・富士通研究所 Breakfast システム

JUMAN システム用に記述された文法規則と辞書データから独自の形態素解析アルゴリズムによってパーザーを作成するシステムである。Windows95/NT で動作する。1997年1月にリリースされる予定である。

3.5 他言語の形態素分析(PC-KIMMO)

3.5.1 PC-KIMMO

PC-KIMMO は、LISP⁶上で開発されたKIMMO パーザーをパーソナルコンピュータ (IBM-PC(AT互換機) とマッキントッシュ) に移植したものである。KIMMO パーザーとは、Kimmo Koskenniemi[9] の Two-level morphology モデルに基づく形態素分析の考え方をコンピュータで実現したものである。形態素分析のための言語記述の妥当性を試すことができる、分析のためのパーザーを含めた言語処理環境である。

ある言語を取り上げ、その形態素分析のための言語記述を行なう場合、PC-KIMMO では次の情報が必要である。

1. 規則の情報(規則ファイル)
文字と語の綴りを特定する
2. 語彙(レキシコン)の情報(語彙ファイル)
語彙とその注釈、形態上の制約を記述する

PC-KIMMO は、Two-level phonology という言語記述モデルを背景に持つ。このモデルでは、語彙とそのことばとしての実現形態である表層表現の間に直接的な対応関係があるという立場をとる。例として、“spy+s”の解釈を挙げる。

表 4: Two-level phonology による解釈

Lexical Representation	'	s	p	y	+	0	s
Surface Representation	0	s	p	i	0	e	s

ここで、'はストレスを示し、+は形態素境界を、0は空列を示す。語彙表現と表層表現との対応関係を見ると、語彙表現のストレスは、表層表現の0に、同様に“y”は“i”に、形態素境界は、0

⁶LISP: List Processor. Prolog と並ぶ人工知能分野の基本的なコンピュータ言語である。マサチューセッツ工科大学の J.McCarthy 教授が考案した。

に対応し、0が“e”に対応していることが分かる。規則は、語彙表現と表層表現の二つのレベルの対応関係を次のように記述することができる。

$$y:i \Rightarrow @:C_+ : 0 \quad (6)$$

この規則記述では方向性はない。PC-KIMMOでは、この性質を利用して、単語の形態素生成と形態素分析を行なうことができる。形態素生成では、語彙形式を入力し、規則を適用することで表層表現を得る。形態素分析では、表層表現を入力し、規則を適用して、語彙形式と形態属性を得ることができる。PC-KIMMOシステムの概念構成図を図4に示す。

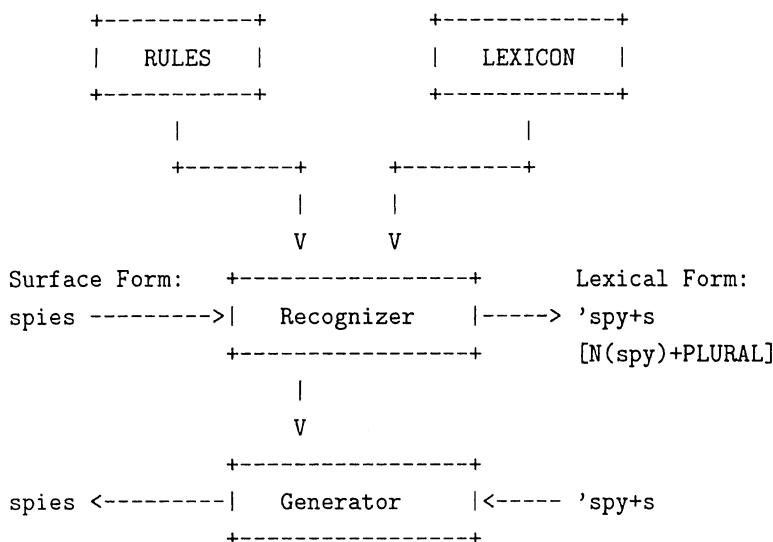


図 4: PC-KIMMO システムの概念構成図

PC-KIMMO は、次のシステムで利用可能である。

- MS-DOS
- Macintosh
- UNIX System V (SCO UNIX V/386 and AUX), 4.2 BSD UNIX

3.5.2 PC-KIMMO をより有効に使うためのソフトウェア

PC-KIMMO システムをより効果的に利用するためのソフトウェアがある。

KGEM PC-KIMMO 用のルールコンパイラ

KTEXT KTEXT は、PC-KIMMO パーザーを用いたテキスト処理アプリケーションである。テキストを入力した後、それらを単語分けし、それぞれの単語に対して規則を適用することで、文章の形態素分析を行なう

Englex 20,000 のエントリーを持つ英語の語彙辞書と分析規則である。利用者は、自ら規則や語彙辞書を作成することなく英語の形態素分析を行なうことができる

3.5.3 PC-KIMMO Version 2 における改良

現在、PC-KIMMO は Version 2 に更新されて、単語解析能力が向上している。Unification-Based Word grammar をサポートする。例えば、“enlargements” という単語を “en” + “large+ment” + “s” というように “stem”(語幹) と “inflection”(語尾変化) に分析するが、形態的な分析結果だけでなく、図5のように単語の階層的な分析を行なうことができる。

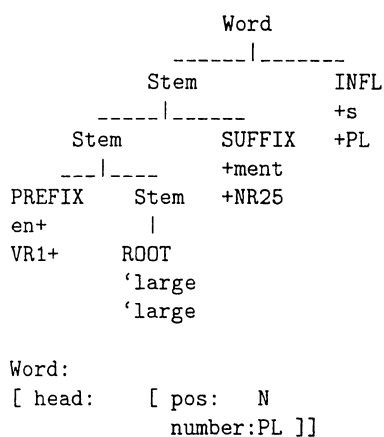


図 5: “enlargements” の分析例

3.5.4 形態素分析例

PC-KIMMO を使った形態素分析例を示す。PC-KIMMO シェル上で *recognize* コマンドを利用する。

```

PC-KIMMO> recognize
recognizer>>enlargements
en+'large+ment+s   VR1a+'large+NR25+PL

```

enlargements の分析結果が示されている。PC-KIMMO Version 2 を利用すると図6に示す単語の分析結果が表示される。

```

1:
      Word
    -----|-----
      Stem      INFL
    -----|-----
      Stem      SUFFIX  +s
    -----|-----
      Stem      +ment
PREFIX Stem  +NR25
en+      |
VR1a+  ROOT
      'large
      'large

Word:
[ cat:  Word
  head:  [ agr:  [ 3sg:  - ]
          number:PL
          pos:  N ]
  root:  'large
  root_pos:AJ
  clitic:-
  drvstem:- ]

1 parse found

```

図 6: “enlargements” の解析結果

形態素生成を行なうには、*generate* コマンドを使う。形態素情報から単語を生成する。例を以下に示す。

```

PC-KIMMO> generate
generator>>spy+s
spies

```

spy に複数属性(+s)をつけて生成させたものである。このように属性として複数形や過去形などを指定することによって、語彙から表層表現を生成する。但し、不規則変化する語彙から単語は生成されない。

3.6 その他

Xerox 社のフランスのサイトには、欧州の各言語の形態素解析や構文解析が可能なホームページがある。

URL www.xerox.fr/research/mltt/Tools/

このサイトにインターネットを使ってアクセスすると図7のような画面が現れ、メニューに挙がる言語の分析をインタラクティブに行なうことができる。

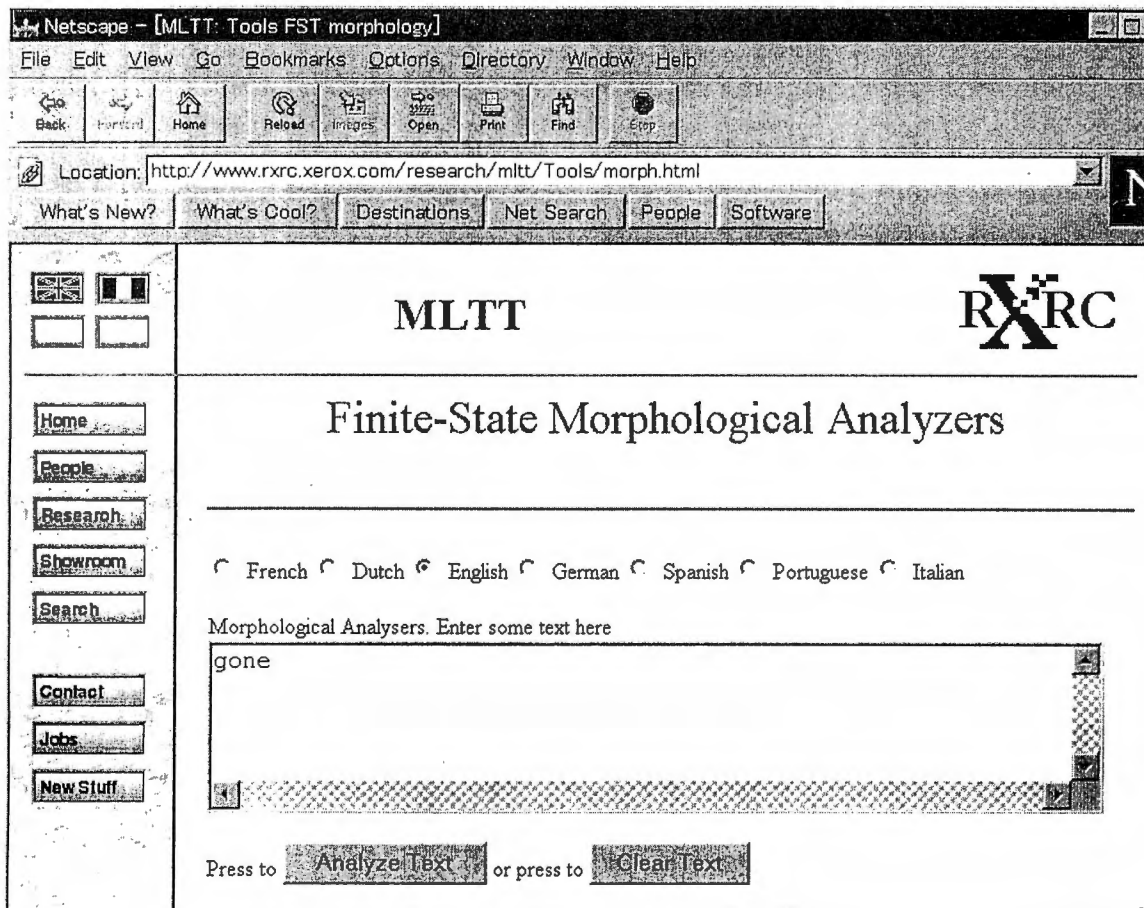


図 7: Xerox 社のフランスのサイト

4 おわりに

本稿は、情報技術 (Information Technology: IT) を利用した基本語彙・基本構文の分析ツールについての調査報告である。これら分析ツールは、これまでの「言語研究」1～「言語研究」6で得られた理論的な枠組を実データに応用するためのものである。理論的な枠組を基本に情報技術を応用することで、電子化されたテキストデータやコーパス資料などのデータベースを効率良く操作することが可能になり、規模の大きなデータで理論検証や実証が行なえるのである。

次の点に考慮して分析ツールの調査を行なった。(1) パソコン (Windows95/NT, Macintosh, DOS/V 等) で利用可能なものであること、(2) 基本的にフリーソフトであって、入手が容易に可能であるもの、(3) 利用する上で、技術的な詳細に立ち入らなくてよいということに視点を置いた。

現在、筆者の研究室では、本稿で紹介した分析ツールを使える環境にしてある。パソコンベースの UNIX 環境についても各種揃えている。文系大学の研究者にとっては、情報技術そのものの技術の複雑さではなく、情報技術を利用するための情報環境の整備において、より一層の技術の複雑さが存在していると考えられる。今後、情報環境の整備の効率的なアプローチや、他の研究機関との効果的な協力体制の確立を目指してゆく予定である。

付録

A JUMAN on UNIX

A.1 JUMAN/ChaSen

日本語形態素解析システム ChaSen 1.0 は、奈良先端科学技術大学院大学・松本研究室から公開されている。システムを入手するには以下に FTP アクセスする。

FTP address ftp.aist-nara.ac.jp (IP address: 163.221.11.11)

User Name ftp

password メールアドレス

FTP ログイン後, binary データとして次のファイルを get する。

/pub/nlp/tools/chasen/chasen-sys1.0b2-dic1.0.tar.gz

尚, JUMAN/ChaSen に関する最新情報は次のホームページを参照すること。

URL <http://cactus.aist-nara.ac.jp/lab/nlt/chasen.html>

A.2 JUMAN 3.0

日本語形態素解析システム JUMAN 3.0 は、京都大学・長尾研究室から公開されている。システムを入手するには以下に FTP アクセスする。

FTP address pine.kuee.kyoto-u.ac.jp (IP address: 130.54.31.90)

User Name ftp

password メールアドレス

FTP ログイン後, binary データとして次のファイルを get する。

/pub/juman/juman3.0.tar.gz

尚, JUMAN 3.0 に関する質問等は, 下記のメールアドレス宛に連絡する。

juman@pine.kuee.kyoto-u.ac.jp

B JUMAN on Widnows95/NT

[URL](http://www.fujitsu.co.jp) <http://www.fujitsu.co.jp>

C PC-KIMMO on Mac/Widnows

Macintosh もしくは MS-DOS, Widnows95 で動作する PC-KIMMO について, サイトからのダウンロード, インストール手順, 基本的な使い方を説明する.

C.1 パーザーエンジン部のダウンロード

[URL](http://www.sil.org/pckimmo/) <http://www.sil.org/pckimmo/> から “PC-KIMMO Version 2 (1995)” を選択し, さらにその下位メニューにおいて “Executables for PC-KIMMO 2 (and related software)” を選択する.

MS-DOS, Windows95/NT で動作する WINDOWS 版と, マッキントッシュで動作する MAC 版の両方が提供されている.

WINDOWS 版 PCK21B4.ZIP - PC-KIMMO 2.1b4 を選択しダウンロードする

MAC 版 PC-KIMMO21B4.SEA.HQX - PC-KIMMO 2.1b4 を選択しダウンロードする

C.2 Englex のダウンロード

上記のファイルはいずれも PC-KIMMO の本体プログラムに相当し, いわゆるパーザーエンジンとして機能する. 形態素分析を行なうためには, 本体とは別に解析規則と辞書が必要になる. 一般には, 利用者が希望する言語について, 規則と辞書を作成することになるが, 英語に限っては形態素解析の規則と辞書 (Englex) が予め用意されている. 必要ならば Englex を同サイトからダウンロードする.

[URL](http://www.sil.org/pckimmo/) <http://www.sil.org/pckimmo/> から “PC-KIMMO Version 2 (1995)” を選択し, 下位メニューから “Englex for PC-KIMMO 2” を選択する. WINDOWS 版, MAC 版のいずれか必要なデータをダウンロードする. 圧縮ファイルになっているので, ダウンロード後, 解凍し利用可能状態にする.

C.3 PC-KIMMO 利用

C.3.1 利用の準備

PC-KIMMO を利用する前に, 若干の準備が必要である. 手順を示す.

1. engl20b5 内のファイルをすべて pck21b4 にコピーする
2. 以下の (a) もしくは (b) を実行する. ((b) を推奨する.)

- (a) engl20b5 というフォルダ内の “englex.tak” ファイルの「規則と辞書ロード」の項目をエディタで編集する。
load x Mydisk の “Mydisk” 部分をあなたの利用しているパソコンのファイル構成に応じて適切なパス名に変える。
- (b) engl20b5 というフォルダ内の “englex.tak” ファイルを以下のようにエディタで編集する。

```
load rules english.rul
load lexicon english.lex
load grammar english.grm
```

C.3.2 PC-KIMMO の起動

MS-DOS/Windows95/NT pck21b4 にある Windows95/NT では “Wpckimmo.exe”, DOS では “pckimmo.exe” を起動する。

Macintosh pc-kimmo.exe を起動する

起動後の PC-KIMMO パーザーの使い方は共通である。

C.3.3 PC-KIMMO の使い方

PC-KIMMO シェルと呼ばれるコマンドインタプリタが PC-KIMMO パーザーとの間のインタフェースを提供している。

? を入力すると、利用可能なコマンド一覧が表示される。

```
PC-KIMMO> ?
```

PC-KIMMO>?

Command, one of the following:

cd	file	log	show
clear	generate	quit	status
close	help	recognize	synthesize
compare	list	save	take
exit	load	set	

シェル上で、help コマンドの引数としてコマンド名を入れることで、当該コマンドの機能説明を得ることができる。例えば、“log” コマンドに関する情報を知りたいときは、次のような入力を行なう。

```
PC-KIMMO> help log
```

KIMMO パーザーを実行可能状態にするには、規則ファイル(rule,grammar)と辞書ファイル(lexicon)をロードする必要がある。次の方法によって行なう。

- load コマンドで、それぞれのファイルを指定してロードする
- englex.tak ファイルを利用してロードする

```
PC-KIMMO> take englex.tak
```

D ソフトウェアの入手について

D.1 PC-UNIX

D.1.1 Solaris 2.5.1

製品名 日本語 Solaris 2.5.1

開発元 Sun Soft

販売元 日本サンソフト

〒158 東京都世田谷区用賀4-10-1(SBSタワー)

連絡先 TEL 03(5717)5010(代表)

D.1.2 SCO UnixWare

製品名 SCO UnixWare

開発元 SCO

販売元 (ネットワーク等を通じて入手する)

連絡先 [URL](http://www3.sco.com/Products) http://www3.sco.com/Products

D.1.3 Linux

製品名 Linux

開発元 -

販売元 (ネットワーク等を通じて入手する)

連絡先 [URL](http://www.fokus.gmd.de/linux) http://www.fokus.gmd.de/linux

D.1.4 Linux MLD

製品名 Linux MLD

開発元 -

販売元 メディアラボ株式会社

〒101 東京都千代田区外神田3-20-7 第二北沢ビル5階

連絡先 TEL 03(5294)7255

D.1.5 PANIX

製品名 PANIX

開発元 -

販売元 A.I.SOFT,INC

連絡先 [URL](http://www.aisoft.co.jp) http://www.aisoft.co.jp

D.1.6 *BSD

製品名 FreeBSD/NetBSD/OpenBSD

開発元 -

販売元 (ネットワーク等を通じて入手する)

連絡先 [URL](http://minnie.cs.adfa.oz.au/BSD-info/BSD.html) http://minnie.cs.adfa.oz.au/BSD-info/BSD.html

D.1.7 MkLinux

製品名 MkLinux

開発元 Apple 社

販売元 (ネットワーク等を通じて入手する)

連絡先 [URL](http://www.mklinux.apple.com) http://www.mklinux.apple.com

D.1.8 MachTen

製品名 Power MachTen/Professional MachTen

開発元 TENON Intersystems

販売元 株式会社オープンテクノロジーズ

〒164 東京都中野区中央2-9-1 サン・ロータスビル2F

連絡先 TEL 03(3365)2911(代表)

E-Mail: machten@opentech.co.jp

[URL](http://product.opentech.co.jp) http://product.opentech.co.jp

参考文献

- [1] 富田悦次, 横森貴: オートマトン・言語理論, 森北出版, 1992.
- [2] 中野洋, パソコンによる「日本語研究入門」, 笠間書院, 1996.
- [3] A.V. エイホ, B.W. カーニハン, P.J. ワインバーガー, プログラミング言語 AWK, アジソンウェスレイ・トッパン, 1989.
- [4] 植村富士夫, 富永浩之, awk でプログラミング, オーム社, 1993.
- [5] 長尾真編集, 自然言語処理, 岩波講座ソフトウェア科学, 岩波書店, 1996.
- [6] P・イングベルセン, 藤原鎮男監訳, 情報検索研究, トッパン, 1995.
- [7] 前川守, 1000 万人のコンピュータ科学, 文学編「文章を科学する」, 岩波書店, 1995.
- [8] URL <http://csugrad.cs.vt.edu/manuals/gawk>
- [9] URL <http://www.sil.org/pckimmo/>
- [10] URL <http://www.aisoft.co.jp>
- [11] URL <http://www.sun.co.jp/sunsoft.jp>
- [12] URL <ftp://ftp.aist-nara.ac.jp>
- [13] URL <ftp://pine.kuee.kyoto-u.ac.jp>
- [14] URL <http://www.xerox.fr/research/mltt/Tools/>

1 1 7 0 語 の 基 本 単 語

—トルコ語の基礎語彙に関する一考察—

川口裕司

要旨

現代トルコ語の五冊の入門書の巻末基本語彙集を分析することで1170語の基本単語を定義した。頻度分析および品詞分析を通して、その基本単語の持っている性質を明らかにしようとした。最後にこうして定義された基本単語の知識があれば、現代トルコ語の会話文と時事的テキストをどれくらい理解できるのかを検証した。その結果、基本単語 1170語は会話文を理解するために十分であることが確かめられた。

内容

はじめに

I. 基本単語の調査

I. 1. 資料体

I. 2. 調査方法

II. 基本単語の量的側面

II. 1. 頻度統計

II. 2. 基本単語の選定

III. 基本単語の質的側面

III. 1. 品詞別頻度

III. 2. 品詞別の特徴

III. 2. 1. 接続詞

III. 2. 2. 代名詞

III. 2. 3. 付属語

III. 2. 4. 感動詞

III. 2. 5. 数詞

III. 2. 6. 副詞

III. 2. 7. 形容詞

III. 2. 8. 動詞

III. 2. 9. 名詞

IV. 結論にかえて

IV. 1. 基本単語の有効性

IV. 2. 調査方法

IV. 3. トルコ語テキストの理解度

IV. 4. まとめ

付録 基本単語のアルファベット順索引

はじめに

外国語を学習しようとするとき、その言語の入門書がいわゆる「基本単語」なるものを考慮して作られているならば、学習者はその外国語により近づきやすいという見解は古くからある。その一方で、基本単語を入門書に導入しようとする

あまり、会話や例文に自然さが欠けてしまうという指摘も周知のことである。著者の個人的関心を入門書にたくさん盛り込んだために、学ぶ側の興味が薄れてしまった場合が少なくないことも我々は知っている。それにしても「基本単語」なるものは本当に存在するのだろうか？ もしあるとすればどのようなものであろうか？ 近年海外だけでなく、国内でもトルコ語の様々な入門書が相次いで出版されるようになった。初学者に対する語彙的な配慮はこれまで以上に重要な課題となっているように思われる。本学の中東語学科トルコ語専攻は『トルコ語基本語動詞700語』を語学教育研究協議会の協力を得て1994年に出版したが、こうした試みも基本的な語彙への関心の現れの一つと言えよう。

本論文において筆者はまず、「入門書を作成する上での基本的な語彙は多分存在するに違いない」という作業仮説を立てたい。その上で幾つかの入門書に現れる語彙をもとにして、ここでその仮説の妥当性を検討したいと思う。本来ならば、最初に基礎語彙に関する一般的な理論とその問題を提示し、それらを検討する必要があるのであろうが、残念ながら筆者にはそうした議論を展開できるほどの基礎語彙に関する理論も知識もない。そもそも、ここでそのような大問題と取り組むつもりもない。確かに、他の言語における基礎語彙の研究史とその批判、さらには個別言語を越えた基礎語彙の妥当性とその問題点などは、ここで行う基本単語の調査自体にとっても極めて重要な意味もっていると思うが、今後の課題にしたい。最初に断っておくが、本調査は現代トルコ語の入門書に現れる基本的な語彙に関する一つのケース・スタディーに過ぎない。

I. 基本単語の調査

I. 1. 資料体

本調査では以下の五つの入門書に現れる基本的な語彙を調査した。

1. BAYRAKTAROĞLU Arın ve Sinan (1992) Colloquial Turkish, Routledge, London and New York. (以下では[COLLOQ]と略) この本は Yusuf Mardin の旧版を Arınと Sinan Bayraktaroğluが全く新たな入門書として書き改めたもの。
2. BOZDEMİR Michel (1991) Méthode de turc, Vol 1, Langues de l'Asie - INALCO, L'Asiathèque, 1991. ([BOZDEM]と略) パリ東洋語学校のトルコ語入門書シリーズの第1巻として作成されたもの。
3. ERSEN-RASCH Margarete I. (1984) Türkisch für Sie, Wortschatz, Max Hueber Verlag. ([RASCH]と略) 会話・文法・語彙集の3巻に分けて出版されており、五つの入門書の中で一番古いが、質と量の点で他よりも優れた点が多い。
4. HALBOUT Dominique et GUZEY Gönen (1992) Le turc sans peine, Assimil. ([ASSIMIL]と略) アシミル社の外国語入門シリーズとして出版された。
5. LEWIS Geoffrey (1992) Teach Yourself Turkish. A complete course for beginners, Hodder & Stoughton, Reissued. ([LEWIS]と略) 古くからあった Lewisの入門書を改訂新版として出版したもの。

五つの入門書はトルコ語の教育に携わってきた著者が、各々の経験を生かして初級文法のエッセンスだけをまとめあげた著作であり、それぞれ个性的かつ優れた入門書と言える。今回の調査でこの五つの入門書を資料体に選んだ理由としては、主に次の三つが考えられる。

- (1) 五つの入門書は比較的最近出版された本である
- (2) 英語・独語・仏語で書かれた標準的な入門書である
- (3) 巻末に基礎語彙集が添えられている

これらの入門書にはそれぞれ実によく考えられた文法的 content と例文が盛り込まれており、巻末に記載されたトルコ語の基礎語彙集は初級学習者にとっての必須語彙として選別されたものである。筆者はそれぞれの著者のこうした文法的・語彙的な選択に信頼を寄せている。従って、ここでの語彙調査における大前提、すなわち五冊の入門書の巻末語彙集の基本語彙としての妥当性に関して、筆者はこれを敢えて問題視しない。

もちろんこの他にも優れた入門書は海外にも国内にも数多くある(参考文献を参照)。ここで得られる結論は、おそらく他の入門書の基本単語にも当てはまることを筆者は期待している。

I. 2. 調査方法

基本単語の調査は以下の方法で行った。五つの入門書の巻末にある基礎語彙集をそれぞれスキャナーで読み取り、テキストファイルによりデータベース化した。次にこれらを全て繋ぎ合わせ、ソートし、同一の単語を一つにまとめ、それぞれの語がどの入門書に現れているかを示す分類表を作成し、これを基本単語の資料体とした。

作業の途中で幾つかの問題にぶつかった。たとえば *galmak* は四つの入門書、[ASSIMIL][BOZDEM][COLLOQ][LEWIS]の巻末基礎語彙集に登録されている。この単語には「～が鳴る」「～を盗む」のような自動詞と他動詞の用法があり、本来ならばこれらは二つの異なる単語として考えるべきなのかもしれない。しかし本調査では入門書に載っている単語の項目数を優先させ、*galmak*を一つの単語として記述した。

同じように saĝ「右、健康な」は五つの入門書、[ASSIMIL][BOZDEM][COLLOQ][LEWIS][RASCH]の全てに現れるが、このうち [ASSIMIL] だけが「右」と「健康な」を別項目として扱っている。また [COLLOQ] には「右」の意味しか記載されていない。従って、単語項目数を優先させる本調査では saĝは単一の項目として扱われる。ところが逆に saĝ「健康な」を用いた慣用句 saĝol「ありがとう」は [ASSIMIL][COLLOQ][LEWIS][RASCH] に現れるため、結局 saĝと慣用句の saĝol は別項目として記述されることになる。五つの入門書においてこうした記述の不一致が見られる例を註1)に網羅的に挙げておいた。

II. 基本単語の量的側面

II. 1. 頻度統計

五つの入門書の巻末には全部で 9254の単語が載せられていた。それぞれの入門書で単語数が異なっていた。表 1 を参照。

[RASCH]	3093	(33%)	[ASSIMIL]	2090	(23%)	[COLLOQ]	1613	(17%)
[BOZDEM]	1254	(14%)	[LEWIS]	1204	(13%)			(表 1)

入門書は二つのグループに分かれる。一つは多くの基本単語を記載している [RASCH]と[ASSIMIL]であり、この二冊の巻末には全体の半数を越える 56% の単語が載せられている。これに対してもう一つのグループ [COLLOQ][BOZDEM][LEWIS]では基本単語の数が1200-1600あまりに抑えられている。

9254語の中の異なり語数は 5006語であった。入門書の巻末に現れる基本単語

の出現頻度は表 2 のようになる。

五回	370	(7%);	四回	340	(7%);	三回	460	(9%);
二回	828	(17%);	一回	3008	(60%);	(表 2)		

五回現れる、すなわち全ての入門書の巻末に記載された基本単語は全部で 370 語あり、異なり語数に占める割合は全体の 7%に過ぎない。四つの入門書に記載された基本単語の数は、五回あらわれた基本単語のそれに近い 340語であった。

II. 2. 基本単語の選定

出現頻度を示した表 2 もまた二つのグループに分かれよう。一つはいずれも 300-500以下の単語から成り立つ「五回・四回・三回」の語彙グループであり、もう一つのグループとは「二回・一回」のことである。筆者はこの場合に前者の「五回・四回・三回」こそがトルコ語の入門書における基本単語と呼ばれるに相応しいと考えるのだが、その理由を幾つか述べておこう。

理由の第一は三回と二回の間には明らかに大きな断絶がある点である（表 2 参照）。この断絶には両者の単語の性格の違いが反映されていると考えるのが妥当ではないか？ 逆に言えば、五回・四回・三回の語彙が数的にも近似しているのは、これらの単語の性質がよく似ているからに他ならない。

第二の理由は、五回・四回・三回の単語を合計すると 1170語となり、この数値は表 1 に示した入門書の基本語を抑えた [BOZDEM][LEWIS] の単語数にかなり近い。つまり入門書において基本単語の数を抑えようとすれば、結果としてこの語数あたりに落ち着くものと解釈できよう。

最後の理由は、基本単語がそれぞれの入門書においてどのように現れているのか、そのコンコーダンスの仕方にあるように思う。

四つの入門書に現れる 340語のそれぞれの入門書における現れ方には次のような特徴を見ることができる（表 3 参照）。

四回出現 340 語	
[ASSIMIL][COLLOQ][LEWIS][RASCH]	114 (34%)
[ASSIMIL][BOZDEM][COLLOQ][RASCH]	107 (31%)
[ASSIMIL][BOZDEM][LEWIS][RASCH]	53
[BOZDEM][COLLOQ][LEWIS][RASCH]	33
[ASSIMIL][BOZDEM][COLLOQ][LEWIS]	33

表 3

最初の二つのコンコーダンスのタイプ、[ASSIMIL][COLLOQ][LEWIS][RASCH]と [ASSIMIL][BOZDEM][COLLOQ][RASCH]は、この二つで四回出現の単語全体の 65%を占める。両方のタイプは[BOZDEM]に記載されているのか、[LEWIS]に記載されているのかの違いである。また残りの三つのタイプ [ASSIMIL][BOZDEM][LEWIS][RASCH]と [BOZDEM][COLLOQ][LEWIS][RASCH]と [ASSIMIL][BOZDEM][COLLOQ][LEWIS]にも [BOZDEM]と [LEWIS]が含まれているため、結局、先にも述べたように [BOZDEM]と [LEWIS]が基本単語を選択する際の試金石になっているという考えは、間違っていないように思える。

三つの入門書に現れる 460語のコンコーダンスを調べてみよう（表 4 参照）。

三回出現 460 語	
[ASSIMIL][COLLOQ][RASCH]	120 (26%)
[ASSIMIL][LEWIS][RASCH]	71 (15%)
[ASSIMIL][BOZDEM][RASCH]	68 (15%)
[BOZDEM][COLLOQ][RASCH]	48
[COLLOQ][LEWIS][RASCH]	44
[ASSIMIL][BOZDEM][COLLOQ]	33
[ASSIMIL][COLLOQ][LEWIS]	26
[BOZDEM][LEWIS][RASCH]	25

[ASSIMIL][BOZDEM][LEWIS]	14	表 4
[BOZDEM][COLLOQ][LEWIS]	11	

表 4 では [BOZDEM] と [LEWIS] の他に、[COLLOQ] における単語の有無も重要になる。最初の三つのコンコーダンスのタイプ、[ASSIMIL][COLLOQ][RASCH] と [ASSIMIL][LEWIS][RASCH] と [ASSIMIL][BOZDEM][RASCH] には全体の 56% が含まれるが、この三つのタイプは [BOZDEM] と [COLLOQ] と [LEWIS] における現れ方の違いによってのみ区別される。

上に述べた表 3 と表 4 のコンコーダンスに対して、基本単語を構成しないと思われる二回出現の単語を調べてみよう（表 5）。

二回出現	828 語	
[ASSIMIL][RASCH]	208	(25%)
[COLLOQ][RASCH]	146	(18%)
[LEWIS][RASCH]	121	(15%)
[ASSIMIL][COLLOQ]	88	
[BOZDEM][RASCH]	77	
[BOZDEM][COLLOQ]	51	
[ASSIMIL][BOZDEM]	47	
[ASSIMIL][LEWIS]	43	
[COLLOQ][LEWIS]	32	
[BOZDEM][LEWIS]	15	表 5

[ASSIMIL][RASCH] に共通する語彙が多いのは、両者がいずれも多くの基本単語を巻末に載せているのだから当然のことである。次の二つのタイプ [COLLOQ][RASCH] と [LEWIS][RASCH] をあわせると 58% の語彙をカバーするが、このことから [RASCH] が [COLLOQ] や [LEWIS] と共通する単語を巻末に載せているということしか分らない。

以上の分析を通して言えることは、五回・四回・三回現われる合計 1170 個の

単語がトルコ語の入門書における基本単語と呼ぶべきものであり、それはおよそ[BOZDEM]と[LEWIS]の巻末に載せられた単語数に近いということである。次に基本単語を質的な側面から分析してみよう。

Ⅲ. 基本単語の質的側面

Ⅲ. 1. 品詞別頻度

1170語からなる基本単語を品詞別に分類してみた。品詞は竹内 (1989) の辞書における品詞分類を採用した。但し、竹内 (1989) には数詞の範疇がないためこれを加えた。また burada (bura+da), buyurun (buyurmakの活用形) は竹内 (1989) では独立した見出し語を構成しないため、品詞が記載されていない。従ってここでは便宜上、buradaを副詞、buyurunを感動詞として分類した。

名詞	666	(57%);	動詞	195	(17%);	形容詞	154	(13%);
副詞	71	(6%);	数詞	26	(2%);	感動詞	22	(2%);
付属語	13	(1%);	代名詞	13	(1%);	接続詞	10	(1%);

表 6

品詞別の頻度は表 6 のように極めて不均衡なものになる。数詞・感動詞・付属語・代名詞・接続詞は、それぞれが非生産的な言語形式であり、新語をたくさん生産する可能性に乏しい。これに対して、名詞・動詞・形容詞・副詞は生産的な言語形式と考えられよう。表 6 の頻度はそうした品詞の性質の違いが現れただけに過ぎない。

Ⅲ. 2. 品詞別の特徴

品詞別の基本単語にはどのような特徴があるのかを頻度の低いものから逐一検討しておこう。一覧表中の（）内は出現回数を表す。

Ⅲ. 2. 1. 接続詞 10語

ama	しかし	(5)	günkü	なぜならば～	(5)
eğer	もしも	(3)	fakat	しかし	(4)
hem...hem	～も～も	(3)	ne...ne	～も～もない	(3)
ve	そして	(5)	veya	または	(4)
yani	すなわち	(4)	yoksa	それとも	(4)

逆接接続詞 ama, fakatがいずれも基本単語の中に入る。

Ⅲ. 2. 2. 代名詞 13語

人称代名詞

ben	わたし	(5)	biz	私たち	(5)
sen	君	(5)	siz	あなた	(4)
o	彼・彼女・それ	(5)	onlar	彼ら・彼女ら・それら	(3)
onun	彼の・彼女の・その	(3)	kendi	自身	(4)
kim	誰	(5)			

指示代名詞他

bu	これ	(5)	hep	すべて	(5)
hepsi	すべて	(5)			
şu	あれ	(5)			

人称代名詞 (ben, biz, sen, siz, o, onlar) は全て含まれている。ここでは

hepと hepsiの使い分けが問題となる。hepには Ovanın tüm kuşları hep bir ağızdan ötüştü. (Y. Kemal, ince Memed)「巢の全部の鳥たちが、みな一斉に鳴いた」のような副詞的用法がある。

Ⅲ. 2. 3. 付属語 13語

beri	～以来	(5)	de	～も	(4)
dolayı	～のため	(3)	gibi	～のような	(5)
göre	～によれば	(5)	için	～のために	(5)
ile	～とともに	(4)	ise	～の方は	(4)
kadar	～ほど	(5)	rağmen	～にもかかわらず	(3)
sayesinde	～のおかげで	(3)	tarafından	～によって	(3)
üzere	～のために	(4)			

学習者への配慮からか、多くの入門書に付属語のとり格語尾が記載されている。

-den beri [ASSIMIL][BOZDEM][LEWIS], -den dolayı [LEWIS], -e göre [ASSIMIL][BOZDEM][LEWIS], -e kadar [ASSIMIL][BOZDEM][LEWIS], -e rağmen [ASSIMIL][LEWIS][RASCH].

Ⅲ. 2. 4. 感動詞 22語

affedersiniz	すみませんが～	(3)	allahısmarladık	さようなら	(3)
aman	どうか	(3)	buyurun	どうぞ	(3)
efendim	つまりその	(3)	estağfurullah	どういたしまして	(3)
evet	はい	(5)	güle güle	いってらっしゃい	(4)
günaydın	おはようございます	(4)	haydi	さあ	(4)
hayır	いいえ	(5)	inşallah	できれば～したい	(4)
işte	ほら	(5)	maşallah	これはすごい	(4)
merhaba	こんにちは	(5)	mersi	ありがとう	(3)
peki	わかった	(3)	sağol	ありがとう	(4)
sakın	決して	(3)	tamam	OK	(5)
ya	～じゃないの	(5)	yazık	残念だ	(3)

この品詞には様々な言語要素が含まれており、全体として曖昧なものになっている。まず本来的に感動詞と呼べそうなものとしては、aman, maşallah, sakın, yazık等が挙げられよう。しかしこのうち amanと sakınは統辞的な自律性が他に比べて弱く、前者は命令文や感嘆文と、後者は否定命令文と共に用いられるのが一般的である。

Aman ne güzel tesadüf. (Aziz Nesin, imza Elçisi)
「なんてすてきな偶然なんだ」

gevrende dolaşanlara kapılma sakın. (A.T. Oflazoğlu, Kösem Sultan)
「君の回りをうろついてる奴等にだまされるな」

しかし以下の例では統辞的な自律性が比較的強い。

Aman, Murat Paşam! (A.T. Oflazoğlu, Kösem Sultan)
「どうかお願いします、ムラト・パシャ殿！」

Sakın ha! 「絶対だめだぞ」 (ibid.)

他の要素としては、allahısmarladık, estağfurullah, güle güle等の挨拶表現がある。また疑問文への返答として用いられる evet, hayır, tamamがある。最後に haydi, efendim, işte, yaのような交話的要素もある。

Ⅲ. 2. 5. 数詞 26 語

0 — 1 0

sıfır 0 (3)
iki 2 (5)
dört 4 (4)

bir 1 (5)
üç 3 (5)
beş 5 (4)

altı 6 (4)
sekiz 8 (4)
on 10 (5)

yedi 7 (3)
dokuz 9 (4)

20—100

yirmi 20 (4)
kırk 40 (5)
altmış 60 (3)
seksen 80 (4)
yüz 100 (5)

otuz 30 (4)
elli 50 (5)
yetmiş 70 (4)
doksan 90 (4)

100以上
bin 千 (5)

milyon 百万 (5)

序数詞

birinci 最初の (3)
üçüncü 三番目の (3)
çeyrek 四分の一 (5)

ikinci 二番目の (4)

基本単語には0—10 (bir-on)まで全て、20 (yirmi)、30 (otuz)、40 (kırk)—100 (yüz)、千 (bin)と百万 (milyon)の他に çeyrek「4分の1」がある。ちなみに buçuk「半分の」と yarım「半分の」は形容詞、yarı「半分」は名詞として分類した。序数詞はbirinci, ikinci, üçüncüだけが基本単語の中に入る。yüzには「100」以外に「顔、表面」の意味があるため名詞の項目にも記載した。

Ⅲ. 2. 6. 副詞 71 語

acaba ～かな (5)
artık もう～ (5)
bazen ときどき (3)
bence 私としては (3)
bile ～さえも (4)
birden 一度に (3)
böyle このように (5)

ancak ただ (3)
aslen 元は (3)
belki たぶん (4)
beraber いっしょに (4)
biraz 少し (5)
birlikte いっしょに (3)
boyunca ～の間ずっと (3)

büsbütün	まったく	(3)	burada	ここで	(3)
çabuk	すぐ	(4)	çok	とても	(5)
çoktan	ずっと前	(4)	daha	まだ	(5)
dahi	～もまた	(3)	dahil	～をふくめ	(4)
değil	～ではない	(5)	devamlı	絶え間ない	(3)
en	もっとも	(5)	erken	早く	(5)
eskiden	以前	(3)	galiba	おそらく	(4)
gayet	とても	(4)	geç	遅い	(5)
geçe	～過ぎに	(3)	gene	また	(4)
gittikçe	次第に	(3)	hakikaten	本当に	(3)
hariç	～を除いて	(3)	hâlâ	いまだに	(4)
hem	さらに	(5)	hemen	すぐ	(5)
hemen hemen	ほとんど	(3)	henüz	まだ～ない	(4)
herhalde	きっと	(3)	hiç	まったく～ない	(5)
kala	～前に	(4)	lütfe	どうぞ	(4)
maalesef	残念ながら	(5)	mesela	たとえば	(4)
ne kadar	どれほど	(3)	ne zaman	いつ	(3)
neden	なぜ	(4)	nerede	どこで	(3)
nereden	どこから	(4)	neredeyse	どこであろうと	(3)
nihayet	ついに	(4)	önce	はじめに	(5)
örneğin	たとえば	(3)	öyle	そのように	(5)
özellikle	特に	(3)	oldukça	かなり	(4)
orada	そこで	(3)	pek	とても	(5)
sadece	単に	(5)	sahi	ほんとに	(3)
sanki	まるで	(4)	sonra	あとで	(5)
şimdi	いま	(5)	şöyle	そのように	(4)
tabii	もちろん	(4)	yakında	近くに	(3)
yerine	～の代わりに	(3)	yine	まだ	(4)
zaten	もともと	(3)			

この範疇の中には bazen, birden, ne zamanのように時を表す副詞、burada, neredenのような場所を表す副詞、beraber, böyle, nedenのように様態を表す副詞、çok, ne kadar, oldukça, pekのような程度や量を表す副詞が含まれる。疑問を表す hangi「どの」と nasıl「どんな」は形容詞に含めた。

ところでトルコ語の場合、副詞と形容詞の境界を厳密に定義することは困難である。たとえば竹内 (1989) の辞書によると、hızlıの項は「(形)速い、(副)はげしく、速く」と記述されているが、反対語である yavaş の項は「(形)のろい、

おそい、ゆっくりした」という記述しかない。ところが Türkçe Sözlük (1982) の辞書では逆に hızlı は「sıfat 1. Çabuk, seri (形容詞 1. 速い、すばやい)」と記述され、yavaş は「sıfat ve belirteç 1. Hızlı olmayan (形容詞と副詞 1. 速くない)」と記されている。確かにこれらの語には形容詞用法と副詞用法の両方がある。

Çok hızlı bir at. (Yaşar Kemal, ince Memed)
「それはとても速い馬だ」(形容詞用法)

yıllarca süren bir eğitim alırken hızlı yazmaya alışıyorlar.
(NOKTA 10-16 aralık 1995) 「何年にも及ぶ教育を受けるうちに彼らは速く書く習慣がついてくる」(副詞用法)

Uçak yavaş yavaş yükseliyordu. (Rıfat Ilgaz, Hava Dolmuşu)
「飛行機はだんだんと上昇していった」(副詞用法) 註2)

ここでは便宜的に hızlı と yavaş は両方とも形容詞として分類した。

本調査においても、分類の都合上、伝統的な品詞分類を採用しているが、言うまでもなくギリシア・ラテン語文法における伝統的な品詞の枠組みの中にトルコ語を無理やり当てはめられないことは、上の例を見ても明らかである。

竹内 (1989) では lütfen 「どうぞ」や maalesef 「残念ながら」は副詞とされるが、既に見た感動詞の中に含めることもできよう。

最後に副詞として興味深いものに bence 「ぼくとしては」や yerine 「～の代わりに」が挙げられる。例をあげておこう。

Bence evi ararlar bugün. (Y. Kemal, ince Memed) 「俺の考えじゃ、奴等はきょう家を搜索にくるぞ」

perde yerine eski gazete kâğıtlarıyla örttü... (Aziz Nesin, insanlar Uyanıyor) 「カーテンの代わりに古い新聞紙で覆った」

前者の語尾 *-ce* は副詞を作る語尾である。bence は例文のように一般に文副詞として機能する。bence は [ASSIMIL][COLLOQ][RASCH] に記載されているが、他の sence 「君の考えでは」と sizce 「あなたの考えでは」は [RASCH] だけが巻末の語彙集に載せている。

基本副詞の中に形容詞 bütün の強調形 büsbütün まったく (3) が含まれていることも指摘しておこう (註3)。

Ⅲ. 2. 7. 形容詞 154語

ここでは形容詞をその形容詞と意味的にペアになる単語があるかないかによって幾つかの範疇に分けてみた。そうすると、まず意味的なペアを考える必要のない二種類の形容詞、色彩を表す形容詞と疑問形容詞のグループが抽出された。

色彩形容詞

ak 白い (3), beyaz 白い (4), kara 黒い (4), kırmızı 赤い (5), mavi 青い (4), pembe ピンクの (3), sarı 黄色い (5), sarışın ブロンドの (4), siyah 黒い (5), yeşil 緑色の (5)

疑問形容詞

hangi どの (4), kaç いくら (5), nasıl どんな (5), ne なんの (5)

次に 1170語の基本単語の中に意味的なペアが存在する形容詞を挙げておく。* 記号の付いたものは巻末基本語彙の中に記載のない単語を表す。

ağız 空腹の (4) - boş からの、暇な (4) - dolu いっぱいの (4)
 açık 開いた、薄い (5) - kapalı 閉じた (4)
 ağır 重い (4) - hafif 軽い (4)
 akıllı 利口な (3) - akılsız 愚かな (3) - deli 気違いの (4)
 alçak 低い (3) - yüksek 高い (5)
 aynı 同じ (4) - başka 別の (5) - diğer 他の (3) - öbür もう一つの
 (3) (ayrı 「別の」は[LEWIS][RASCH]のみ)
 az 少ない (5) - birçok たくさんの (3) - fazla より多くの (4)
 (副詞 çok たくさんの)
 bazı 或る (5) - birkaç 二三の (4) - tek ただ一つの (5) -
 yalnız 単一の (5)
 bekar 独身の (3) - evli 結婚している (5) - nişanlı 婚約した (3)
 bol ゆとりのある (4) - dar 狭い (4) - geniş 広い (4)
 buçuk 半分の (5) - yarım 半分の (5) - bütün すべての (5) (*parçalı)
 büyük 大きい (5) - küçük 小さい (5) - ufak 小さい (3)
 ciddi 真面目な (4) - çalışkan 勤勉な (4) - tembel 怠惰な (4)
 çirkin 醜い (3) - güzel 美しい (5)
 eksik 不足の (3) - tam ちょうど (5)
 eski 古い (5) - yeni 新しい (5) - taze 新鮮な (5)
 fakir 貧しい (4) - zengin 金持ちの (4)
 fena 悪い (5) - haklı 正しい (5) (haksız 正しくない [RASCH])
 geçen 前の (3) - gelecek 次の (4) - geçmiş 過ぎた (4)
 genç 若い (5) - yaşlı 年取った (4)
 hasta 病気の (5) - sağ 健康な (5)
 hızlı 速い (4) - yavaş のろい (5)
 iyi よい (5) - kötü 悪い (4)
 kısa 短い (4) - uzun 長い (5)
 kirli 汚れた (3) - temiz 清潔な (4)
 koyu 濃い (3) - açık 開いた、薄い (5)
 kuvvetli 力のある (3) - zayıf 弱い (3)
 (güçlü 力強い [BOZDEM][RASCH] - *güçsüz)
 meşgul 忙しい (4) - boş からの、暇な (4)
 normal 普通の (3) - özel 私的な、特別の (5) (*umumi)
 pahalı 値が高い (5) - ucuz 安い (5)
 sakin 静かな (3) - gürültülü 騒々しい (3)
 serin 涼しい (3) - sıcak 暑い (5) - soğuk 寒い (5)
 uzak 遠い (5) - yakın 近い (5)
 var ある (5) - yok ～がない (5)
 yaramaz 役に立たない (3) - yararlı 役に立つ (3)

ところでトルコ語では、西洋伝統文法が定義するところの形容詞と名詞の区別も曖昧である (註4)。このため以下の単語ではペアとなる語が名詞として分類され

てしまった。

acı 辛い (4)	(名詞 tatlı デザート、甘い)
aydın 明るい (4)	(名詞 karanlık 暗やみ、暗い)
doğru まっすぐな (5)	(名詞 yanlış 間違い、間違いの (4))
kolay 簡単な (5)	(名詞 zor 困難、むずかしい)
ilk はじめの (5)	(名詞 son 最後、最後の (5))

次の形容詞は意味的にペアをなす単語が 1170語の基本単語の中にはないが、五つの入門書の巻末基本語彙集のいずれかに記載されている単語である。

basit 単純な (3)	(karmaşık 複雑な [LEWIS])
dikkatli 注意深い (3)	(dikkatsiz 不注意な [RASCH])
derin 深い (5)	(sığ 浅い [BOZDEM])
ince 細い (3)	(kalın 太い、厚い [LEWIS])
kuru 乾いた (3)	(nemli 濡れた [COLLOQ], *ıslak 濡れた)
lezzetli おいしい (3)	(tatsız まずい [RASCH])
memnun 嬉しい (5)	- neşeli 楽しい (3) (üzgün 悲しい [COLLOQ][RASCH])
mümkün 可能な (5)	(imkansız 不可能な [ASSIMIL][RASCH])
ölü 死んだ (3)	(canlı 生きた [ASSIMIL])
sade 質素な (5)	(lüks 贅沢な [ASSIMIL])
şekerli 砂糖いりの (4)	(şekersiz 砂糖のない [BOZDEM][RASCH])
yabancı 外国の (5)	(milli 国の [LEWIS][RASCH])

最後に入門書の巻末語彙集に意味的なペアとなる単語が見つからない形容詞を挙げておこう。

ait ～に関する (3), aksi 逆の (3), ana 主要な (3), belli 明らかな (3) - emin 確かな (3) (*belirsiz 不確かな), bozuk 壊れた (4), çıplak 裸の (3) (*giyimli 服装をした), çiğ なまの (3), emekli 退職した (3), gerçek 本当の (4) (*düzme, *kalp, *sahte 偽の), gerek ～が必要である (5) (*gerekli 必要な, *gereksiz 不必要な), hazır 用意のできた (5), her どれも (5), hiçbir どんな～もない (3), ilgili 関心のある (3) - ilginç 興味のある (4) - meraklı 興味のある (3) (*ilgisiz 無関心の), kör 目の不自由な (3), kutlu 幸運な (3) - mutlu 幸福な (3) (*mutsuz 不幸な), lazım 必要な (5) (*lüzumsuz

不必要な), medeni 文明の (4), mühim 重要な (3) - önemli 重要な (5) (*önemsiz 重要でない), olur よろしい (3) (*olmaz だめだ), nazik 丁寧な (3) (*terbiyesiz 無作法な), sayın 親愛なる (5), sevgili 愛すべき (3), sık 度々の (4) (*nadir, *seyrek 稀な) sonsuz 無限の (3), taahhütlü 書留の (3), turistik 観光の (3), uygun 適した (4) (*uygunsuz 適していない), yardımsever 博愛の (3), yeter 十分な (4) (*yetersiz 不十分な), yorgun 疲れた (5) (*sağlıklı 元気な) yuvarlak 丸い (3), zorunda ~しなければならない (3), zeytinyağlı オリーブ油入りの (3)

III. 2. 8. 動詞 195語

基本動詞 195語の最も際立った特徴は、その大多数が一般に人間を主語とする構文をとる動詞である点である。人間以外のものを主語にとる動詞は 195の動詞のうち、筆者の分析に誤りがなければ、以下の七つだけである。

「人間以外の主語」をとる動詞

damlamak たれる (3), değmek 達する (4), patlamak 爆発する (3), pişmek 料理される (3), uymak 釣り合う (3), yağmur yağmak 雨が降る (3), yetmek 足りる (3)

動詞は一般に「行為」を表すことが多いが、基本動詞でも同じことが言える。意味を規準とした分類であるため厳密ではないが、半数に近い約 70の動詞が、「運動や行為」を表す動詞であった。それ以外にも意味的なグループをなすと思われる動詞群を幾つか挙げておく (註5)。

「知識や判断」

anlamak 理解する (5), belirtmek 明らかにする (3), bildirmek 知らせる (3), bilmek 知る (5), buyurmak 命令する (3), düşünmek 考える (3), hatırlamak 思い出す (5), kabul etmek 承認する (3), öğrenmek 学ぶ (5), öğretmek 教える (3), sanmak 思う (5), unutmak 忘れる (5)

「感情」

ağlamak 泣く (5), beğenmek 気に入る (4), gülmek 笑う (3),
gülümsemek 微笑む (3), hoşlanmak 気に入る (4), kızmak 怒る (3),
korkmak 恐れる (4), öpmek キスする (3), sevmek 愛する (5),
sevinmek 喜ぶ (5), şaşkırmak 戸惑う (3), telaşlanmak 慌てる (3),
üzülmek 残念に思う (3)

「言語行為」

anlatmak 説明する (4), çağırmak 呼ぶ (5), demek 言う (5),
konuşmak 話す (5), okumak 読む (5), seslenmek 話かける (3),
sormak 尋ねる (5), söylemek 言う (5), yazmak 書く (5)

「交際」

beklemek 待つ (5), buluşmak 会う (3), görüşmek 会う (3),
karşılaşmak 出会う (4), karşılamak 出迎える (4), tanışmak 知りあう
(4), rastlamak 出会う (3), tanımak 見知る (5), tanıştırmak 人を紹
介する (3)

「身なり・服装」

çalkalamak ゆすぐ (3), duş almak シャワーをあびる (3),
giymek 着る (4), giyinmek 服を着る (5), soymak 服を脱ぐ (4),
yıkamak 洗う (5), yıkanmak 自分の体を洗う (4)

「五感」

bakmak 見る (4), dinlemek 聞く (5), duymak 聞く (4),
görmek 見る (5), görünmek 見える (3), göstermek 見せる (4),
işitmek 聞く (3), seyretmek 見物する (4)

「人生」

büyümeek 大きくなる (3), doğmak 生まれる (5), ölmek 死ぬ (5),
vefat etmek 逝去する (3), yaşamak 生きる (5)

「意志・願望」

istemek ～したい (5), karar vermek 決心する (3), seçmek 選ぶ (5),
tercih etmek ～のほうがよい (4), vazgeçmek あきらめる (3)

動詞によっては先行する名詞補語に特定の格語尾を要求するものがある。中東
語学科トルコ語専攻編 (1994)ではそうした格語尾が示されており学習者にとっ
て有益である。基本動詞 195のうち特定の格語尾をとる動詞には以下のものがあ
る。

-e bakmak「～を見る」、-e basmak「～を踏む」、-e benzemek「～に似る」、
 -e binmek「～に乗る」、-den boşanmak「～と離婚する」、-e devam etmek
 「～を続ける」、-den geçmek「～を通る」、-ile görüşmek「～と会う」、
 -e inanmak「～を信じる」、-e karar vermek「～を決心する」、-ile
 karşılaşmak「～と出会う」、-den korkmak「～を恐れる」、-e koymak「～に
 置く」、-e rastlamak「～と出会う」、-ile tanışmak「～と知りあう」、
 -e uymak「～に似合う」、-e üzülme「～を残念に思う」、-den vazgeçmek
 「～をあきらめる」、-e, -i vurmak「～を叩く」、-e yetişmek「～に間に合
 う」

最後に動詞の一覧表を示しておく 註6)。

açmak 開ける (5)	ağlamak 泣く (5)
ağrımak 痛む (4)	alışmak 慣れる (3)
almak 取る (5)	anlamak 理解する (5)
anlatmak 説明する (4)	aramak 探す (5)
atmak 投げる (4)	bağlamak 結ぶ (4)
bakmak 見る (4)	basmak 踏む (3)
başarmak やり遂げる (3)	başlamak 始める (5)
başvurmak 申し込む、出頭する (3)	bayılmak 気を失う (3)
beğenmek 気に入る (4)	beklemek 待つ (5)
belirtmek 明らかにする (3)	benzemek 似る (3)
bırakmak 放す (4)	bildirmek 知らせる (3)
bilmek 知る (5)	binmek 乗る (5)
bitirmek 終える (4)	bitmek 終わる (5)
boşanmak 離婚する (3)	bozmak 壊す (3)
bulmak 見つける (5)	buluşmak 会う (3)
bulunmak 見つかる (3)	buyurmak 命令する (3)
büyüme 大きくなる (3)	çağırma 呼ぶ (5)
çalışmak 働く (5)	çalkalamak ゆすぐ (3)
çalmak 鳴る・盗む (4)	çarpma ぶつかる (3)
çekmek 引く (3)	çevirmek 向きをかえる (4)
çıkarmak 出す (3)	çıkma 出る (5)
damlamak たれる (3)	değişmek 変わる (3)
değiştirmek 変える (3)	deşmek とどく (4)
demek 言う (5)	denemek 試す (3)
devam etmek 続けて～する (3)	dikmek 立てる (3)
dilemek 望む (4)	dinlemek 聞く (5)
dinlenmek 休む (4)	doğma 生まれる (5)
dolaşmak 歩きまわる (5)	dönmek 回る (5)
duş almak シャワーをあびる (3)	durmak 止まる (5)
duymak 聞く (4)	düşünmek 考える (3)

düşmek 落ちる (5)	elde etmek 手に入れる (3)
etmek する (4)	evlenmek 結婚する (5)
geçirmek 過ごす (4)	geçmek 通る (5)
gelmek 来る (5)	gerekmek 必要である (4)
getirmek 持ってくる (5)	gezmek 歩き回る (5)
girmek 入る (5)	gitmek 行く (5)
giyinmek 服を着る (5)	giymek 着る (4)
göndermek 送る (5)	görüşmek 会う (3)
görünmek 見える (3)	görmek 見る (5)
göstermek 見せる (4)	götürmek 持って行く (4)
gülümsemek 微笑む (3)	gülmek 笑う (3)
harcamak 消費する (3)	hareket etmek 出発する (4)
hatırlamak 思い出す (5)	hazırlanmak 準備をする (3)
hoşlanmak 気に入る (4)	ısmarlamak 注文する (4)
içmek 飲む (5)	iletmek 送る (3)
inanmak 信じる (3)	inmek 降りる (4)
istemek ～したい (5)	işitmek 聞く (3)
kaçırmak 逃す (3)	kaçmak 逃げる (3)
kabul etmek 承認する (3)	kaldırmak 持ち上げる (4)
kalkmak 起きる (5)	kalmak 残る (5)
kapamak 閉める (4)	karşılaşmak 出会う (4)
karşılamak 出迎える (4)	karar vermek 決心する (3)
kararmak 日に焼ける (3)	kaybetmek 失う (4)
kaybolmak なくなる (3)	kazanmak 儲ける (5)
kesmek 切る (5)	kırmak 砕く (5)
kızmak 怒る (3)	koşmak 走る (5)
konuşmak 話す (5)	korkmak 恐れる (4)
korumak 守る (3)	koymak 置く (5)
kullanmak 使う (5)	kurmak こしらえる (3)
kutlamak 祝う (4)	okumak 読む (5)
olmak なる (5)	oturmak 座る (5)
oynamak 遊ぶ (4)	ödemek 支払う (3)
öğrenmek 学ぶ (5)	öğretmek 教える (3)
ölmek 死ぬ (5)	öpmek キスする (3)
patlamak 破裂する (3)	pişmek 料理される (3)
rastlamak 出会う (3)	sağlamak もたらす (3)
sanmak 思う (5)	sapmak 曲がる (4)
satmak 売る (5)	saymak 数える (3)
seçmek 選ぶ (5)	seslenmek 話かける (3)
sevinmek 喜ぶ (5)	sevmek 愛する (5)
seyretmek 眺める、テレビをみる (4)	sormak 尋ねる (5)
soymak 服を脱ぐ (4)	sönmek 消える (3)
söylemek 言う (5)	susamak 喉が渇く (4)
sürmek 運転する (5)	şaşırmak 戸惑う (3)
takmak はめる (3)	tanışmak 知りあう (4)
tanıştırmak 人を紹介する (3)	tanımak 見知る (5)

taşımak 運ぶ (3)
 tebrik etmek 祝う (3)
 telaşlanmak 慌てる (3)
 toplamak 集める (3)
 uçmak 飛ぶ (4)
 unutmak 忘れる (5)
 uymak 似合う (3)
 uzanmak 体をのばす (3)
 ütölemek アイロンをかける (3)
 varmak 行き着く (5)
 vefat etmek 逝去する (3)
 vurmak 打つ (4)
 yaklaşmak 近づく (3)
 yapmak 作る (5)
 yaratmak 創造する (3)
 yatmak 寝る (4)
 yemek 食事する (5)
 yenmek 勝つ (3)
 yetmek 足りる (3)
 yıkanmak 自分の体を洗う (4)
 yorulmak 疲れる (4)
 yüzmek 泳ぐ (3)

taşınmak 引越す (3)
 tekrarlamak 繰り返す (3)
 tercih etmek ~のほうがよい (4)
 tutmak つかまえる (5)
 uğramak 立ち寄る (4)
 uyanmak 目覚める (4)
 uyumak 眠る (5)
 uzatmak のばす (3)
 üzölmek 残念に思う (3)
 vazgeçmek あきらめる (3)
 vermek 与える (5)
 yağmur yağmak 雨が降る (3)
 yanmak 燃える (4)
 yaralanmak 負傷する (3)
 yaşamak 生きる (5)
 yazmak 書く (5)
 yenilemek 更新する (3)
 yetişmek 間に合う (4)
 yıkamak 洗う (5)
 yola çıkmak 出発する (3)
 yürömek 歩く (5)

III. 2. 9. 名詞 666語 (yüz 顔、100 (5) を含めて 667語)

基本名詞は 666語からなり数が多いため、紙面の都合上、全ての名詞を示すことはできない。巻末のアルファベット順索引を参照されたい。名詞の分類は複雑であるが、ある程度意味的なグループにまとめられそうな名詞のみを整理しておいた 註5)。

自然 22語

dünya 地球、世界 (5), gök 天 (3), güneş 太陽 (4), yıldız 星 (3)
 ada 島 (5), buz 氷 (3), dağ 山 (4), deniz 海 (5), göl 湖 (4),
 hava 空気 (5), kar 雪 (4), kıyı 海岸 (3), plaj 浜 (3), tepe 丘 (4),
 yağmur 雨 (5)
 altın 金 (3), demir 鉄 (3), taş 石 (4)
 Akdeniz 地中海 (4), Anadolu アナトリア (3), Ege (Denizi) エーゲ海
 (3), Karadeniz 黒海 (3)

植物・野菜・果実 21語

ağaç 木 (5), bahçe 庭 (5), bitki 植物 (3), biber ピーマン (4),
çiçek 花 (5), dal 枝 (3), domates トマト (3), elma リンゴ (4),
gül バラ (4), kabak カボチャ (4), karpuz スイカ (4), kavun メロン
(5), meyva 果物 (5), park 公園 (3), patates ジャガイモ (3),
patlıcan ナス (3), portakal ネーブル (5), sebze 野菜 (4), soğan
タマネギ (4), yaprak 葉 (4), zeytin オリーブ (3)

動物 14語

aslan ライオン (3), at 馬 (4), balık 魚 (4), deri 皮膚・皮 (3),
eşek ロバ (4), fare ネズミ (3), inek 乳牛 (3), kedi 猫 (4),
köpek 犬 (5), kuş 鳥 (3), kuyruk しっぽ (3), kuzu 子羊 (4),
tavuk ニワトリ (3), yavru ひな、子 (4)

民族・言語 16語

Almanya ドイツ (3), Arap アラブ人 (3), Arapça アラビア語 (3),
Çin 中国 (3), Çince 中国語 (3), Fransız フランス人 (5), Fransızca
フランス語 (3), İngiliz イギリス人 (4), İngilizce 英語 (3),
İngiltere イギリス (3), Japonca 日本語 (3), Rus ロシア人 (3),
Türk トルコ人 (4), Türkçe トルコ語 (4), Türkiye トルコ (4),
Yunanistan ギリシャ (3)

人間 25語

adam 人、男 (5), bayan 女史 (5), bebek 赤ん坊 (4), çocuk 子供 (5),
çocuk çocuk 家族の人々 (3), çocukluk 子供の頃 (3), delikanlı 若者
(3), doğum 誕生 (4), efendi ～様 (3), erkek 男 (4), hanım 夫人 (5),
hayat 人生 (4), insan 人間 (4), kız 娘 (5), kadın 女性 (5), oğlan
少年 (3), yaş 歳 (5), yaşam 一生 (3)
ad 名前 (5), aile 家族 (4), bay 氏 (4), bey ～さん (5),
beyefendi ～様 (5), hanımefendi 夫人 (4), isim 名前 (4)

家族・親類 21語

abla 姉 (5), ağabey 兄 (4), akraba 親類 (4), amca おじ(父の兄弟) (4),
anne 母 (5), anneanne 祖母 (3), baba 父 (5), babaanne 父の母 (3),
damat 婿 (3), dayı おじ(母の兄弟) (4), dede 祖父 (3), gelin
花嫁 (4), karı 妻 (5), hala おば(父の姉妹) (4), kardeş 兄弟姉妹 (5),
kayınvalide 義理の母 (3), koca 夫 (5), kuzen 従弟 (3), oğul 息子
(5), teyze おば(母の姉妹) (4), torun 孫 (4)

身体 28語 (yüzを含む)

ağız 口 (5), akciğer 肺 (3), arka 背中、うしろ (5), avuç 手のひら
(3), ayak 足 (5), bacak 脚 (4), baş 頭 (5), bel 腰 (4), boğaz 喉
(4), boy 背丈 (4), boyun くび (4), burun 鼻 (3), çene 顎 (4),
dil 舌、言語 (5), diş 歯 (5), dudak 唇 (3), el 手 (5), göz 目 (5),
kalp 心臓 (4), kan 血 (3), karaciğer 肝臓 (3), karın 腹 (3),
kaş 眉 (4), kol 腕 (4), kulak 耳 (5), parmak 指 (4), saç 髪 (5),

yüz 顔、100 (5)

服飾 18語

ayakkabı 靴 (5), bluz ブラウス (3), cep ポケット (5), çorap 靴下 (4),
elbise 服 (4), etek スカート (3), gecelik パジャマ、一泊料金 (3),
gömlek シャツ (3), gözlük 眼鏡 (3), kemer ベルト (4), kumaş 生地 (4),
kürk 毛皮 (3), mendil ハンカチ (3), palto オーバー (3), şapka 帽子
(4), takım スーツ (4), yaka 服の襟 (3), yüzük 指輪 (3)

食事・飲物 41語

bal 蜂蜜 (4), börek ブレッキ (パイの一種) (3), çorba スープ (3),
ekmek パン (4), et 肉 (5), ızgara グリル (3), kahvaltı 朝食 (5),
kebab 焼肉 (4), köfte 肉だんご (3), lokum ロクム (菓子) (3),
meze オードブル (3), peynir チーズ (4), reçel ジャム (3),
salata サラダ (4), sigara タバコ (5), simit ゴマ付きパン (3),
şeker 砂糖 (5), tatlı デザート (4), tuz 塩 (5), un 小麦粉 (3),
üzüm ブドウ (3), yağ 油 (4), yiyecek 食べ物 (3), yumurta 卵 (3)
bira ビール (4), çay 茶 (5), içecek 飲物 (3), içki 酒 (4),
kahve コーヒー (5), limonata レモネード (3), rakı ラク (3),
su 水 (5), süt 牛乳 (5), şarap ワイン (4)
bıçak ナイフ (3), bardak コップ (3), çatal フォーク (3),
fincan カップ (3), kaşık スプーン (5), tabak 皿 (3),
tepsi 盆 (4)

職業 47語

asker 兵士 (4), bakkal 雑貨屋 (5), bakan 大臣 (4), banka 銀行 (5),
bar 酒場 (3), büro 事務所 (4), çarşı 市場 (4), dükkân 店 (3),
eczane 薬局 (3), fabrika 工場 (5), futbolcu サッカー選手 (3),
gazeteci 新聞記者 (3), görevli 職員 (3), hamam 浴場 (4),
hırsız どろぼう (3), hoca 先生 (3), işçi 労働者 (4), kapıcı 門番 (4),
kasap 肉屋 (3), kitapçı 本屋 (3), lokanta レストラン (5), manav
八百屋 (4), memur 公務員 (4), meslek 職業 (4), muhasebeci 会計係 (3),
müdür 管理者 (4), mühendis エンジニア (4), müşteri 顧客 (3), otel
ホテル (5), öğretmen 教師 (5), öğrenci 学生 (5), polis 警察 (5),
posta 郵便 (4), postacı 郵便屋 (4), profesör 教授 (3), restoran
レストラン (3), seyahat 旅行 (5), sütçü 牛乳屋 (4), şoför 運転手 (4),
tamirci 修理工 (4), terzi 洋服屋 (3), tiyatro 劇場 (5), turist
旅行者 (3), usta 親方 (3), yazar 作家 (3), yolcu 旅行者 (4),
yolculuk 旅行 (4)

病気 8語

doktor 医者 (5), hastalık 病気 (3), hastane 病院 (4), ilaç 薬 (4),
kaza 事故 (4), reçete 処方箋 (3), sağlık 健康 (5), yara 傷 (4)

家 42語

anahtar 鍵 (4), apartman マンション (5), asansör エレベーター (3),

ateş 火 (4), ayna 鏡 (4), balkon バルコニー (3), banyo 風呂 (5),
 battaniye 毛布 (3), bina 建物 (4), cam ガラス (4), daire 室 (5),
 duş シャワー (4), elektrik 電気 (3), ev 家 (5), gaz ガス (3),
 halı 絨毯 (3), havlu タオル (4), kapı ドア (5), kat 階 (5),
 kibrit マッチ棒 (3), kilit 錠前 (3), kitaplık 書棚 (3),
 koltuk 肘掛け椅子 (5), masa テーブル (5), merdiven 梯子、階段 (3),
 musluk 蛇口 (3), mutfak 台所 (4), oda 部屋 (5), örtü カバー (3),
 pencere 窓 (5), perde カーテン (3), raf 棚 (3), salon 客間 (5),
 şişe 瓶 (4), tamir 修理 (3), temizlik 掃除 (3), tencere 鍋 (3),
 toz ほこり (3), tuvalet トイレ (5), ütü アイロン (3),
 yastık 枕・クッション (3), yatak ベッド (5)

位置 26語 (arkaは身体の項にも記載)

alt 下 (5), ara あいだ (4), arka うしろ、背中 (5), aşağı 下 (4),
 çevre 周囲 (3), çıkış 出口 (3), dış 外 (5), dışarı 戸外 (5),
 etraf あたり (4), giriş 入口 (4), iç 内 (5), içeri 中 (5),
 ileri まえ (4), köşe 隅 (4), orta まん中 (5), ön 前 (5),
 sağ 右、健康な (5), sol 左 (5), taraf 側 (3), üst 上 (5),
 yan 側 (5), yön 方向 (3), yukarı 上 (5)
 batı 西 (3), doğu 東 (5), güney 南 (4), kuzey 北 (5)

日時・曜日・月 44語

akşam 夕方 (4), ay 月 (5), an 瞬間 (5), bugün 今日 (5), dakika 分
 (5), dün 昨日 (5), gece 夜 (5), gün 日 (5), hafta 週 (5), öğle
 正午 (5), sabah 朝 (5), sene 年 (5), süre 期間 (4), yarın 明日 (5),
 yıl 年 (5), yıldönümü 記念日 (3), yüzyıl 世紀 (3), vakit 時間 (4),
 zaman 時間 (5)
 mevsim 季節 (4), bahar 春 (3), ilkbahar 春 (4), yaz 夏 (5),
 sonbahar 秋 (4), kış 冬 (4)
 ocak 1月 (5), şubat 2月 (4), mart 3月 (5), nisan 4月 (5),
 mayıs 5月 (4), haziran 6月 (5), temmuz 7月 (5), ağustos 8月 (5),
 eylül 9月 (5), ekim 10月 (5), kasım 11月 (3), aralık 12月 (4)
 pazar 日曜日・市場 (5), pazartesi 月曜日 (5), salı 火曜日 (5),
 çarşamba 水曜日 (5), perşembe 木曜日 (5), cuma 金曜日 (5), cumartesi
 土曜日 (5)

上の項目別リストには基本名詞 666語の 56%にあたる 373語が含まれている。

IV. 結論にかえて

IV. 1. 基本単語の有効性

最後に入門書に見られるこれらの基本単語がトルコ語の文章を理解する上でどれくらい有効なものなのかを若干検証してみたい。そのためにはトルコ語のテキストの中で、基本単語がどれくらい現れるのかを調べればよい。とはいうものの言語類型論の中で呼ばれるところの孤立的言語の場合は、そうした単語調査は比較的単純であろうが、トルコ語のような膠着語においてはどうかであろうか。

トルコ語は形態論的な透明度が高く、語幹あるいは語の意味が明確であれば、接尾辞がたくさん付いていても元の語幹や語の意味が大きく変化するようなことはない。たとえば動詞句 *planla-mış-lar-dır* 「彼らは計画をしているようです」における動詞の語幹 *planla-* 「計画する」、あるいは名詞句 *araştırma-lar-ım-a* 「私のいろいろな研究に」における名詞 *araştırma* 「研究」 註7)。

ところで五つの入門書の巻末基本語彙集をもとに作成された我々の基本単語には、発話の中で単独に現れる独立形式としての単語だけが記載され、いわゆる接尾辞(たとえば上例の中の不定過去形 *-mış-*、複数形 *-lar-*、一人称の所有接尾辞 *-ım-*、方向格 *-a*、等)は考慮の対象になっていない。トルコ語における接尾辞の頻度調査に関しては、PIERCE (1961)が既に大規模な調査を行っており、その結果を見ても接尾辞が驚くほど頻繁に現れることは疑う余地がない。出現頻度の高い接尾辞は、実際のところ、基本単語と同時に学習されなければならない 註8)。しかし一旦そうした基本接尾辞さえ学習されれば、先ほどの例で見たように語の意味は容易に推測され、テキストの理解に支障が出ることはない。

IV. 2. 調査方法

現代トルコ語のテキストとして調べたのは次の二つである。

- 1) 勝田茂 (1988)『トルコ語を話しましょう』, 大学書林.
(現代トルコ語会話のテキストとして、本文のみを調査)
- 2) NOKTA 24-30 ARALIK 1995, pp. 8-13の記事.
(現代トルコ語の時事的テキストとして)

まず最初にそれぞれのテキストにおける単語の頻度を調べた。この場合の単語とは、空白または句読点等によって区切られている単位のことであり、たとえば、Amerika'dan, miyim(一人称単数の疑問形), mütevazısın!「なんと控えめな!」等は、この段階では一つの単語とみなされる。次にこうして得られた単語をファイル化し、上の基本単語のファイルとどれくらい近いかを比較した。この場合の比較は基本単語に現れる語形をもとにして、テキストの単語ファイルにその派生形がどれくらい現れるのかを調べた。例をいくつか挙げておこう。

Yapılacak「なされるべき」は、基本動詞 yapmak「する」の語幹に受身の -ıl が付いた動詞 yapılmakの派生語であるため、yapmakと yapılmakは同一の語とは考えなかった。adım「私の名前」、adınız「あなたの名前」、adınızdı「あなたの名前を」、adlı「～という名のついた」は全て基本名詞 ad「名前」の派生形であると考えた。さらに、alıp「～を取って」、alıp「彼は取る」、alıpız「我々は取ろう」、alacağım「私は取るつもりだ」、alacağımı「私が取るであろうことに」、alalım「取ろう」、aldım「わたしは取った」、almayı「取ること」、alsam「私が取れば」等の様々な語形も全て基本動詞 almak「取る」の派

生形に過ぎないと考えた。

IV. 3. トルコ語テキストの理解度

勝田 (1994) の単語総数は 3237語であった。このうち活用形も語数に含めた異なり語数は 1529語である。この 1529語を基本単語と照合してみると、全体で 305語が基本単語に含まれない単語であった。異なり語数の 20%にあたる。ところが、この 305語の頻度を調べてみると一度しか現れない単語が多く、全体の頻度は 425語になる。これが全体の語数 3237語に占める割合は 13% であり、結局、勝田 (1994) の会話テキストは我々の基本単語の知識があれば、87%のテキストの意味を理解できることになる。

さらに基本単語に入っていない単語を調べてみると、会話の相づちや人名などの固有名詞が以外に多いことに気がつく。()内は頻度語数。

会話の相づち 12語 : A (7), Aa (3), Hım (2)

人名 75語 : Ali (11), Atatürk (1), Ayhan (5), Ayşe (1), Ayşesin (2), Bahadır (4), Canan (2), Cem (1), Emel (1), Emre (1), Hasan (5), Kürşat (2), Nakamura (5), Nejat (1), Rahmi (1), Simin (2), Suna (5), Susie (1), Yosiko (24)

その他 21語 : Anıtkabiri (2) 「アタチュルク霊廟」, Belgrat Ormanları (2), Etap Oteli (8), Galata Kulesi (2), Sultan Ahmet Meydanı (3), Samsun (1) (タバコ名), Tokyo (1), Topkapı Sarayı (2)

これらの単語は全体で108語にのぼる。これらの語を 425語から除くと 317語になり、テキスト全体の語数の 9.8%を占める。従って、この段階ではテキストの 90.2%が理解可能になる。

次にトルコ語の時事的テキストの場合を考えてみよう。雑誌 NOKTAの 1995年

12月24-30日号の pp. 8-13に掲載された記事、「大学の門をこじ開けるのは1968年の精神か？若者の主張」(Universite kapılarını zorlayan, 68 ruhu mu? Gençler bir şey söylüyor)に現れる語数は 1183語(異なり語数 778語)であった。このうち基本単語にない単語は頻度も考慮すると全体で 415語(異なり語数 274語)にのぼり、全体の語数に占める割合は 35%である。従って、このテキストは基本単語の知識では 65%しか理解できない。

トルコ語会話テキストのときと同じように、基本単語に入っていない語の中から以下の地名や人名を省いて考えたとしても、基本単語にない語数は 1183語のうちの 380語にのぼりテキストの 32%は理解できないことになる。

Atina (1) (アテネ), Avrupa (5), Beyazıt (2) (広場名), Bülent Ecevit (2),
Burhan Şenatalar (2), Bursa (1), CKMP (1), Mete Esen (2), Fransa (3),
Führer (1) (総統(独語)), İstanbul (7), Zafer Ozbek (3), Paris (2),
Refah (1) (トルコ福祉党), SBF (2), Türkiye (3)

IV. 4. まとめ

上述の理解度テストはあくまで理論的な理解可能性を数学的に示したものに過ぎない。実際には前後文脈、論理的関係、派生形の推測などの影響でテキスト理解度は変化するであろう。しかし本論考の中で定義したトルコ語の基本単語は、少なくともトルコ語の一般的な日常的会話を理解するためなら、かなり十分な語彙を含んでいると言えるであろう。但し、繰り返し述べておくが、その理解度が十全に発揮されるには基本単語の理解と同時に、基本的な接尾辞に関する知識が必要不可欠なのである。

また、ここでは触れることができなかったが、基本単語の中には同義語・類義

語が見られる。たとえば「見る」を意味する動詞 bakmak, görmek, seyretmekや名詞の düşünceと fikir(いずれも「考え」)、あるいは sevinçと zevk(いずれも「喜び」)である。さらに接続詞の amaと fakat(いずれも逆接を表す)、形容詞としては akと beyaz(白い)、karaと siyah(黒い)、birçok, fazlaさらに çok(数量の多さを表す)、küçükと ufak(小さい)なども考えられる。これらのニュアンスの違いを入門書に盛り込むことも必要なことと思われる。こうした初級学習者に対する語彙的配慮ならびに文法教育的考慮があつてこそ、トルコ語の初級文法が円滑に学習されるものと筆者は考える。そうした目的と計画の上に構築された優れた初級入門書がこれからもたくさん現れることを筆者は期待する。

最後に、本調査を行うにあたって、Joe E. Pierceが 1957年9月から1960年11月にかけてトルコの首都アンカラで行った単語頻度調査の結果を参照することができなかったのは大変残念であった。その調査結果は出版されているようであるが、国内での所蔵を確認することができなかった 註9)。

註

註1) 以下の記述において、たとえば[ASSIMIL][BOZDEM]とあれば、その単語が二つの入門書において巻末の基本語彙集の中に記載されていることを意味する。

記述の不一致

affedersiniz [ASSIMIL][COLLOQ][RASCH]

[COLLOQ]では Affedersin(iz)

afiyet [ASSIMIL][BOZDEM][COLLOQ][LEWIS][RASCH]

[ASSIMIL][RASCH]では afiyet olsunも記載。[COLLOQ]は afiyet olsunのみ

alış veriş [ASSIMIL][BOZDEM][RASCH]

[RASCH]で alışveriş と記載

Allah [ASSIMIL][BOZDEM][COLLOQ][LEWIS][RASCH]

[ASSIMIL]では慣用句 Allah kolaylık versin として、[BOZDEM]では小文字

allah、[COLLOQ]も慣用句 allahallah、[RASCH]も慣用句 Allah Allah

arasıra [LEWIS][RASCH]

[RASCH]は ara sıraと記載

bereket [ASSIMIL][LEWIS][RASCH]
 [ASSIMIL][RASCH]では慣用句 Bereket versin「どうもありがとう」
 bol [ASSIMIL][COLLOQ][LEWIS][RASCH]
 [ASSIMIL][COLLOQ]は慣用句 bol bol「どんどん」
 borç [ASSIMIL][BOZDEM][COLLOQ][RASCH]
 [COLLOQ]は慣用句 borç vermek「金を貸す」を記載
 buyurun [ASSIMIL][COLLOQ][RASCH]
 [COLLOQ]では buy(u)runの綴り
 ciddi [ASSIMIL][BOZDEM][COLLOQ][LEWIS]
 [COLLOQ]では ciddi mi「本当なの？」の形で登録
 çoktan [ASSIMIL][COLLOQ][LEWIS][RASCH]
 [ASSIMIL][RASCH]は熟語 çoktan beri「ずっと以前から」
 çukolata [BOZDEM][COLLOQ]
 [BOZDEM]では çukolataの綴り
 değmek [ASSIMIL][BOZDEM][LEWIS][RASCH]
 [ASSIMIL][LEWIS]は「値する」の意味で、[BOZDEM][RASCH]は「達する」の
 意味を記述
 disiplin [ASSIMIL][RASCH]
 [ASSIMIL]では disiplin(siz)
 dönüş [ASSIMIL][BOZDEM][COLLOQ][RASCH]
 [COLLOQ]は gidiş-dönüş「往復」を採用
 duş almak [ASSIMIL][BOZDEM][RASCH]
 [BOZDEM]では duş yapmak の熟語も記載
 etraf [ASSIMIL][COLLOQ][LEWIS][RASCH]
 [ASSIMIL]では etraf(ında)
 filan [ASSIMIL][COLLOQ][RASCH]
 [RASCH]は filan falan「あれこれ」を採用
 film [ASSIMIL][BOZDEM][COLLOQ][RASCH]
 [ASSIMIL]では熟語 film görmek
 geçen [ASSIMIL][COLLOQ][RASCH]
 [ASSIMIL][RASCH]では geçen ay「先月」、geçen yıl「去年」、[ASSIMIL]
 はさらに geçen hafta「先週」や geçen gün「過日」も
 geçmiş [ASSIMIL][BOZDEM][COLLOQ][RASCH]
 [ASSIMIL][COLLOQ][RASCH]では慣用句 geçmiş olsun「お大事に」
 gene [ASSIMIL][COLLOQ][LEWIS][RASCH]
 [ASSIMIL][COLLOQ]では gene de「それでもやはり」
 gidiş [ASSIMIL][BOZDEM][COLLOQ][RASCH]
 [COLLOQ]は gidiş-dönüş「往復」を採用
 hareket [ASSIMIL][LEWIS][RASCH]
 熟語の hareket etmek は[ASSIMIL][BOZDEM][LEWIS][RASCH]に記載
 hatta [LEWIS][RASCH]
 [RASCH]の綴りは hattâ
 hay allah [COLLOQ][RASCH]
 [RASCH]は hay Allah
 haydi [BOZDEM][COLLOQ][LEWIS][RASCH]
 [ASSIMIL]では hadiの綴りも

hay hay [LEWIS][RASCH]
 [LEWIS]の綴りは hayhay
 hayran [LEWIS][RASCH]
 [RASCH]では熟語 hayran kalmak「とても感心する」
 hem [ASSIMIL][BOZDEM][COLLOQ][LEWIS][RASCH]
 [COLLOQ]と[RASCH]で hem de「なおそのうえ」として記載
 hem...hem [BOZDEM][COLLOQ][RASCH]
 [RASCH]は hem...hem de
 hoş [ASSIMIL][BOZDEM][COLLOQ][LEWIS][RASCH]
 [ASSIMIL]と[RASCH]において挨拶 hoş bulduk「どうもこんにちは」
 hoşça kal(ın) [ASSIMIL][COLLOQ]
 [COLLOQ]では hoşçakalınの綴り
 iç çamaşır [ASSIMIL][COLLOQ]
 [COLLOQ]では iç çamaşır ı の綴り
 ilan [LEWIS][RASCH]
 [LEWIS]では熟語 ilan etmek「宣言する」
 ilmi [LEWIS][RASCH]
 [RASCH]では ilmiの綴り
 islam [LEWIS][RASCH]
 [LEWIS]では islam(lık)
 kahvaltı etmek [ASSIMIL][RASCH]
 [ASSIMIL]では kahvaltı yapmakも採用
 karşı [ASSIMIL][BOZDEM][COLLOQ][LEWIS][RASCH]
 [ASSIMIL]では karşı(da) の形で表記
 kebab [ASSIMIL][COLLOQ][LEWIS][RASCH]
 [ASSIMIL]は kebabの綴り
 kontrol [ASSIMIL][RASCH]
 [ASSIMIL]は kontrol etmek
 koyu [ASSIMIL][COLLOQ][RASCH]
 [COLLOQ][RASCH]では koyu renkli「濃い色の」を登録
 kusura bakma [ASSIMIL][COLLOQ]
 [COLLOQ]は kusura bakmayın「勘弁して下さい」を記載
 lazım [ASSIMIL][BOZDEM][COLLOQ][LEWIS][RASCH]
 [COLLOQ]では lâzım形で登録
 meyva [ASSIMIL][BOZDEM][COLLOQ][LEWIS][RASCH]
 [LEWIS]はmeyva or meyveと記述、[ASSIMIL][RASCH]は meyve形を採用
 meyva suyu [COLLOQ][RASCH]
 [RASCH]は meyve suyuの綴り
 onun [ASSIMIL][BOZDEM][COLLOQ]
 [ASSIMIL]で慣用句 onun için「そのため」
 oturma [BOZDEM][COLLOQ][RASCH]
 [COLLOQ][RASCH]では慣用句 oturma odası「居間」
 özür [ASSIMIL][BOZDEM][LEWIS][RASCH]
 [ASSIMIL][BOZDEM][RASCH]は慣用句 özür dilemek「申しわけないと言う」
 を採用

pekala [COLLOQ][LEWIS]
 [LEWIS]は pekâlâ の綴り
 rahatsız [COLLOQ][RASCH]
 [RASCH]では熟語 rahatsız etmek 「邪魔する」
 rahmet [LEWIS][RASCH]
 [RASCH]では熟語 rahmet etmek
 sabır [ASSIMIL][RASCH]
 [ASSIMIL]では sabır (l₁) 「我慢 (づよい)」
 sağ [ASSIMIL][BOZDEM][COLLOQ][LEWIS][RASCH]
 [ASSIMIL]は「右」と「健康な」を別の単語として登録、[COLLOQ]は「右」の意味のみを記載
 sağol [ASSIMIL][COLLOQ][LEWIS][RASCH]
 [ASSIMIL][COLLOQ]は sağol (un)、[RASCH]は sağ ol
 sahi [ASSIMIL][COLLOQ][RASCH]
 [ASSIMIL][COLLOQ]では慣用句 Sahi mi? 「本当ですか？」
 sandöviç [ASSIMIL][RASCH]
 [RASCH]では sandviç の綴り
 sapmak [ASSIMIL][COLLOQ][LEWIS][RASCH]
 [LEWIS]は「曲がる」以外に「逸れる」の意味も
 saygı [ASSIMIL][BOZDEM][COLLOQ][RASCH]
 [COLLOQ]では慣用句 saygı sunmak 「礼儀を示す」
 supermarket [BOZDEM][COLLOQ]
 [COLLOQ]では süper market の綴り
 şiş kebab [ASSIMIL][RASCH]
 [ASSIMIL]では şiş kebab の綴り
 tahmin [ASSIMIL][COLLOQ]
 [ASSIMIL]では熟語 tahmin etmek 「推測する」
 tarama [BOZDEM][COLLOQ]
 [COLLOQ]では tarama salatası 「タラマ・サラダ」
 tavsiye [ASSIMIL][COLLOQ][LEWIS]
 [ASSIMIL]は熟語 tavsiye etmek 「推薦する」を採用
 tercüme [ASSIMIL][COLLOQ][LEWIS][RASCH]
 [ASSIMIL]は熟語 tercüme etmek 「翻訳する」
 top [ASSIMIL][COLLOQ][LEWIS][RASCH]
 [ASSIMIL]では「丸々とした」の意味
 valla [COLLOQ][LEWIS]
 [COLLOQ] valla (ha)
 vesaire [ASSIMIL][COLLOQ][LEWIS]
 [ASSIMIL]では ve saire の綴り
 ya [ASSIMIL][BOZDEM][COLLOQ][LEWIS][RASCH]
 [COLLOQ]では ya...ya da を記載
 yana [LEWIS][RASCH]
 [LEWIS]では慣用句 -den yana 「～の方は」、他方の [RASCH]では熟語 yana olmak 「～の味方になる」
 yemek [ASSIMIL][BOZDEM][COLLOQ][LEWIS][RASCH]
 全ての入門書において動詞 yemek 「食べる」と名詞 yemek 「食事」は何らか

の形で区別されている。ただし[COLLOQ][LEWIS]では yemek "to eat; meal" とあるため、単語としては yemekを動詞としてのみ分類した。

yurt içi [ASSIMIL][RASCH]

[RASCH]では yurtiçiの綴り

yüzme [BOZDEM][COLLOQ][RASCH]

[COLLOQ][RASCH]では yüzme havuzu「プール」を採用

zahmet [COLLOQ][RASCH]

[RASCH]では熟語 zahmet etmek「人のため心配する」, zahmet olacak「面倒をおかけするでしょう」

zeytinyağlı [ASSIMIL][COLLOQ][RASCH]

[RASCH]は zeytinyağlılar

ziyade [LEWIS][RASCH]

[RASCH]は熟語 ziyade olsun「ごちそうさま」

ziyaret [ASSIMIL][COLLOQ][LEWIS][RASCH]

[ASSIMIL][COLLOQ]で熟語 ziyaret etmek「訪問する」

zorunda [ASSIMIL][LEWIS][RASCH]

[ASSIMIL][RASCH]では zorunda olmak「しなければならない」

註2) 筆者のコーパスには yavaş の形容詞用法の例が一例もない。hızlıに比べて形容詞用法が稀なのであろうか。両者はいずれも副詞的に用いられた例の方が数が多い。また yavaş yavaşのように畳語的に用いられた場合は副詞と見なされる。

註3) KAWAGUCHI (1992) pp. 317-319を参照。

註4) 川口 (1993) p. 83の註23)を参照。

註5) 動詞および名詞の意味的な分類に関して、筆者は HALLIG UND WARTBURG (1963)をモデルにして自分なりの分類を試みた。しかし結果的にはこのような分類作業の難しさを痛感し、HALLIG UND WARTBURG (1963)の分類にはたくさん問題点があることを再認識した。BALDINGER (1984)のpp. 97-98にもこの書に対する辛辣な批判が載せられており有益である。

註6) 中東語学科トルコ語専攻編 (1994)では 177個の動詞を特に重要なものと規定している。このうち我々の基本動詞 195個と共通しているのは全体の 66%を占める 117動詞であり、また他の58個の動詞は重要な動詞ではないものの、トルコ語専攻編 (1994)が定義する基本動詞 700語の中に入っている。トルコ語専攻編 (1994)の意味での 700の基本動詞と比較するならば、我々の基本動詞と共通するものは全体の 89.7%に達する。本調査において基本動詞とされながらトルコ語専攻編 (1994)に記載のない動詞は以下の 20語である：

galkalamak ゆすぐ (3), damlamak たれる (3), değmek とどく (4), dikmek 縫う (3), giyinmek 服を着る (5), görünmek 見える (3), gülümsemek 微笑む (3), hazırlanmak 準備をする (3), hoşlanmak 気に入る (4), iletmek 送る (3), pişmek 料理される (3), sönmek 消える (3), şaşırmak 戸惑う (3), tebrik etmek 祝う (3), tercih etmek ~のほうがよい (4), vefat etmek 逝去する (3), yağmur yağmak 雨が降る

(3), yaratmak 創造する (3), yenilemek 更新する (3), yıkanmak 自分の体を洗う (4)。

註7) 複合語はおそらく唯一の例外かもしれない。複合語のそれぞれ要素 kuş (鳥)と konmaz (とまらない)から、複合語の意味 kuşkonmaz「アスパラガス」を推測することは不可能である。複合語については川口 (1993)を参照。

註8) 接尾辞の調査に関しては PIERCE (1961, 1962)は重要な調査である。我々の基本単語は主に話言葉を対象にしているのだが、会話 (14万語のコーパス)における接尾辞の頻度は PIERCE (1961)の pp. 33-41に調査結果が述べられている。それによれば頻度が特に高い接尾辞としては次のような接尾辞がある。頭の数字は頻度の順位を表す。1. 進行形 -(i)yor, 2. 定過去形 -di, 3. 方向格 -(y)e, 4. 直接限定目的格 -(y)i, 5. 複数形 -ler, 6. 三人称所有形 -(s)i, -(y)i, 7. 一人称単数語尾 -(y)im, 8. 不定過去形 -miş, 9. 所有格 -(n)in, 10. 位置格 -de, 11. 分離格 -den, 12. 超越形 -(i)r, -(e)r, 13. 疑問形 mi, 14. 否定形 -m(e), 15. 接続詞 de, 16. 一人称所有形 -(i)m, 17. 仮定形 -se, 18. 二人称命令形 -(i)in, 19. 未来形 -(y)ecek, 20. 二人称単数語尾 -sin, 等である。PIERCE (1962)では 200万語のテキストから 10万語を抽出したコーパスにおける接尾辞の頻度結果が載せられており、PIERCE (1961)の結果と比較可能である。

註9) Joe E. Pierce, *A frequency count of Turkish words*, 1964, Turkish Ministry of Education - American Aid Mission, Ankara.

参考文献

- 大島直政 (1988)『エクスプレス トルコ語』,白水社.
オルハン・テュレリ (1978)『トルコ語 文法・会話』,丸善.
勝田茂 (1982)『トルコ語教本』,大阪外国語大学.
— (1986)『トルコ語文法読本』,大学書林.
— (1988)『トルコ語を話しましょう』,大学書林.
勝田茂・中山紀子編 (1994)『トルコ語文法入門』,東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
川口裕司 (1993)「言語記号としての複合名詞」,静岡大学人文学部人文論集 43/2, pp. 65-86.
竹内和夫 (1989)『トルコ語辞典』,大学書林.
中東語学科トルコ語専攻編 (1994)『トルコ語基本動詞700語』,東京外国語大学語学教育研究協議会.
林徹 (1995)『トルコ語 文法の基礎, 接尾辞・付属語・機能語の使い方』, Ver. 2.1, 東京外国語大学語学教育研究協議会.
林徹・A. ヤマンラール (1994)『トルコ語会話の知識』,大学書林.
ヤマンラール水野美奈子 (1990)『トルコ語会話練習帳』,大学書林.

- BALDINGER Kurt (1984) *Vers une sémantique moderne*, Editions Klincksieck, Paris.
- BAYRAKTAROĞLU Arın ve Sinan (1992) *Colloquial Turkish*, Routledge, London and New York.
- BOZDEMİR Michel (1991) *Méthode de turc*, Vol 1, Langues de l'Asie - INALCO, L'Asiathèque.
- ERSEN-RASCH Margarete (1984) *Türkisch für Sie*, Grammatik, Max Hueber Verlag.
- HALBOUT Dominique et GUZEY Gönen (1992) *Le turc sans peine*, Assimil.
- HALLIG Rudolf und WARTBURG Walther von (1963) *Begriffsystem als Grundlage für die Lexikographie. Versuch eines Ordnungsschemas*, 2te Auflage, Akademie Verlag, Berlin.
- KAWAGUCHI Yuji (1992) "Sur les adjectifs intensifs en turc moderne", *Turcica* 24, pp.317-330.
- LEWIS Geoffrey (1992) *Teach Yourself Turkish*. A complete course for beginners, Hodder & Stoughton, Reissued.
- LEWIS V. Thomas (1967) *Elementary Turkish*, Revised and Edited by Norman ITZKOWITZ, Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts.
- MARDIN Yusuf (1976) *Colloquial Turkish*, 2nd Edition, Routledge, London and New York.
- Redhouse *Yeni Türkçe - İngilizce Sözlük*, 3ncü baskı, 1979, İstanbul.
- RONA Bengisu (1989) *Turkish in Three Months*, Hugo's Language Books Limited.
- PIERCE Joe E. (1961) "A frequency count of Turkish affixes", *Anthropological Linguistics* 3.9, pp.31-42.
- (1962) "Frequencies of occurrence for affixes in written Turkish", *Anthropological Linguistics* 4.6, pp.30-41.
- TURKÇE SOZLUK (1982) 6ncı baskı, Türk Dil Kurumu Yayınları, Ankara.

付録 基本単語のアルファベット順索引

- abla 姉 (5)
- acele 急ぎ (5)
- aç 空腹の (4)
- açmak 開ける (5)
- ada 島 (5)
- adres 住所 (4)
- afiye 健康 afiye olsun 召し上がれ (5)
- ağaç 木 (5)
- ağız 口 (5)
- ağrımak 痛む (4)
- aile 家族 (4)
- ak 白い (3)
- Akdeniz 地中海 (4)
- akıllı 利口な (3)
- akraba 親類 (4)
- akşam 夕方 (4)
- alçak 低い (3)
- alışmak 慣れる (3)
- allahısmarladık さようなら (3)
- Almanya ドイツ (3)
- altı 6 (4)
- altmış 60 (3)
- aman どうか (3)
- an 瞬間 (5)
- Anadolu アナトリア (3)
- anayol 幹線道路 (3)
- anlam 意味 (3)
- anlatmak 説明する (4)
- anneanne 祖母 (3)
- ara あいだ (4)
- aralık 12月 (4)
- Arap アラブ人 (3)
- arıza 故障 (3)
- acaba ～かな (5)
- acı 辛い (4)
- açık 開いた、薄い (5)
- ad 名前 (5)
- adam 人、男 (5)
- affedersiniz すみませんが～ (3)
- ağabey 兄 (4)
- ağır 重い (4)
- ağlamak 泣く (5)
- ağustos 8月 (5)
- ait ～に関する (3)
- akciğer 肺 (3)
- akıl 知性 (5)
- akılsız 愚かな (3)
- aksi 逆の (3)
- alan 広場 (3)
- alışveriş 買い物 (3)
- Allah アッラー (5)
- almak 取る (5)
- alt 下 (5)
- altın 金 (3)
- ama しかし (5)
- amca おじ(父の兄弟) (4)
- ana 主要な (3)
- anahtar 鍵 (4)
- ancak ただ (3)
- anlamak 理解する (5)
- anne 母 (5)
- apartman マンション (5)
- araba 車 (5)
- aramak 探す (5)
- Arapça アラビア語 (3)
- arka 背中、うしろ (5)

arkadaş 友達 (4)

arzu 願望 (5)

asker 兵士 (4)

aslan ライオン (3)

aşağı 下 (4)

at 馬 (4)

atmak 投げる (4)

ay 月 (5)

ayakkabı 靴 (5)

ayıp 恥 (3)

aynı 同じ (4)

baba 父 (5)

bacak 脚 (4)

bağlamak 結ぶ (4)

bahçe 庭 (5)

bakan 大臣 (4)

bakmak 見る (4)

balık 魚 (4)

banka 銀行 (5)

bar 酒場 (3)

basit 単純な (3)

baş 頭 (5)

başarmak やり遂げる (3)

başkent 首都 (5)

başvurmak 申し込む、出頭する (3)

battaniye 毛布 (3)

bay 氏 (4)

bayılmak 気を失う (3)

bazen ときどき (3)

bebek 赤ん坊 (4)

bekar 独身者 (3)

bel 腰 (4)

belki たぶん (4)

ben わたし (5)

artık もう～ (5)

asansör エレベーター (3)

askerlik 兵役 (3)

aslen 元は (3)

aşk 愛 (3)

ateş 火 (4)

avuç 手のひら (3)

ayak 足 (5)

aydın 明るい (4)

ayna 鏡 (4)

az 少ない (5)

babanne 父の母 (3)

bağ ひも (3)

bahar 春 (3)

bahşiş チップ (3)

bakkal 雑貨屋 (5)

bal 蜂蜜 (4)

balkon バルコニー (3)

banyo 風呂 (5)

bardak コップ (3)

basmak 踏む (3)

başarı 成功 (3)

başka 他の (5)

başlamak 始める (5)

batı 西 (3)

bavul スーツケース (4)

bayan 女史 (5)

bayram 祭り (3)

bazı 或る (5)

beğenmek 気に入る (4)

beklemek 待つ (5)

belirtmek 明らかにする (3)

belli 明らかな (3)

bence わたしとしては (3)

benzemek 似る (3)
bereket たくさん (3)
beş 5 (4)
beyaz 白い (4)
bıçak ナイフ (3)
biber ピーマン (4)
bildirmek 知らせる (3)
bilet 切符 (5)
bilgisayar コンピューター (4)
bilmek 知る (5)
bina 建物 (4)
bir 1 (5)
biraz 少し (5)
birden 一度に (3)
birkaç 二三の (4)
bitirmek 終える (4)
bitmek 終わる (5)
bluz ブラウス (3)
bol ゆとりのある (4)
boş からの、暇な (4)
boy 背丈 (4)
boyunca ~の間ずっと (3)
bozuk 壊れた (4)
bölüm 章 (3)
böyle このように (5)
buçuk 半分の (5)
bulmak 見つける (5)
buluşmak 会う (3)
burun 鼻 (3)
buyurun どうぞ! (3)
büro 事務所 (4)
bütün すべての (5)
büyümek 大きくなる (3)

cadde 大通り (3)

beraber いっしょに (4)
beri ~以来 (5)
bey ~さん (5)
beyefendi ~様 (5)
bırakmak 放す (4)
biçim 形 (4)
bile ~さえも (4)
bilgi 知識 (4)
bilim 学問 (3)
bin 千 (5)
binmek 乗る (5)
bira ビール (4)
birçok たくさんの (3)
birinci 第1の (3)
birlikte いっしょに (3)
bitki 植物 (3)
biz 私たち (5)
boğaz 喉 (4)
borç 借金 (4)
boşanmak 離婚する (3)
boyun くび (4)
bozmak 壊す (3)
bölge 地区 (4)
börek ブレッキ(パイの一種) (3)
bu これ (5)
bugün 今日 (5)
bulunmak 見つかる (3)
burada ここで (3)
buyurmak 命令する (3)
buz 氷 (3)
büşbütün まったく (3)
büyük 大きい (5)

cam ガラス (4)

camî モスク (4)
cennet 天国 (3)
cevap 返事 (5)
cuma 金曜日 (5)
cumhuriyet 共和国 (5)

çabuk すぐ (4)
çalışkan 勤勉な (4)
çalkalamak ゆすぐ (3)
çanta カバン (5)
çarpmak ぶつかる (3)
çarşı 市場 (4)
çay 茶 (5)
çekmek 引く (3)
çevirmek 向きをかえる (4)
çeyrek 四分の一 (5)
çıkış 出口 (3)
çıplak 裸の (3)
çiğ なまの (3)
Çince 中国語 (3)
çizgi 線 (3)
çocukluk 子供の頃 (3)
çoktan ずっと前 (4)
çorap 靴下 (4)
çünkü なぜならば (5)

dağ 山 (4)
dahi ～もまた (3)
daire 室 (5)
dal 枝 (3)
damlamak たれる (3)
davet 招待 (4)
de ～も (4)
defa 回・度 (4)
değer 価値 (4)

can 心 (5)
cep ポケット (5)
ciddi 真面目な (4)
cumartesi 土曜日 (5)
cüzdan 財布 (4)

çağırarak よぶ (5)
çalışmak 働く (5)
çalmak 鳴る、盗む (4)
çare 方法 (3)
çarşamba 水曜日 (5)
çatal フォーク (3)
çek 小切手 (3)
çene 顎 (4)
çevre 周囲 (3)
çıkarmak 出す (3)
çıkmaq 出る (5)
çiçek 花 (5)
Çin 中国 (3)
çirkin 醜い (3)
çocuk 子供 (5)
çok とても、たくさんの (5)
çocuk 家族の人々 (3)
çorba スープ (3)

daha まだ (5)
dahil ～をふくめ (4)
dakika 分 (5)
damat 婿 (3)
dar 狭い (4)
dayı おじ (母の兄弟) (4)
dede 祖父 (3)
defter ノート (3)
değil ～ではない (5)

değişmek 変わる (3)
değmek 達する、値する (4)
delikanlı 若者 (3)
demir 鉄 (3)
deniz 海 (5)
deri 皮膚・皮 (3)
ders 授業 (5)
devam etmek 続けて～する (3)
devlet 政府 (4)
dikkat 注意 (4)
dikmek 立てる (3)
dilek 願い (3)
dilim 薄い一切れ (3)
dinlenmek 休む (4)
dışarı 戸外 (5)
doğmak 生まれる (5)
doğu 東 (5)
doksan 90 (4)
dokuz 9 (4)
dolay ーのため (3)
dolu いっぱいの (4)
dost 友 (5)
dönüş 帰還 (4)
dudak 唇 (3)
durmak 止まる (5)
duş シャワー (4)
duymak 聞く (4)
dükkan 店 (3)
dünya 地球、世界 (5)
düşünce 考え (4)
düzen 秩序 (3)

eczane 薬局 (3)
efendi ーさん (3)
Ege エーゲ海 (3)

değiştirmek 変える (3)
deli 気違いの (4)
demek 言う (5)
denemek 試す (3)
derece 程度 (3)
derin 深い (5)
dert 苦しみ (3)
devamlı 絶え間ない (3)
diğer 他の (3)
dikkatli 注意深い (3)
dil 舌 (5)
dilemek 望む (4)
dinlemek 聞く (5)
dış 外 (5)
diş 歯 (5)
doğru まっすぐな (5)
doğum 誕生 (4)
doktor 医者 (5)
dolaşmak 歩きまわる (5)
dolmuş 相乗りタクシー (3)
domates トマト (3)
dönmek 回る (5)
dört 4 (4)
durak 停留所 (3)
durum 状態 (3)
duş almak シャワーをあびる (3)
düğün 宴 (3)
dün 昨日 (5)
düşmek 落ちる (5)
düşünmek 考える (3)

edebiyat 文学 (4)
efendim つまりその (3)
eğer もしも (3)

eğlence 娯楽 (3)
ekmek パン (4)
eksik 不足の (3)
elbise 服 (4)
elektrik 電気 (3)
elma リンゴ (4)
emin 確かな (3)
en もっとも (5)
erken 早く (5)
eski 古い (5)
estağfurullah どういたしまして (3)
eşek ロバ (4)
et 肉 (5)
etmek する (4)
ev 家 (5)
evlenmek 結婚する (5)
eylül 9月 (5)

fabrika 工場 (5)
fakat しかし (4)
fakülte 大学の学部 (3)
fare ネズミ (3)
fayda 利益 (3)
fena 悪い (5)
fikir 考え (5)
film 映画 (4)
fiyat 値段 (4)
Fransız フランス人 (5)
futbol サッカー (5)

galiba おそらく (4)
garson ボーイ (3)
gaz ガス (3)
gazeteci 新聞記者 (3)
gecelik パジャマ、一泊料金 (3)

ekim 10月 (5)
ekonomi 経済 (3)
el 手 (5)
elde etmek 手に入れる (3)
elli 50 (5)
emekli 退職した (3)
emir 命令 (3)
erkek 男 (4)
eser 作品 (4)
eskiden 以前 (3)
eş 相手 (4)
eşya 品物 (3)
etek スカート (3)
etraf あたり (4)
evet はい (5)
evli 結婚している (5)

faiz 利子 (3)
fakir 貧しい (4)
falan なにか (3)
fark 違い (3)
fazla より多くの (4)
fırsat 機会 (3)
filan なにか (3)
fincan カップ (3)
fotoğraf 写真 (3)
Fransızca フランス語 (3)
futbolcu サッカー選手 (3)

garaj ガレージ (5)
gayet とても (4)
gazete 新聞 (5)
gece 夜 (5)
geç 遅い (5)

geçe ～過ぎに (3)
geçirmek 過ごす (4)
geçmiş 過ぎた (4)
gelin 花嫁 (4)
genç 若い (5)
geniş 広い (4)
gerek ～が必要である (5)
getirmek 持ってくる (5)
gezmek 歩き回る (5)
gidiş 出発 (4)
girmek 入る (5)
gitmek 行く (5)
giyinmek 服を着る (5)
gök 天 (3)
gölge 影 (3)
göndermek 送る (5)
görev 義務 (3)
görmek 見る (5)
görüşmek 会う (3)
götürmek 持って行く (4)
gözlük 眼鏡 (3)
gül バラ (4)
gülmek 笑う (3)
gümrük 関税 (3)
günaydın おはようございます (4)
güney 南 (4)
gürültülü 騒々しい (3)
güzellik 美しさ (3)

haber ニュース (5)
hafta 週 (5)
hakikaten 本当に (3)
hal 状態 (3)
hâlâ いまだに (4)
halk 大衆 (4)

geçen 前の (3)
geçmek 通る (5)
gelecek 次の (4)
gelmek 来る (5)
gene また (4)
gerçek 本当の (4)
gerekmek 必要である (4)
gezi 旅行 (4)
gibi ～のような (5)
giriş 入口 (4)
gişe 窓口 (4)
gittikçe 次第に (3)
giymek 着る (4)
göl 湖 (4)
gömlek シャツ (3)
göre ～によれば (5)
görevli 職員 (3)
görünmek 見える (3)
göstermek 見せる (4)
göz 目 (5)
grev ストライキ (3)
güle güle いってらっしゃい (4)
gülümsemek 微笑む (3)
gün 日 (5)
güneş 太陽 (4)
gürültü 騒音 (3)
güzel 美しい (5)

hafif 軽い (4)
hak 正義 (4)
haklı 正しい (5)
hala おば(父の姉妹) (4)
halı 絨毯 (3)
hamam 浴場 (4)

hangi どの (4)
hanımefendi 夫人 (4)
hareket 運動 (3)
hariç ～を除いて (3)
hasta 病気の (5)
hastane 病院 (4)
hava 空気 (5)
havlu タオル (4)
haydi さあ (4)
haziran 6 月 (5)
hazırlanmak 準備をする (3)
hem さらに (5)
hemen すぐ (5)
henüz まだ～ない (4)
hepsi すべて (5)
herhalde きっと (3)
hesap 勘定 (5)
hız 速さ (3)
hiç まったく～ない (5)
hikaye 話 (3)
hoca 先生 (3)
hoşlanmak 気に入る (4)

ısmarlamak 注文する (4)
ızgara グリル (3)

iç 内 (5)
içeri 中 (5)
içki 酒 (4)
iki 2 (5)
ilaç 薬 (4)
ile ～とともに (4)
iletmek 送る (3)
ilgili 関心のある (3)
ilk はじめの (5)

hanım 夫人 (5)
harcamak 消費する (3)
hareket etmek 出発する (4)
harita 地図 (3)
hastalık 病気 (3)
hatırlamak 思い出す (5)
havale 為替 (3)
hayat 人生 (4)
hayır いいえ (5)
hazır 用意のできた (5)
hediye 贈物 (5)
hem...hem ～も～も (3)
hemen hemen ほとんど (3)
hep すべて (5)
her どれも (5)
herkes すべての人 (3)
hırsız どろぼう (3)
hızlı 速く (4)
hiçbir どんな～もない (3)
hizmet 世話 (3)
hoş 楽しい (5)
hükümet 政府 (4)

ışık 光 (5)

içecek 飲物 (3)
için ～のために (5)
içmek 飲む (5)
ikinci 第2の (4)
ilave 追加 (3)
ileri まえ (4)
ilgi 関係 (3)
ilginç 興味ある (4)
ilkbahar 春 (4)

imtihan 試験 (3)
inanmak 信じる (3)
indirim 値引き (3)
ingiliz イギリス人 (4)
ingiltere イギリス (3)
insan 人間 (4)
ise ~の方は (4)
iskele プラットホーム (4)
istemek ~したい (5)
işçi 労働者 (4)
işsiz 失業の (3)
işte ほら (5)
iyilik いいこと (4)

Japonca 日本語 (3)

kabak カボチャ (4)
kaç いくら (5)
kaçmak 逃げる (3)
kadın 女性 (5)
kahvaltı 朝食 (5)
kala ~前に (4)
kale 城・砦 (3)
kalkmak 起きる (5)
kalp 心臓 (4)
kan 血 (3)
kapalı 閉じた (4)
kapı ドア (5)
kar 雪 (4)
karaciğer 肝臓 (3)
karakol 交番 (3)
karar 決心 (5)
kararmak 日に焼ける (3)
karı 妻 (5)
karpuz スイカ (4)

imza サイン (4)
ince 細い (3)
inek 乳牛 (3)
ingilizce 英語 (3)
inmek 降りる (4)
inşallah できれば~したい (4)
isim 名前 (4)
istasyon 駅 (5)
iş 仕事 (5)
işitmek 聞く (3)
işsizlik 失業 (3)
iyi よい (5)
izin 許可 (3)

jeton 電話につかうコイン (4)

kabul etmek 承認する (3)
kaçırmak 逃す (3)
kadar ~ほど (5)
kağıt 紙 (3)
kahve コーヒー (5)
kaldırmak 持ち上げる (4)
kalem 鉛筆 (5)
kalmak 残る (5)
kamyon トラック (3)
kanun 法律 (3)
kapamak 閉める (4)
kapıcı 門番 (4)
kara 黒い (4)
Karadeniz 黒海 (3)
karanlık 暗やみ、暗い (3)
karar vermek 決心する (3)
kardeş 兄弟姉妹 (5)
karın 腹 (3)
karşı 反対 (5)

karşılamak 出迎える (4)
kart カード (4)
kasaba 町 (3)
kasım 11月 (3)
kaşık スプーン (5)
kavga 喧嘩 (3)
kaybetmek 失う (4)
kayınvalide 義理の母 (3)
kaza 事故 (4)
kebab 焼肉 (4)
kelime 単語 (3)
kendi 自身 (4)
kesin はっきりした (3)
kez 回・度 (4)
kırmak 砕く (5)
kısa 短い (4)
kış 冬 (4)
kız 娘 (5)
kibrit マッチ棒 (3)
kilit 錠前 (3)
kim 誰 (5)
kimse だれか (4)
kiralamak 賃貸借する (3)
kişi 人 (5)
kitap 本 (5)
kitaplık 書棚 (3)
kol 腕 (4)
koltuk 肘掛け椅子 (5)
konuşma 会話 (3)
korkmak 恐れる (4)
korumak 守る (3)
koymak 置く (5)
köfte 肉だんご (3)
köprü 橋 (5)
köşe 隅 (4)

karşılaşmak 出会う (4)
kartpostal 絵はがき (3)
kasap 肉屋 (3)
kaş 眉 (4)
kat 階 (5)
kavun メロン (5)
kaybolmak なくなる (3)
kayıt 記録 (4)
kazanmak 儲ける (5)
kedi 猫 (4)
kemer ベルト (4)
kent 都市 (3)
kesmek 切る (5)
kırk 40 (5)
kırmızı 赤い (5)
kısım 部分 (4)
kıyı 海岸 (3)
kızmak 怒る (3)
kilise キリシト教会 (3)
kilo キロ (4)
kimlik 素性 (3)
kira 家賃 (3)
kirli 汚れた (3)
kişilik 個性 (3)
kitapçı 本屋 (3)
koca 夫 (5)
kolay 簡単な (5)
komşu 隣人 (5)
konuşmak 話す (5)
korku 恐れ (5)
koşmak 走る (5)
koyu 濃い (3)
köpek 犬 (5)
kör 目の不自由な (3)
kötü 悪い (4)

köy 村 (5)
kredi 信用 (3)
kullanmak 使う (5)
kurmak こしらえる (3)
kuru 乾いた (3)
kuş 鳥 (3)
kutlu 幸運な (3)
kuvvetli 力のある (3)
kuzen 従弟 (3)
kuzu 子羊 (4)
kürk 毛皮 (3)

lastik タイヤ (4)
lezzetli おいしい (3)
lira リラ (5)
lokanta レストラン (5)
lütfen どうぞ (4)

maalesef 残念ながら (5)
maç 試合 (4)
makina 機械 (3)
manav 八百屋 (4)
masa テーブル (5)
maşallah お見事 (4)
mayıs 5月 (4)
mektup 手紙 (5)
memnun 嬉しい (5)
mendil ハンカチ (3)
meraklı 興味をもっている (3)
merhaba こんにちは (5)
mersi ありがとう (3)
mesele 問題 (3)
meşgul 忙しい (4)
mevsim 季節 (4)
meyva 果物 (5)

köylü 村人 (4)
kulak 耳 (5)
kumaş 生地 (4)
kurs 講義 (3)
kuruş 小銭 (4)
kutlamak 祝う (4)
kutu 小箱 (3)
kuyruk しっぽ (3)
kuzey 北 (5)
küçük 小さい (5)

lazım 必要な (5)
limonata レモネード (3)
lise 高等学校 (5)
lokum ロクム(菓子) (3)

maaş 給料 (3)
mahalle 地区 (3)
mal 財産 (4)
mart 3月 (5)
masal 民話 (3)
mavi 青い (4)
medeni 文明の (4)
memleket 故郷 (3)
memur 公務員 (4)
merak 興味 (5)
merdiven 梯子、階段 (3)
merkez 中心 (3)
mesela たとえば (4)
meslek 職業 (4)
metre メートル (3)
meydan 広場 (3)
meze オードブル (3)

millet 国民 (3)
milyon 百万 (5)
model モデル (3)
muhasebeci 会計係 (3)
mutfak 台所 (4)
müdür 管理者 (4)
mühim 重要な (3)
müsaade 許可 (4)
müze 美術館 (5)

namaz イスラム教の礼拝 (3)
nazik 丁寧な (3)
ne...ne ～も～もない (3)
ne zaman いつ (3)
nerede どこで (3)
neredeyse どこであろうと (3)
nihayet ついに (4)
nişanlı 婚約した (3)
nokta 点 (4)
not メモ (3)
nüfus 人口 (5)

o 彼・彼女・それ (5)
oda 部屋 (5)
oğul 息子 (5)
okumak 読む (5)
olmak なる (5)
on 10 (5)
onun 彼の・彼女の・その (3)
orkestra オーケストラ (3)
otel ホテル (5)
otomobil 自動車 (4)
oturmak 座る (5)
oynamak 遊ぶ (4)

milliyet 民族性 (3)
misafir 客 (4)
muayene 検査 (3)
musluk 蛇口 (3)
mutlu 幸福な (3)
mühendis エンジニア (4)
mümkün 可能な (5)
müşteri 顧客 (3)
müzik 音楽 (3)

nasıl どんな (5)
ne なんの (5)
ne kadar どれほど (3)
neden なぜ (4)
nereden どこから (4)
neşeli 楽しい (3)
nisan 4月 (5)
niyet 意図 (3)
normal 普通の (3)
numara 番号 (5)

ocak 1月 (5)
oğlan 少年 (3)
okul 学校 (5)
oldukça かなり (4)
olur よろしい (3)
onlar 彼ら・彼女ら・それら (3)
orada そこで (3)
orta まん中 (5)
otobüs バス (5)
oturma 居住 (3)
otuz 30 (4)
oyun 遊び (4)

öbür もう一つの (3)

öğle 正午 (5)

öğrenmek 学ぶ (5)

öğretmen 教師 (5)

ölü 死んだ (3)

ön 前 (5)

önemli 重要な (5)

örneğin たとえば (3)

öyle そのように (5)

özellikle 特に (3)

pahalı 値段が高い (5)

palto オーバー (3)

park 公園 (3)

parti 政党 (4)

patates ジャガイモ (3)

patlıcan ナス (3)

pazartesi 月曜日 (5)

peki わかった (3)

pencere 窓 (5)

perşembe 木曜日 (5)

pişmek 料理される (3)

plastik プラスチックの (3)

portakal ネーブル (5)

postacı 郵便屋 (4)

profesör 教授 (3)

pul 切手 (5)

radio ラジオ (5)

rağmen ~にもかかわらず (3)

rakı ラク (3)

reçel ジャム (3)

rehber 案内書 (4)

resepsiyon 受付 (4)

restoran レストラン (3)

ödemek 支払う (3)

öğrenci 学生 (5)

öğretmek 教える (3)

ölmek 死ぬ (5)

ömür 命 (4)

önce はじめに (5)

öpmek キスする (3)

örtü カバー (3)

özel 私的な (5)

özür 都合、欠点 (4)

paket 小包 (4)

para お金 (5)

parmak 指 (4)

pasaport パスポート (5)

patlamak 破裂する (3)

pazar 日曜日・市場 (5)

pek とても (5)

pembe ピンクの (3)

perde カーテン (3)

peynir チーズ (4)

plaj 浜 (3)

polis 警察 (5)

posta 郵便 (4)

postane 郵便局 (4)

program 計画 (3)

raf 棚 (3)

rahat 安心 (4)

rastlamak 出会う (3)

reçete 処方箋 (3)

renk 色 (4)

resim 絵 (5)

rezervasyon 予約 (3)

rica 頼み (5)
Rus ロシア人 (3)

saat 時間 (5)
sağ 髪 (5)
sadece 単に (5)
sağlamak もたらす (3)
sağol ありがとう (4)
sahip 所有者 (4)
sakın 決して (3)
salı 火曜日 (5)
sanat 芸術 (3)
sanmak 思う (5)
sarı 黄色い (5)
satmak 売る (5)
sayesinde ~のおかげで (3)
saygı 敬意 (4)
sayın 親愛なる (5)
sebep 理由 (3)
seçim 選挙 (3)
sekiz 8 (4)
seksen 80 (4)
semt 地区 (3)
sene 年 (5)
serin 涼しい (3)
ses 音 (4)
sevgi 愛 (3)
sevinç 喜び (3)
sevmek 愛する (5)
seyretmek 眺める、テレビをみる (4)
sıfır ゼロ (3)
sınıf クラス (3)
sıra 列 (3)
simit ゴマ付きパン (3)
siyah 黒い (5)

roman 小説 (4)
sabah 朝 (5)
sade 質素な (5)
sağ 右、健康な (5)
sağlık 健康 (5)
sahi ほんとに (3)
sakin 静かな (3)
salata サラダ (4)
salon 客間 (5)
sanki まるで (4)
sapmak 曲がる、逸れる (4)
sarışın ブロンドの (4)
savaş 戦争 (4)
sayfa ページ (4)
sayı 数 (4)
saymak 数える (3)
sebze 野菜 (4)
seçmek 選ぶ (5)
sekreter 書記 (3)
selam 挨拶 (3)
sen 君 (5)
sergi 展示会 (3)
servis 給仕 (5)
seslenmek 話かける (3)
sevgili 愛すべき (3)
sevinmek 喜ぶ (5)
seyahat 旅行 (5)
sıcak 暑い (5)
sık 度々の (4)
sınır 境界 (3)
sigara タバコ (5)
sinema 映画館 (5)
siz あなた (4)

soğan タマネギ (4)
sokak 通り (5)
son 最後、最後の (5)
sonra あとで (5)
sormak 尋ねる (5)
sorun 問題 (3)
sönmek 消える (3)
söz ことば (4)
spor スポーツ (4)
susamak 喉が渴く (4)
sürmek 運転する (5)
sütçü 牛乳屋 (4)

şans 運 (3)
şarap ワイン (4)
şaşırmak 戸惑う (3)
şeker 砂糖 (5)
şey もの (5)
şirket 会社 (4)
şişe 瓶 (4)
şöyle そのように (4)
şubat 2月 (4)

taahhütlü 書留の (3)
tabii もちろん (4)
takmak はめる (3)
tam ちょうど (5)
tamir 修理 (3)
tane ～個 (4)
tanışmak 知りあう (4)
Tanrı 神 (3)
tarafından ～によって (3)
tarih 歴史 (5)
taş 石 (4)
taşınmak 引越す (3)

soğuk 寒い (5)
sol 左 (5)
sonbahar 秋 (4)
sonsuz 無限の (3)
soru 質問 (4)
soymak 服を脱ぐ (4)
söylemek 言う (5)
sözlük 辞書 (3)
su 水 (5)
süre 期間 (4)
süt 牛乳 (5)

şapka 帽子 (4)
şart 条件 (3)
şehir 都市 (4)
şekerli 砂糖いりの (4)
şimdi いま (5)
şiş 串 (3)
şoför 運転手 (4)
şu あれ (5)

tabak 皿 (3)
takım スーツ (4)
taksi タクシー (4)
tamam OK (5)
tamirci 修理工 (4)
tanımak 見知る (5)
tanıştırmak 人を紹介する (3)
taraf 側 (3)
tarif 記述 (3)
tarla 畑 (3)
taşımak 運ぶ (3)
tat 味 (3)

tatil 休暇 (5)
tavsiye 推薦 (3)
taze 新鮮な (5)
tek ただ一つの (5)
tekrar くり返し (4)
telaşlanmak 慌てる (3)
televizyon テレビ (5)
tembel 怠惰な (4)
temizlik 掃除 (3)
tencere 鍋 (3)
tepsi 盆 (4)
tercüme 翻訳 (4)
teşekkür 感謝 (5)
tiyatro 劇場 (5)
toplamak 集める (3)
torun 孫 (4)
trafik 交通 (4)
turist 旅行者 (3)
tulmak つかまえる (5)
tuz 塩 (5)
Türkçe トルコ語 (4)
ürlü 様々の (3)

ucuz 安い (5)
uçmak 飛ぶ (4)
uğramak 立ち寄る (4)
unutmak 忘れる (5)
uyanmak 目覚める (4)
uyku 眠気 (3)
uyumak 眠る (5)
uzanmak 体をのばす (3)
uzun 長い (5)

üç 3 (5)
ülke 国土 (5)

tatlı デザート、甘い (4)
tavuk ニワトリ (3)
tebrik etmek 祝う (3)
teker 輪 (3)
tekrarlamak 繰り返す (3)
telefon 電話 (5)
telgraf 電報 (4)
temiz 清潔な (4)
temmuz 7月 (5)
tepe 丘 (4)
tercih etmek ~のほうがいい (4)
terzi 洋服屋 (3)
teyze おば(母の姉妹) (4)
top ボール (4)
toplantı 会議 (3)
toz ほこり (3)
tren 列車 (5)
turistik 観光の (3)
tuvalet トイレ (5)
Türk トルコ人 (4)
Türkiye トルコ(共和国) (4)

uçak 飛行機 (5)
ufak 小さい (3)
un 小麦粉 (3)
usta 親方 (3)
uygun 適した (4)
uymak 似合う (3)
uzak 遠い (5)
uzatmak のばす (3)

üçüncü 第3の (3)
üniversite 大学 (5)

üst 上 (5)
ütülemek アイロンをかける (3)
üzülmek 残念に思う (3)

vagon 客車 (3)
vapur 汽船 (5)
varmak 行き着く (5)
ve そして (5)
vermek 与える (5)
veya または (4)

ya 〜じゃないの (5)
yağ 油 (4)
yağmur yağmak 雨が降る (3)
yakın 近い (5)
yaklaşmak 近づく (3)
yalancı 嘘つき (3)
yan 側 (5)
yanlış 間違い、間違いの (4)
yapmak 作る (5)
yara 傷 (4)
yaramaz 役に立たない (3)
yaratmak 創造する (3)
yardımsever 博愛の (3)
yarım 半分の (5)
yasak 禁止 (4)
yaş 歳 (5)
yaşamak 生きる (5)
yatak ベッド (5)
yavaş 遅い (5)
yaz 夏 (5)
yazı 記事・文字 (5)
yazmak 書く (5)
yemek 食事する、食事 (5)
yenilemek 更新する (3)

ütü アイロン (3)
üzere 〜のために (4)
üzüm ブドウ (3)

vakit 時間 (4)
var ある (5)
vazgeçmek あきらめる (3)
vefat etmek 逝去する (3)
vesaire その他 (3)
vurmak 打つ (4)

yabancı 外国の (5)
yağmur 雨 (5)
yaka 服の襟 (3)
yakında 近くに (3)
yalan 嘘 (5)
yalnız 単一の (5)
yani すなわち (4)
yanmak 燃える (4)
yaprak 葉 (4)
yaralanmak 負傷する (3)
yararlı 役に立つ (3)
yardım 援助 (5)
yarı 半分 (4)
yarın 明日 (5)
yastık 枕・クッション (3)
yaşam 一生 (3)
yaşlı 年とった (4)
yatmak 寝る (4)
yavru ひな、子 (4)
yazar 作家 (3)
yazık 残念だ (3)
yedi 7 (3)
yeni 新しい (5)
yenmek 勝つ (3)

yer 場所 (5)
yeşil 緑色の (5)
yetişmek 間に合う (4)
yetmiş 70 (4)
yikanmak 自分の体を洗う (4)
yıldız 星 (3)
yine まだ (4)
yiyecek 食べ物 (3)
yoksa それとも (4)
yola çıkmak 出発する (3)
yolculuk 旅行 (4)
yorulmak 疲れる (4)
yukarı 上 (5)
Yunanistan ギリシャ (3)
yuvarlak 丸い (3)
yürümek 歩く (5)
yüzde 率 (4)
yüzmek 泳ぐ (3)
yüzyıl 世紀 (3)

zaman 時間 (5)
zarf 封筒 (5)
zayıf 弱い (3)
zevk 喜び (3)
zeytinyağlı オリーブ油入りの (3)
ziyaret 訪問 (4)
zorunda ~しなければならない (3)

yerine ~の代わりに (3)
yeter 十分な (4)
yetmek 足りる (3)
yıkamak 洗う (5)
yıl 年 (5)
yıldönümü 記念日 (3)
yirmi 20 (4)
yok ~がない (5)
yol 道 (5)
yolcu 旅行者 (4)
yorgun 疲れた (5)
yön 方向 (3)
yumurta 卵 (3)
yurt 祖国 (4)
yüksek 高い (5)
yüz 100、顔 (5)
yüzme 泳ぎ (3)
yüzük 指輪 (3)

zarar 害 (4)
zaten もともと (3)
zengin 金持ちの (4)
zeytin オリーブ (3)
zil 鐘 (4)
zor 困難、むずかしい (5)

Heinrich Böll : Brot における使用語彙の頻度分析

在間 進

0. はじめに

本「研究ノート」は、工藤智子著「ドイツ語作品の計量的文体分析 — コンピュータの活用 —」（1987年度山形大学人文学部文学科独文独文学専攻卒業論文）においてなされた Heinrich Böll : Brot の語彙使用頻度調査結果をもとに、データを整理し直し、10回以上用いられる単語をリストアップしたものである。作品に用いられた全語彙数（すなわち、活用形も一語として数えた場合の語彙数）は 29,543 とのことである。語彙の左の数字および（ ）内の数字はそれぞれの語彙の使用頻度数を表す。なお、リストアップに際し、人称代名詞と冠詞類は、使用頻度が高いことから別扱いにした。

1. 人称代名詞（使用頻度数 3860）

ich (1119) / Ich (299) / mir (297) / Mir (7) / mich (209)
wir (85) / Wir (12) / uns (30)
du (81) / Du (12) / dir (22) / Dir (1) / dich (20)
ihr (137: ただし所有冠詞も含む) / euch (3)
Sie (185) / Ihnen (16)
er (193) / Er (41) / ihm (46) / ihn (74) / es (312) / Es (70) / sie (500) /
ihnen (11)
sich (78)

2. 冠詞類

2. 1. 所有冠詞（使用頻度数 574）

mein- : meine (61) / mein (48) / meinen (41) / meiner (37) / meinem (36)
/ Mein (12) / Meine (10) / meines (9)
unser- : unser (5) / unserem (4) / unserer (4) / unsere (1) / unsere (2) /
unseren (1) / unseres (1)
dein- : deinem (4) / dein (3) / deine (3) / deines (2) / Deine (1)
Ihr- : Ihr (8) / Ihre (5) / Ihren (5) / Ihres (1)

sein- : sein (53) / seine (39) / seiner (16) / seinen (14) / seinem (10) /
 Sein (2)
 /Seine (2) /seines (1)
 ihr- : ihre (55) /ihren (30) /ihrem (18) /ihrer (15) /ihres (12) /ihrem
 (3)

2. 2. 冠詞類 (3 4 3 3 使用頻度数)

d- : die (917) /Die (26) /der (575) /Der (15) /den (390) /Den (1) /das
 (330) /Das (25) /dem (212) /des (68)
 dieselbe (5) /dasselbe (2) /demselben (1) /derselben (1)
 ein- : ein (208) / Ein (6) /eine (154) /Eine (6) /eines (19) /einer (49)
 /einem (79) /einen (99) /irgendeine (2) /irgendeiner (2)
 kein- : keine (17) /kein (12) /keinen (7) /keiner (4) /Kein (1) /Keine
 (1)
 dies- : diese (39) /dieser (31) /diesen (27) /dieses (16) /diesem (14) /
 Diese (2) /Dieses (2) /diesem (1) /Dieser (1)
 jed- : jeden (10) /jeder (7) /jedem (4) /jede (1) /jedes (1) /Jeden (1)
 /Jeder (1)
 jen- : jene (7) /jener (6) /jenen (4) /jenem (1)
 welch- : welche (6) /welches (3) /welchen (1) /welcher (1) /Welche (1)
 solch- : solchen (2) /solcher (2) /solche (3) /solch (1) /solches (1)
 manche (2)

3. その他

1130 und : und (1100) /Und (30)
 676 sein : war (366) /sind (27) /ist (125) /waren (59) /gewesen (43) /
 wäre (14) /bin (13) /sei (11) /bist (9) /wärest (3) /Ist (2) /Sei (1)
 /warst (2) /wäre (1)
 626 in : in (472) /im (110) /ins (34) /In (6) /Im (4)
 611 haben : hatte (306) /hat (65) /habe (56) /haben (54) /hätte (49) /
 hatten (40) /hast (14) /gehabt (6) /hättest (5) /hätten (4) /Hast (4)
 /habt (3) /hattest (2) /Haben (2) /Hat (1)
 388 zu : zu (324) /zum (41) /zur (21) /Zu (1) /ZUR (1)
 347 sagen : sagte (297) /sagen (32) /gesagt (6) /sagt (5) /sage (4) /sagten

- (2) /sag (1)
- 316 **nicht** : nicht (312) /Nicht (4)
- 290 **auf** : auf (285) /aufs (5)
- 272 **wie** : wie (268) /Wie (4)
- 261 **an** : an (218) /am (36) /Am (4) /An (1) /ans (2)
- 234 **mit**
- 218 **werden** : würde (64) /wird (33) /werden (27) /wurde (27) /geworden (16) /worden (13) /würden (9) /werde (7) /wurden (12) /Wird (3) /wirst (2) /würde (2) /würdest (2) /Werden (1)
- 216 **als** : als (209) /Als (7)
- 216 **sehen** : sah (136) /sehen (33) /gesehen (20) /sieht (10) /sehe (7) /siehst (5) /sahen (4) /sähen (1)
- 190 **daß** : daß (189) /Daß (1)
- 190 **von** : von (170) /vom (18) /Von (2)
- 162 **aber** : aber (158) /Aber (4)
- 155 **noch** : noch (151) /Noch (4)
- 137 **so** : so (132) /So (5)
- 134 **aus** : aus (131) /Aus (3)
- 128 **gehen** : ging (60) /gehen (18) /gingen (12) /Gehen (9) /gegangen (7) /geh (7) /Geh (6) /geht (5) /gehe (4)
- 115 **für** : für (113) /Für (2)
- 114 **kommen** : kam (48) /kommen (29) /kamen (10) /kommt (9) /gekommen (8) /komme (4) /Kommen (3) /Komm (2) /kämen (1)
- 109 **wissen** : wußte (52) /weiß (32) /wissen (12) /gewußt (7) /Weiß (2) /wissend (1) /wißt (1) /weiß (1) /Weiß (1)
- 104 **um**
- 101 **man** : man (92) /Man (9)
- 101 **wenn** : wenn (89) /Wenn (12)
- 97 **können** : konnte (26) /kann (25) /können (19) /könnte (6) /konnten (5) /könne (4) /Kann (3) /kannst (3) /könnten (2) /könntest (2) /Können (1) /gekonnt (1)
- 92 **Vater** : Vater (77) /Vaters (15)
- 91 **wieder** : wieder (89) /Wieder (2)
- 91 **Frau** : Frau (82) /Frauen (9)

- 91 **Hand** : Hand (59) /Hände (23) /Händen (9)
- 90 **geben** : gab (41) /geben (17) /gibt (12) /gegeben (9) /gib (3) /gäbe (2)
/gebe (2) /Geben (2) /Gib (2)
- 90 **stehen**: stand (40) /stehen (22) /standen (11) /steht (7) /gestanden
(4) /stehend (3) /stünde (2) /stehe (1)
- 88 **vor** : vor (83) /Vor (4) /vors (1)
- 81 **müssen** : müssen (26) /mußte (24) /muß (16) /müßte (5) /mußt (4)
/müsse (3) /mußten (2) /Müssen (1)
- 79 **immer** : immer (78) /Immer (1)
- 77 **nur** : nur (75) /Nur (2)
- 74 **über** : über (73) /übers (1)
- 72 **was**
- 71 **auch** : auch (63) /Auch (8)
- 70 **nach**
- 66 **denken** : dachte (46) /gedacht (10) /denken (7) /Denke (1) /Denken (1)
/dachten (1)
- 66 **mehr** : mehr (65) /Mehr (1)
- 65 **durch** : durch (64) /durchs (1)
- 64 **Hedwig**
- 63 **Gesicht** : Gesicht (59) /Gesichter (4)
- 62 **all** : alles (31) /alle (22) /allen (4) /all (3) /allem (1) /aller (1)
- 56 **Brot** : Brot (45) /Brote (5) /Broten (3) /Brottes (3)
- 55 **schon** : schon (53) /Schon (2)
- 55 **nehmen** : nahm (44) /nehmen (4) /genommen (5) /nahmst (1) /nehme
(1)
- 54 **weil** : weil (51) /Weil (3)
- 54 **wollen** : wollte (25) /wollen (12) /will (7) /willst (6) /wolltest (2) /
wollten (1) /Wollen (1)
- 54 **Jahr** : Jahre (29) /Jahren (20) /Jahr (5)
- 53 **dann** : dann (46) /Dann (7)
- 52 **ja** : Ja (42) /ja (10)
- 51 **dunkel** : dunke (18) / dunklen (15) /dunkle (8) /Dunkeln (7) /dunkles
(3)
- 51 **fahren** : fuhr (36) /Fahr (7) /fahren (4) /fahre (3) /gefahren (2) /fährt

- (1) /fahr (1)
- 51 **jetzt** : jetzt (50) /Jetzt (1)
- 50 **halten** : hielt (35) /gehalten (8) /halten (3) /hielten (3) /hält (1)
- 50 **tun** : tun (19) /tat (15) /getan (8) /tut (5) /tu (1) /tust (1) /taten (1)
- 50 **Auto** : Auto (44) /Autos (6)
- 49 **ander-** : andere (19) /anderen (19) /anderes (8) /anderer (3)
- 49 **ganz** : ganz (23) /ganze (14) /ganzen (8) /ganzes (2) /Ganz (1) /ganzer (1)
- 49 **Geld** : Geld (47) /Geldes (2)
- 46 **oder** : oder (45) /Oder (1)
- 45 **liegen** : lag (26) /lagen (6) /liegen (5) /liegt (4) /gelegen (3) /Liegt (1)
- 45 **Haus** : Hause (22) /Haus (16) /Hauses (4) /Häuser (3)
- 45 **Mann** : Mann (39) /Männer (5) /Mannes (1)
- 44 **wo** : wo (40) /Wo (4)
- 43 **bei** : bei (33) /beim (8) /Beim (2)
- 43 **erst** : erst (30) /ersten (10) /erste (1) /erster (1) /erstes (1)
- 43 **nie** : nie (41) /Nie (2)
- 43 **Tür**
- 43 **Zimmer** : Zimmer (41) /Zimmers (2)
- 46 **einmal** : einmal (42) /Einmal (4)
- 42 **hören** : hörte (22) /hören (8) /gehört (6) /höre (2) /hörst (2) /hört (1) /hörten (1)
- 41 **blicken** : blickte (38) /geblickt (3)
- 41 **etwas**
- 40 **lassen** : ließ (20) /lassen (9) /gelassen (3) /Laß (2) /läßt (2) /lasse (2) /ließen (2)
- 41 **nichts** : nichts (33) /Nichts (8)
- 40 **hier** : hier (33) /Hier (7)
- 40 **Mädchen**
- 39 **fallen** : fiel (18) /fielen (8) /fallen (7) /gefallen (4) /fällt (1) /fallenden (1)
- 39 **Mutter** : Mutter (29) /Mutters (10)

- 38 **machnen** : machen (16) / machte (11) / gemacht (5) / macht (3) / mache (1) / mach (2)
- 38 **unter** : unter (36) / unters (2)
- 37 **hin**
- 37 **rot** : rot (20) / roten (7) / roter (4) / Rot (6)
- 37 **scheinen** : schien (31) / scheint (4) / scheine (1) / schienen (1)
- 37 **Ulla**
- 36 **groß** : großen (15) / groß (9) / große (7) / großes (3) / größer (1)
- 36 **zwei** : zwei (33) / Zwei (3)
- 35 **klein** : kleine (12) / kleinen (12) / kleines (7) / Klein (2) / kleiner (2)
- 35 **Wolf**
- 35 **Zigarette** : Zigarette (23) / Zigaretten (12)
- 34 **Augen**
- 33 **fragen** : fragte (19) / gefragt (5) / fragend (3) / frage (2) / fragen (2) / fragenden (1) / fragt (1)
- 33 **hinter**
- 33 **wenig** : wenig (24) / wenige (3) / wenigen (2) / weniger (2) / weniges (1) / Wenige (1)
- 32 **denen**
- 31 **da** : da (28) / Da (3)
- 31 **damals** : damals (27) / Damals (4)
- 31 **leise** : leise (25) / leiser (3) / Leise (1) / leisen (2)
- 31 **viel** : viel (19) / viele (8) / vielen (3) / vieles (1)
- 31 **Angst**
- 30 **bis** : bis (29) / Bis (1)
- 30 **doch** : doch (25) / Doch (5)
- 30 **legen** : legte (14) / lege (9) / gelegt (4) / legt (2) / legen (1)
- 30 **Nein**
- 30 **Augenblick** : Augenblick (24) / Augenblicke (6)
- 30 **Straße** : Straße (25) / Straßen (5)
- 29 **bekommen** : bekam (16) / bekommen (10) / bekommt (2) / bekäme (1)
- 29 **daran**
- 29 **oft** : oft (24) / Oft (5)
- 29 **plötzlich** : plötzlich (27) / Plötzlich (2)

- 29 **kennen** : kannte (18) /kenne (3) /kennen (3) /kennt (3) / gekannt (2)
- 28 **bringen** : brachte (11) /brach (5) /bringen (5) /bringt (4) /Bringen (1)
/gebracht (2)
- 28 **essen**: essen (12) /gegessen (7) /aß (4) /aßen (3) /äße (1) /iß (1)
- 28 **lang** : lange (14) /lang (9) /langen (4) /langer (1)
- 28 **Stadt**
- 27 **finden**: fand (12) /gefunden (7) /finden (6) / fanden (1) /findest (1)
- 27 **öffnen** : öffnete (19) /öffnen (3) / geöffnet (3) /öffne (1) /öffnete (1)
- 26 **fast** : fast (24) /Fast (2)
- 26 **hassen** : haßte (12) /hasse (5) /gehaßt (5) /hassen (2) /haßt (2)
- 25 **lächeln** : lächelte (12) /lächelnd (10) /lächeln (3)
- 25 **laufen** : lief (18) /laufen (5) /läuft (2)
- 25 **sehr**
- 25 **setzen** : setzte (17) /gesetzt (5) /setzen (3)
- 25 **sollen** : sollte (11) /sollen (5) /soll (4) /solle (2) /sollten (1) /sollst
(1) /sollten (1)
- 25 **spüren**: spürte (22) /gespürt (3)
- 25 **weiß** : weißen (15) /weiße (6) /weißem (1) /weißer (1) /weißes (1) /
Weiße (1)
- 24 **beid-** : beiden (15) /beide (7) /Beide (1) /beides (1)
- 24 **denn**
- 24 **genau** : genau (22) /genauer (2)
- 24 **neben**
- 24 **ohne**
- 24 **Wickweber** : Wickweber (17) /Wickwebers (7)
- 24 **Zeit** : Zeit (21) /Zeiten (3)
- 23 **bleiben** : blieb (12) /bleiben (3) /bleib (3) /bleibe (1) /bleibt (1) / blieben
(2) / geblieben (1)
- 23 **glauben**: glaubte (12) /geglaubt (4) /glaube (4) /glauben (3)
- 23 **gut** : gut (14) /guten (4) /gutes (3) /gute (1) /guter (1)
- 23 **manchmal** : manchmal (18) /Manchmal (5)
- 23 **sitzen** : gesessen (7) /saß (7) /sitzen (6) /sitze (1) /sitzt (1) /saßen
(1)
- 22 **jemand**

- 22 sieben
- 22 werfen : warf (16) /werfen (4) /geworfen (1) /wirft (1)
- 22 zusammen
- 22 Bild : Bild (17) /Bilder (5)
- 22 Haustür
- 22 Kaffee
- 22 Tag : Tag (12) /Tage (6) /Tagen (3) /Tages (1)
- 22 Wirtin
- 21 hinein
- 21 langsam
- 21 lesen : lesen (8) /las (7) /liest (3) /gelesen (2) /lies (1)
- 21 schreiben : schrieb (16) /geschrieben (5)
- 21 ziehen : zog (13) /ziehen (5) /ziehe (1) /zogst (1) /gezogen (1)
- 21 Kopf
- 21 Mark : Mark (18) /Marken (3)
- 21 Tasche : Tasche (18) /Taschen (3)
- 21 Wasser
- 20 später
- 20 sprechen: sprach (9) /gesprachen (5) /sprechen (2) /spricht (2) /sprachen (1) /sprich (1)
- 20 vorbei
- 20 Wort : Wort (14) /Worte (4) /Worten (2)
- 19 ab
- 19 abends
- 19 erzählen : erzählt (16) /erzählen (3)
- 19 gar
- 19 gegen : gegen (18) /Gegen (1)
- 19 hängen : hing (6) /hingen (5) /hängen (4) /gehangen (2) /hängt (1) /Hängt (1)
- 19 heute : heute (16) /Heute (3)
- 19 reden : reden (16) /rede (2) /geredet (1)
- 19 schön : schön (14) /schönen (3) /Schön (2)
- 19 sechs
- 19 zurück

- 19 Maschine : Maschinen (11) / Maschine (8)
- 19 Zettel
- 18 nun : nun (16) / Nun (2)
- 18 selbst
- 18 vergessen : vergessen (9) / vergaß (2) / vergaß (2) / vergaßen (1) / vergesse
(1) / vergesse (1) / Vergessen (1) / Vergiß (1)
- 18 vielleicht : vielleicht (13) / Vielleicht (5)
- 18 während
- 18 Blumen
- 18 Flur
- 18 Hedwigs
- 18 Minute : Minute (9) / Minuten (9)
- 18 Theke
- 17 allein
- 17 alt : alten (5) / alt (3) / alte (3) / Alte (3) / Alten (2) / alter (1)
- 17 deren
- 17 kaufen : kaufen (7) / kaufe (3) / kaufte (3) / gekauft (2) / kauft (1) /
gekauften (1)
- 17 neu : neue (7) / neu (4) / neuen (4) / neuer (1) / neues (1)
- 17 versuchen : versuchte (10) / versucht (3) versuchen (2) / versuchten (2)
- 17 warten : wartete (10) / warte (2) / wartet (2) / warten (1) / warteten (1)
/ Wartet (1)
- 17 weg
- 17 Licht
- 17 Mund
- 17 Name : Namen (14) / Name (3)
- 17 Tisch : Tisch (12) / Tischen (3) / Tische (1) / Tisches (1)
- 16 dort : dort (12) / Dort (4)
- 16 erscheinen : erschien (8) / erschienen (6) / erscheinen (2)
- 16 einzig : einzige (9) / einzigen (5) / einziger (1) / einziges (1)
- 16 grün : grünen (8) / grün (4) / grüne (2) / grünes (1) / grüner (1)
- 16 herum
- 16 schob
- 16 Was

- 16 zwischen
- 16 Erinnerung
- 16 Preis : Preis (9) / Preise (6) / Preisen (1)
- 16 Seite
- 15 Bett
- 15 Brief : Brief (9) / Briefe (4) / Briefen (1) / Briefes (1)
- 15 Fenster : Fenster (13) / Fenstern (2)
- 15 Kind : Kinder (13) / Kind (2)
- 15 Leben
- 14 gerade : gerade (12) / geraden (1) / gerader (1)
- 14 halb : halb (8) / halbe (3) / halben (3)
- 14 jung : junge (7) / jungen (4) / jung (2) / junges (1)
- 14 lieben : liebe (3) / lieben (3) / liebte (3) / liebt (2) / geliebt (2) / liebst (1)
- 14 riechen : roch (11) / riechen (3)
- 14 schicken : geschickt (7) / schicken (3) / schickte (2) / schickten (1) / Schickt (1)
- 14 schnell
- 14 suchen : suchen (5) / suchte (5) / gesucht (3) / suchend (1)
- 14 tief : tief (11) / tiefen (2) / tiefer (1)
- 14 tragen : tragen (3) / trug (10) / getragen (1)
- 14 verdienen : verdient (6) / verdienen (4) / verdiente (4)
- 14 verstehen : verstand (4) / versteht (3) / verstanden (2) / verstehe (2) / verstünde (2) / verstehen (1)
- 14 weinen : weinte (3) / weinen (2) / geweint (4) / weinende (4) / weinend (1)
- 14 Bahnhof : Bahnhof (13) / Bahnhofs (1)
- 14 Brötchen
- 14 Flink
- 14 Hunger
- 14 Judengasse
- 13 anfangen : anfang (8) / anfangen (2) / anfangst (1) / anfangen (1) / anfängt (1)
- 13 drei

- 13 frisch : frisch (9) /frischen (3) frische (1)
- 13 her
- 13 hinten
- 13 ob
- 13 recht : recht (9) /rechte (3) /rechten (1)
- 13 schwarz : schwarzen (5) /schwarz (3) /schwarze (3) /schwarzer (2)
- 13 vier
- 13 Buch : Bücher (9) /Buch (4)
- 13 Café
- 13 Korbmachergasse
- 13 Mullers
- 13 Schwester
- 13 Tochter
- 13 Weise
- 12 davon
- 12 erschrecken : erschrak (7) /erschrocken (2) /erschraken (1) /erschrecken (1) /erschrickt (1)
- 12 heißen : hieß (7) /heißt (5)
- 12 schlagen : schlug (8) /schlagen (2) /schlage (1) /schlugen (1)
- 12 schreien : schrie (7) /schreien (5)
- 12 steckte
- 12 weiter
- 12 zehn
- 12 Arm
- 12 Blick
- 12 Küche
- 12 Laden
- 12 Leute
- 12 Zug
- 11 ansehen : anzusehen (9) /ansah (2)
- 11 arbeiten : arbeitete (6) /gearbeitet (2) /arbeiteten (2) /arbeiten (1)
- 11 bevor
- 11 bitte
- 11 blond : blond (7) /blonden (2) /blonde (1) /blonder (1)

- 11 **drücken** : drückte (8) /gedrückt (3)
- 11 **gern** : gerne (8) /gern (3)
- 11 **gleich** : gleich (9) /gleiche (1) /gleicher (1)
- 11 **hell** : hellen (4) /helle (3) /heller (3) /helles (1)
- 11 **heraus**
- 11 **müde** : müde (10) /Müde (1)
- 11 **schwer** : schwer (7) /schweren (3) /schwere (1)
- 11 **schwiege**
- 11 **seit** : seit (9) /Seit (2)
- 11 **steigen** : stieg (7) /steigen (1) /steige (1) /steig (1) /gestiegen (1)
- 11 **voll** : voll (6) /voller (4) /volle (1)
- 11 **wohnen** : wohnte (4) /wohnen (3) /wohne (2) /wohnt (1) /wohnten (1)
- 11 **Arbeit**
- 11 **Bruder**
- 11 **Fleisch**
- 11 **Kuchen**
- 11 **Lippen**
- 11 **Mantel**
- 11 **Müller**
- 11 **Stunde** : Stunden (8) /Stunde (3)
- 11 **Telefon**
- 11 **Uhr**
- 10 **darauf**
- 10 **eins**
- 10 **freundlich** : freundlich (7) /freundlichen (2) /freundliches (1)
- 10 **froh**
- 10 **gleichgültig** : gleichgültig (7) /gleichgültige (3)
- 10 **nett** : nett (8) /netter (2)
- 10 **oben**
- 10 **rufen** : rief (6) /gerufen (4)
- 10 **schmutzig** : schmutzig (3) /schmutzige (3) /schmutzigen (3) /schmutziger (1)
- 10 **schüttelte**
- 10 **unten**

- 10 **verlieren** : verlieren (4) /verliere (2) /verloren (2) /verlorene (2)
- 10 **zeigen** : gezeigt (4) /zeigen (3) /zeigte (3)
- 10 **zwanzig**
- 10 **Ding** : Dinge (8) /Ding (1) /Dingen (1)
- 10 **Gott** : Gott (9) /Gottes (1)
- 10 **Haar**
- 10 **Koffer** : Koffer (9) /Koffers (1)
- 10 **Lehrlingsheim** : Lehrlingsheim (9) /Lehrlingsheimes (1)
- 10 **Monat** : Monat (5) /Monate (4) /Monats (1)
- 10 **Rose** : Rosen (9) /Rose (1)
- 10 **Schritt** : Schritte (8) /Schritt (2)
- 10 **Stück**
- 10 **Suppe** : Suppe (9) /Suppen (1)
- 10 **Teller**
- 10 **Tod**
- 10 **Treppe** : Treppe (9) /Treppen (1)

中国語の基本語彙「了」について

望月圭子

0. はじめに

本稿の目的は、中国語の基本語彙「了」が、テンス・アスペクトと如何に関わるかを検証することにある。検証に当たっての方法論としては、Comrie (1976) による枠組みを用いる。

従来の研究では、次に示すように、「了」には、その統語的分布の相違から、二種類の形態素が存在するとされてきた。

(1) 二種類の「了」

- ① 「-了₁」：動詞の後に付加される接尾辞。
- ② 「了₂」：文末に付加される終助詞。

この二種類の「了」の用法を例示すると、(2) のようになる。

- (2) a. 他去 了₁ 美国。(彼はアメリカへ行った)
- b. 他去 美国 了₂。(彼はアメリカへ行って、今もアメリカにいる)

Li and Thompson (1983) によると、(2a) の「-了₁」の機能は、‘完結相’ (Perfective) を表すアスペクト標識である一方、(2b) の「了₂」の機能は、‘現在に關与する状態’ (Currently Relevant State) を表す終助詞とされている。

本稿では、「了」には二種類の形態素が存在するとみなす。その根拠として、以下の点が挙げられる。

第一に、接尾辞的「-了₁」と終助詞的「了₂」は、同一文中に共起する。例えば、

- (3) 他 去 了₁ 美国 了₂。(彼はアメリカへ行って、今もアメリカにいる)

「了」が動詞の後ろと文末の両方に生起するという言語事実は、両者の機能が異なっていることを示す重要な根拠となる。

第二に、両者は、アスペクト辞との共起において、相異をみせる。接尾辞的「-了₁」は、他のアスペクト辞と共起不可能であるが、終助詞的「了₂」は、他のアスペクト辞と共起可能である。

(4) a. *他 去 一過 一了 美国。

b. 他 去 一過 美国 了。(彼はアメリカへ行ったことがある)

例えば、(4)において、「一過」は経験相を表す接尾辞であるが、接尾辞的「一了₁」とは共起不可能である一方で、終助詞的「了₂」とは共起可能である。この例は、アスペクトとの関わりにおいて、両者の機能が異なることを示す。

第三に、両者は、法助動詞との共起においても、相異をみせる。接尾辞的「一了₁」は‘認識的法助動詞’(Epistemic Modals)とも、‘義務的法助動詞’(Deontic Modals)とも共起不可能である。即ち全ての法助動詞と共起不可能である。一方、終助詞的「了₂」は、認識的法助動詞とも、義務的法助動詞とも、共起可能である。

(5) 認識的法助動詞との共起

a. *他 {可能 / 應該} 吃 一了 飯。

~かもしれない ~に違いない

b. 他 {可能 / 應該} 吃 飯 了。(彼はたぶんご飯をもう食べてしまっているだろう)

(6) 義務的法助動詞との共起

a. *他 {要 / 想 / 敢 / 肯 / 能 / 可以} 吃 一了 飯。

必要 願望 ~する勇気がある ~しようとする ~できる ~してもよい

b. 他 {要 / 想 / 敢 / 肯 / 能 / 可以} 吃 飯 了。

(彼はご飯を食べ {なければならなく / たく / る勇気があるように / ようとするように / られるように / てもよいように} なった)

第四に、両者は、否定辞との共起においても、相異をみせる。接尾辞的「一了₁」は、否定辞「不」「没」とともに、共起不可能である。一方、終助詞的「了₂」はアスペクトと関わる否定辞「没」とは共起しないが、否定辞「不」と共起可能である。

(7) a. *他 {不 / 没} 吃 一了 飯。

b. 他 {不 / *没} 吃 飯 了。(彼はご飯を食べなくなった)

本稿は、以上の四点を根拠として、接尾辞的「一了₁」と終助詞的「了₂」は異なる形態素とみなし、以下、両者が各々どのようなテンス・アスペクト的機能をもつかを検証する。

1. テンスと「了」

本節では、「了」がテンスとどのように関わりをもつかを考察する。まず、本論に入る前に、Comrie (1976) による‘場面’ (situation) の定義を紹介する。場面とは、述語によって表示される、文やテキストのレベルでの、時間の流れにおける単位を指す。簡単にいうと、意味解釈において時間的に把握可能な状態や出来事のことである。テンスとは、場面と場面の‘外的時間関係’を示し、一方アスペクトとは、場面自体の‘内的時間構成’を示す。場面は、その内部構造の性質の相異によって、次の三つのタイプに分けられる。

(8) 場面の種類

- a. 状態 (state) : ‘静的’ (static) 場面。主に形容詞や状態動詞によって表示される。原則としては、アスペクトとして把握不可能。
- b. 出来事 (event) : ‘動的’ (dynamic) 場面。主に動作動詞によって表示される。一まとまりの全体として、‘完結相’ (Perfective Aspect) 的に捉えられる。
- c. 過程 (process) : ‘動的’ (dynamic) 場面。進行中のものとして、不完結的に捉えられる。

1. 1 テンスの定義及び分類

テンスは、場面と場面間の外的時間関係を示す。つまり、表示されたある場面の時点と別の場面の時点、即ち基準時点とも外的関係を示す。テンスは、基準時点が何かによって、‘絶対的テンス’ (Absolute Tense) 及び‘相対的テンス’ (Relative Tense) とに分類される。

I. 絶対的なテンス (Absolute Tense)

絶対的テンスとは、発話時である現在を基準時とし、記述される場面を直接、発話時現在に関係づけるテンスである。つまり、ある場面時と発話時（現在）間との、「過去－現在－未来」というdeicticな時間関係である。一般的に形態論的な形式の対立でその関係が表わされることが多いが、「過去－非過去」の対立しかない言語（例えば日本語）や、形態論的に絶対的テンスの表示がない言語（例えば中国語）もある。

- (9) a. John studied linguistics. (過去)
b. John studies linguistics. (現在)
c. John will study linguistics. (未来)
- (10) a. 太郎は言語学を勉強した。(過去)
b. 太郎は言語学を勉強する。(非過去)

- (11) a. 張三去年大学畢業。(張三は、去年大学を卒業した)
 b. 張三明年大学畢業。(張三は、明年大学を卒業する)

(11) から分かるように、中国語では形態論的対立によって絶対的テンスを表す手段が欠けている。「過去－現在－未来」という絶対的なテンスの関係づけは語彙的手段(時間副詞)や文脈によっておこなわれる。

II. 相対的テンス (Relative Tense)

記述される場面を、発話時現在にではなく、別の場面の時間(参照時間, relative time)に関係づけ、場面間の「同時性－先行性－後続性」という相対的な時間関係を表す。形態論的な手段による絶対的テンスの表出は言語の普遍的現象ではないが、相対的テンスの表出は普遍的な言語現象といえるかもしれない。以下、英語と日本語における相対的テンスを例示したい。

- (12) a. When walking down the road, I often meet John.
 b. When walking down the road, I often met John.
 c. Having met John earlier, I didn't/don't need to see him again.

英語では、一般的には‘定形動詞’(finite verb)の形式は絶対的テンスを、‘不定動詞’(non-finite verb)の形式は相対的テンスを表示している。さらに、一般的には現在分詞は‘相対的現在’(同時性)を、過去分詞は‘相対的過去’(先行性)を表すとされる。従って、(12a, b)では、主文の動詞の形態論的形式の対立“meet”vs. “met”によって、絶対的な「現在」と「過去」がそれぞれ表される。一方、(12c)を(12a, b)と比べると、(12a, b)の従属節にある動詞の現在分詞形式“walking down”は、場面“walk down the road”と場面“meet John”との同時進行性を意味する。これに対して(12c)の過去分詞形式“having met”は両場面の進行継起性を表す。

次に日本語の相対的テンスを例示しよう。次の例文(13)は工藤(1995)によるものである。

- (13) a. 飛行機が墜落した。消防隊が現場にかけつけた。負傷者が助けだされた。
 (絶対的過去及び相対的過去(場面間の継起性))
 b. 飛行機が墜落している。消防隊が現場にかけつけている。負傷者が助けだされている。
 (絶対的現在及び相対的現在(場面間の同時性))

(13a)では、絶対的過去及び相対的過去(場面間の継起性)の読みがとられる一方、

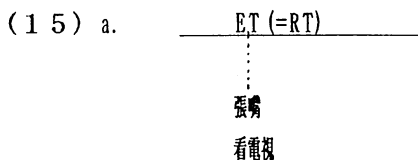
(12b) では絶対的現在及び相対的現在(場面間の同時性)の読みがとられる。つまり、日本語の場合は、形態論的形式の「～る」と「～た」との対立によって絶対的なテンスが表され、「～ている」と「～る」の対立によって、相対的テンスが表される。さらに、「～ている」が‘不完結性’(Imperfectivity)を、「～る」が完結性を表すアスペクト標識でもあるから、相対的テンスがアスペクトと緊密な関係があることがうかがえる。完結性とは場面を一まとまり、即ち時間的な境界が存在するものとして把握するから、完結性は、他の場面との継起性を保証する。一方、不完結性は場面をいくつかの‘局面’(phase)に分けて把握し、そこには時間的な境界が存在しないので、場面間の同時性を保証することになる。完結性の標識が継起性を表し、非完結性の標識が同時性を表すという同じ現象が日本語ばかりではなく、中国語にもみられるが、中国語の場合については、第2節で詳述する。

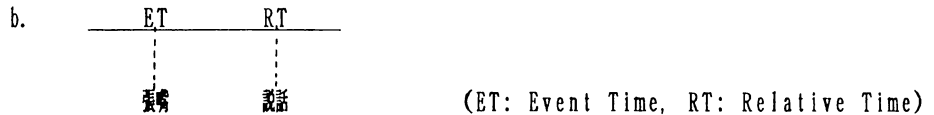
1.2 相対的テンスと「-了」

中国語には、形態論的手段による絶対的テンスの対立が存在しない。しかし、相対的テンスに関しては、どうだろうか。以下、中国語には、相対的なテンス対立が存在し、接尾辞的「-了₁」と終助詞的「了₂」は共に相対的テンス標識として機能することを論ずる。まず、「-了₁」の場合から考える。

- (14) a. 他張着嘴看電視。(彼は大きな口を開けたままテレビを視{る/た})
 b. 他張了嘴說話。(彼は大きな口を開けてから喋{る/った})

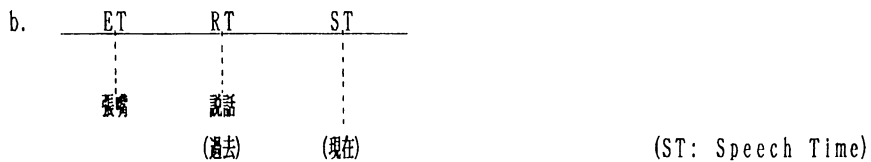
(14a) では、「張嘴」(大きな口を開ける)という出来事の場面と、参照時となる、もう一つの出来事の場面「看電視」(テレビを視る)とが同時に行なわれると解釈される。一方、(14b)では、場面「張嘴」は参照時の場面「說話」より先行する。言い換えれば、中国語では、‘進行相’(Progressive)の「-着」は相対的同時性、完結相の「-了₁」は相対的先行性を表すのである。このことを図式化すると、それぞれ(15a)と(15b)となる。





中国語には形態的な対立による絶対的テンスを表す手段がないので、(14)のような文は発話時との時間関係が曖昧である。(16)のように、「剛才」(さっき)のような時間副詞を加えることによって、絶対的テンスが表示される。

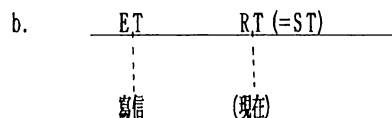
(16) a. 他剛才張了嘴說話。



(16)では、「說話」という出来事は、時間副詞の「剛才」によって、語彙的に発話時現在との時間関係即ち絶対的過去が保証される。と同時に「-了」によって、出来事の「張嘴」と「說話」との時間関係即ち相対的過去が表示される。

関係づけられべき基準時がはっきりと指し示されていない場合は、基準時は一般に現在(発話時)と解釈される。例えば、

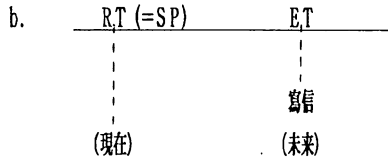
(17) a. 我寫了信。(私は手紙を書いた)



(17)では、特定の時間副詞がなく、文脈からの時間的指示も欠如しているので、出来事「寫信」(手紙を書く)の時間関係づけの基準時は発話時現在と解釈される。また「-了」の付加により、「寫信」は発話時の現在より先行しておくと解釈される。このように、「-了」は先行性を表す相対的テンス標識なのである。

さて、「-了」は、時間副詞や文脈による時間的表示がない場合、常に過去と解釈されるが為に、しばしば絶対的過去を表す標識と誤解されやすい。この誤解は次に示すような、未来を指示する時間副詞と「-了」との不共起によっても生じる。

(18) a. *我明天寫了信。

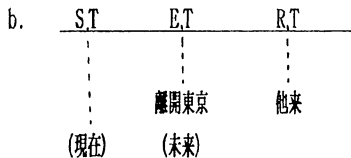


(18) では、「-了」の付加により先行性を示す出来事「寫信」が発話時現在より先に、つまり過去の出来事として行なわれていると解釈される。しかし、この解釈は時間副詞「明天」(明日)が表す未来の意味解釈と矛盾し、(18)は非文法的となる。ここで注意しなければならないのは、未来を指示する時間副詞と「-了」が共起できないのは、「-了」が絶対的過去を表す標識という誤った認識に帰因するのではなく、「-了」が示す先行性、基準点が発話時であること、副詞によって指示された未来という要因間の矛盾に帰因するという点である。

「-了」が絶対的過去を示す標識ではないことは、(19)に示すように、未来の環境に生起する例からも証明される。

(19) a. 明天他来的時候、我大概已經離開了東京。

(明日彼が来る頃には、私はもう東京を離れているだろう)



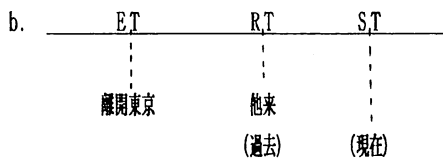
(19) では、時間副詞「明天」によって、全文は絶対的未来の読みがとられる。「離開東京」(東京を離れる)は、参照時とされる「他来的時候」(彼が来る時)より先行するから、「-了」の付加が可能である。

以上の議論から明らかなことは、「-了」は、第一に絶対的テンスとは関わりがないということ、第二に相対的過去(先行性)を示すということである。

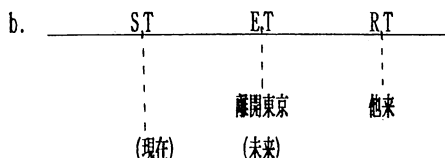
1.3 相対的テンスと「了」

次に、終助詞的「了」も相対的過去を表すことを示す。まず、次の例を考えよう。

(20) a. 昨天他来的時候、我已經離開東京了。



(21) a. 明天他来的時候、我大概已經離開東京了。

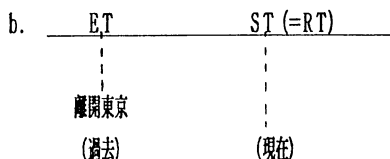


(20a) では、まず時間副詞「昨天」によって、全文は絶対的過去の読みがとられる。つまり「離開東京」も「他來」も、発話時の現在より先行する。さらに、文末の「了₂」によって、「離開東京」と「他來」との間の時間関係が決定する。即ち「我離開東京」という出来事は、「他來」という参照時となる出来事よりも先行するという解釈が与えられる。一方(21a)は、時間副詞「明天」によって、絶対的未来の読みをとる。つまり、「我離開東京」も「他來」も発話時現在より後に起こる。さらに、「了₂」によって両場面の時間的発生順序が決められる。即ち、「了₂」が付加される「我離開東京」が基準時とされる「他來」より先行することになる。

(20) 及び(21) からわかることは、「了₂」は、絶対的テンスが過去であれ、未来であれ、相対的過去だけを表すという点である。

次に、「了₂」も、語彙的・文脈的に時間指示がない場合は、発話時現在が常に参照時となる。

(22) a. 他離開東京了。(彼はもう東京を離れてしまった)



(22a) は、文脈からの時間的指示がない状況下では、絶対的過去の解釈を示す。しかし、この解釈は、「了₂」が絶対的過去を指示しているからではなく、発話時現在が参照時として解釈され、「離開東京」が参照時より先行することを「了₂」が表示しているから生じるのである。

以上の考察をまとめると、次のようになる。接尾辞的「-了」と終助詞的「了」は統語論的に異なる形態素とみなされるが、テンスとの関わりにおいては、同じ機能を表す。即ち、「参照時の出来事よりも先行するという相対的過去」を表す。しかし、次の第2節で述べるように、両者はアスペクトとの関わりにおいて、異なる機能を示す。

2. アスペクトと「了」

2.1 完結相

時間と深く関わっている点においては、アスペクトはテンスと共通しているが、しかし、その関わり方の本質が異なっている。テンスがある場面の他の場面との外的な時間関係を把握するのに対して、アスペクトはある場面の内的時間構成を把握する。アスペクトは場面の内的時間構成の捉え方によって、基本的に、‘完結相’ (Perfective Aspect) と ‘不完結相’ (Imperfective Aspect) とに分類される。

2.1.1 完結相と不完結相

完結相というのは、Comrie (1976) によれば、「動的な場面 (出来事) をその外側から眺めて、その内部構造を区別だててすることをしない相」である。言い換えれば、場面を一まとまりとして把握することである。Li&Thompson (1983) の言葉でいう「時間的、空間的、或いは概念的に制限された (bounded) 相」がComrie (1976) の完結相に相当する。工藤 (1995) も、「完結的場面は時間的な‘限界’ (limitedness) がある」と解釈している。

一方、不完結相というのは、「動的な場面 (過程) をその内側から眺めて、その内部の時間構成をいくつかの‘局面’ (phase) に分けて把握」する。例えば、典型的な不完結相として、(23) に示すような‘進行相’ (Progressive Aspect) が挙げられる。

(23) 他来的時候、我正在看電視。

(彼が来た時、私はちょうどテレビを視ていた)

(23) では、出来事「他来」(彼が来る)は、その時間的内部構成は考慮されず、一まとまりとして捉えられるから、完結的な読みがとられる。一方、「看電視」(テレビを視る)のほうは、進行相を表す助詞「在」が付加されている。よって「看電視」は、いくつかの局面に分けられ、その中のある一局面において、「他来」が起こる。

さらに、Comrie (1976) によると、完結性というのは、ある場面に内的な時間構成が全く欠けていることを意味するのではなく、このような内的な時間構成に言及しないということの意味している。例えば、

(24) a. 共産党統治了中国四十年。

(共産党は中国を40年間統治した)

b. 共産党統治中中国四十年期間、發動了無數次的政治運動。

(共産党は中国を40年間統治してきた間、数えきれないほどの政治運動を起こした)

(24a) 及び (24b) 中の従属節は、各々同じ命題「共産党統治中国四十年」を表す。

この命題には、内的な時間構成、四十年という期間が存在する。しかし(24a)と(24b)中の従属節では、この内的な時間構成に対する捉え方が異なる。つまり、(24a)の場合は、この時間構成を場面の外側から眺め、一まとまりとして把握する。一方、(24b)の場合は、「政治運動」が40年という時間構成内に数えきれないほど起こったという文脈によって、場面の内的時間構成が分割的に捉えられる。従って、同じ場面であっても、(24a)の場合は完結的に捉えられ、(24b)は不完結的に把握される。

2.1.2 完結相と「-了₁」

従来の中国語のアスペクトに関する研究(e. g. Li&Thompson, 1983; 胡裕樹・范曉, 1995; etc.)では、定義や術語の使用に多少相違があるものの、接尾辞的「-了₁」が完結相を表すアスペクト標識だということがほぼ定説となっている。しかし、ここで注意すべき点は完結相を表す場合に「-了₁」が義務的に生起するわけではない点である。例えば、次の(25)a.中の従属節及び(25)bは共に、完結相を示す。しかし、「-了₁」の生起に関しては、相異をみせる。即ち前者においては「-了₁」が生起できず、後者では「-了₁」の生起は義務的となるのである。

(25) a. 他来(*了)的時候,我正在看電視。

b. 共產黨統治了(*了)中国四十年。

では、「-了₁」の生起は、一体どのような規則によって支配されているのだろうか。以下Li and Thompson(1983)が挙げている現象に沿って、筆者の解説を加える。

I. 「-了₁」が生起できない環境

① 状態や進行の場面

- (26) a. 我喜歡(*了)蘋果。 (状態)
 (私はりんごが好きだ)
 b. 我天天吃(*了)蘋果。 (状態)
 (私は毎日りんごを食べる)
 c. 我在看(*了)電視。 (進行)
 (私はテレビを視ている)

(26a)は状態動詞によって、(26b)は副詞「天天」によって、状態の場面が表さ

れる。状態の場面は恒常的・超時的な性質や慣習を強調するから脱アスペクト的である。従って、全てのアスペクト標識と共起しないはずである。(26c)は進行の場面だから一まとまりの、‘境界をもつ’(bounded)出来事として捉えられることができず、完結相を表す「-了」は当然こうした環境には生起しない。

② 完結の意味がすでに含まれる語彙(‘結果補語’等)が存在する場合

- (27) a. 他從家裡走到學校。(‘方向補語’)
(彼は家から学校まで歩 {く/いた})
b. 我寄給他一封信。
(私は彼に手紙を一通送 {る/った})
c. 他笑得站不起來。(‘結果補語’)
(彼は笑いすぎて立てなくなった)

以上の例では、「到/給/得」はその語彙的特質として、完結性を表すので、「-了」の生起は必要なくなる。

II. 「-了」の生起が義務的な環境

① 数量詞、程度副詞及び‘定’(definite)の目的語が動詞に後接する場合

- (28) a. 他睡了三個小時。(数量詞)
(彼は三時間眠った)
b. 他來得晚了一點。(程度副詞)
(彼は来るのが少し遅かった)
c. 他遇見了張老師。(定名詞)
(彼は張先生にたまたま出会った)

Li and Thompson (1981) は、(28a, b, c) の場合、いずれも各場面は、‘境界で区切られた’(bounded)、『一まとまりの’(in its entirety) 出来事として捉えられなくてはならないので、「-了」の出現は義務的となると述べている。(28a)では、「三個小時」という境界によって、「三時間の睡眠」という完結した一区切りが捉えられる。(28b)では、「彼が来るべきであった時刻」という基準点と、「実際にやってきた時刻」という参照時とのずれが境界で区切られた一区切りとみなせるようである。この点については、彼らは言及していないが、このような解釈が可能であろう。(28c)では、「張老師」という定の名詞が、「出会う」という出来事を時間的に完結したものとして捉えなければ

ならない要因となっていると彼らは述べている。

② 動詞自身の語彙的特性による場合

(29) a. 他去年死了。(彼は去年亡くなった)

b. 我忘了他的電話號碼。(私は彼の電話番号を忘れてしまった)

中国語において、動詞「死／忘」は、その語彙的特性として、完結的に解釈されなくてはならないので、「-了」の出現が義務的となる。このことは、(30)のような、不完結な環境において「死／忘」の生起が不可能であることから予測される。

(30) a. *他正在死着

He is dying.

彼は死にかけている。

b. *他忘着他的日文。

He is forgetting his Japanese.

彼は日本語を忘れかけている。

中国語においては、「死／忘」のような動詞は不完結な環境には生起しない。一方、英語及び日本語では、不完結な環境においても生起可能である。このような語彙的特性は、個別言語によって異なる現象であって、普遍的現象ではない。

③ 連続する場面中の先行場面である場合

(31) 他吃了飯才来。(彼はご飯を食べてからやって来た)

この用法は、「-了」の相対的テンス機能に起因すると思われる。即ち「-了」は、相対的過去、先行性を表す機能をもつ為、先行場面においては義務的に生起するのである。さて、こうしたテンス的先行性は、アスペクト的完結性と、どのような必然的な関わりをもつのだろうか。この点について、次に考察したい。

2. 1. 3 完結性と先行性

(32) *他吃(着)飯才来。

(32)を(31)と比較してみても分かることは、場面「他吃飯」(彼がご飯を食べる)

が場面「他来」（彼が来る）に先行すること（相対的過去）は、そのアスペクト的な完結性によってはじめて保証される、という点である。言い換えれば、ある場面が、一まとまり（時間的に、空間的に、或いは概念的に境界で区切られた出来事）として把握されなければ、他の場面との対比における先行性（継起性）は成り立たないのである。逆にいうならば、場面間の同時性、即ち相対的現在、場面の内的時間構成の不完結性によって保証される。例えば、

（33） 他笑着、跳着、走了。（彼は、笑いながら、飛びながら、行ってしまった）

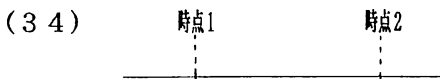
二つの場面「他笑」と「他跳」は、不完結的なので、共に一まとまりの場面として把握できない。そのために、二つの場面間の継起性は表されず、場面間の同時進行性の読みがとられることになる。

以上、接尾辞的「-了」が完結相を表すこと、その生起の条件は、ある場面が時間的、空間的に、或いは概念的に境界で区切られた一まとまりと捉えられていること、そしてテンスの先行性が完結性によって成立することを述べた。

2.2 パーフェクト相

2.2.1 パーフェクト相の定義

Comrie (1976) によると、'パーフェクト相' (Perfect Aspect) とは「ある状態をそれに先行する場面と関係づけて捉えること」である。つまり、以下の図が示すように、時点1に起こる先行場面の内的時間構成を捉えると同時に、二つの時点の間の外的時間関係をも把握する。



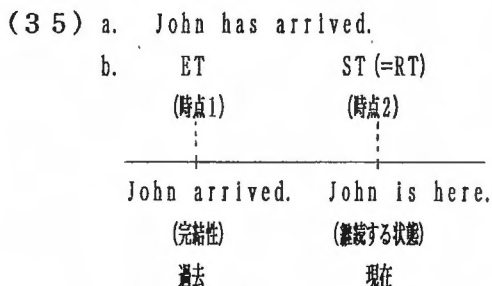
時点1：先行する場面そのものの時間

時点2：先行する場面から結果として生じる状態の時点。

故に、工藤 (1995) が指摘するように、パーフェクト性は、アスペクト的なもの（先行する場面の内的時間構成の把握）とテンス的なもの（先行する場面と効力として後続する状態との外的時間関係の把握）が交互浸透していて、もはや単純なアスペクト的意味ではない。

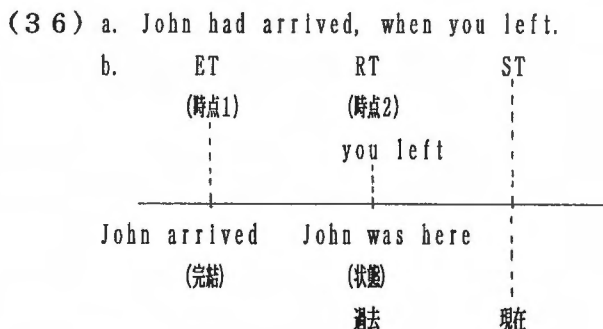
パーフェクト相は、(34)の図中の時点2の絶対的テンスによって、次の三種類のパーフェクト相に分けられる。

I. 現在パーフェクト (Present Perfect) : 過去の場合面と現在の状態との関係を表す。



時点1に起こる場面“John arrived”は、一まとまりとして捉えられ、従って、その時点ですでに完了され、さらに、その結果/効力は、状態として、後続の時点2、即ち発話時現在まで引き続き存在している。この継続される状態は“Now John is here”を含意する。

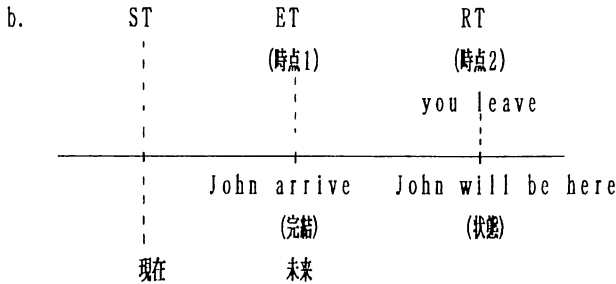
II. 過去パーフェクト (Past Perfect) : 過去の状態と、更にそれに先行する場合面との関係を表す。



時点1に起こる出来事“John arrived”は、その時点で完了し、その状態が時点2まで残留している。さらに、時点2が発話時と絶対的過去の関係をなすから、過去パーフェクトである。つまり、“John was here”という状態の含意は時点2においては確実であるが、発話時現在において、“John is here”を含意するかどうかは判断できない。

Ⅲ. 未来パーフェクト (future Perfect): 未来の状態とそれ以前にあった場面との時間的関係を表す。

(37) a. John will have arrived, when you leave.



一まとまりとして捉えられる場面“John arrive”は、結果としてその状態が時点2まで持続し、さらに時点2が発話時の現在と絶対的な未来の時間関係をなすので、未来パーフェクトとなる。つまり、未来の時点2において、“John will be here”という含意／状態が推測される。

2.2.2 パーフェクト相と「了₂」

Li and Thompson (1983) は「了₂」が‘表意機能’ (Communicative function) として、‘現在と相関する状態’ (Currently Relevant State) を表すと述べている。この現在と相関する状態とは、Comrie (1976) のパーフェクト性に一致すると思われる。つまり「了₂」はパーフェクト相を表すと読み替えることが可能である。このことを次の例で示す。

(38) a. 他昨晚抵達（了）東京。

(彼は、ゆうべ東京についた。)

(彼がついたのは昨夜である。)

b. 昨晚他（已經）抵達東京了。

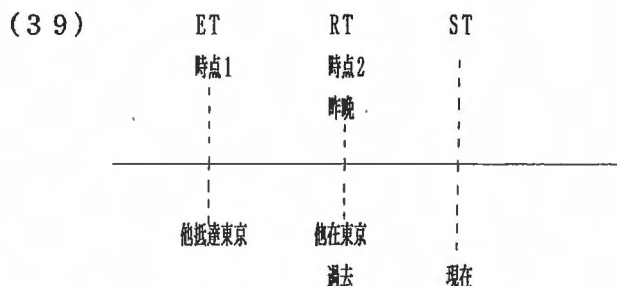
(ゆうべ、彼はすでに東京についていた。)

(彼がついたのは昨夜以前の任意の時点である。)

(38a) は単に絶対的過去に起こった一つの出来事を、一まとまりとして、即ちその内的時間構成を分割せずに捉えて描写している。つまり、過去完結相である。一方、

(38b) は、Li and Thompsonの解釈によると、「他抵達東京」（彼が東京に着く）は、一つの‘事態’ (state) として、ある特定の状況、例えば、「昨夜彼が東京にいた」に関係づけて伝えられている。(38b) は、Comrieの定義を借りていうと、次の図式となり

過去パーフェクト相を表すことになる。



(39) が示すように、時点1に起こった完結性的な出来事「彼は東京についた」はその結果の状態「彼が東京に着いている」が時点2の「昨夜」まで持続しており、さらに時点2が発話時現在と絶対的過去の時間関係をなす。

さらに、Li and Thompsonによると、関係づけられる特定の状況は、明示されていない場合(40a)は、発話時現在を指し、明示されている場合は、文脈によって過去(40b)のみではなく、未来(40c)の可能性もある。前者は、現在パーフェクト相であり、後者は過去及び未来パーフェクト相である。

(40) a. 現在パーフェクト相

A: (電話で) 張三在嗎? (張三はいますか?)

B: 他出去買東西了。 (彼は買物にでかけています)

b. 過去パーフェクト相

A: 昨天打電話給你、可是你不在家。 (昨天電話したけど、いなかったね)

B: (昨天) 我出去買東西了。 (昨天は買物にでかけていたんだ)

c. 未来パーフェクト相

A: 下個礼拜三我想請你看電影。 (来週水曜日映画に誘いたいんだけど)

B: (下個礼拜三) 我已經在日本了。 (来週水曜日はもう日本にいるな)

2.2.3 パーフェクト相の意味的下位分類と「了」

Comrie (1976) によると、意味解釈の相異によって、パーフェクト性は次の四タイプに下位分類できる。以下、便宜上全て発話時現在を基準時間とし、現在パーフェクトについてのみ論じる。過去及び未来パーフェクトは、関係づけられる時点が異なっているものの、その原理は現在パーフェクトと全く一致する。

(41) パーフェクト性の下位分類

- a. '結果のパーフェクト' (Perfect of Result) : 現在の状態が過去のある場面の結果として捉えられる。例えば、

(42) John has gone to Tokyo.

(“Now John is in Tokyo.”という現在の状態が暗示される。)

- b. '経験のパーフェクト' (Experiential Perfect) : 過去にある時点に、少なくとも一つの場面があったことを表す。例えば、

(43) John has been to Tokyo.

((42)と比べると、“Now John is in Tokyo.”という状態が表されない点に注意。)

- c. 存続する場面のパーフェクト (Perfect of Persistent Situation) : 過去に始まり現在まで持続している場面を表す。

(44) John has lived here for ten years.

(十年前に始まった場面“John lives here.”はいまなお続いている。)

- d. '接近過去のパーフェクト' (Perfect of Recent Past) : 近い過去に起こった場面を表す。英語のパーフェクト相の特徴とされる。例えば、

(45) John has just arrived.

英語の場合は、パーフェクト相は、時間の限定表現と共に起不可能という制約がある。例えば、

(46) *John has arrived at ten o'clock this morning.

しかし、“recently”や“just”等の時間副詞と共に起する場合は、この制約の効力が失われて、(46)のように接近過去のパーフェクトの読みがとられる。

以上の定義に基づいて中国語の「了」を分析すると、以下(47)～(50)が示すように、「了₂」は結果及び存続する場面のパーフェクトではあるが、経験及び接近過去のパーフェクトではないことが分かる。中国語の場合は、経験のパーフェクトは「-過」で接近過去のパーフェクトは「-了₁」や無標識の完結相過去によって表される。

(47) 結果のパーフェクト

- a. 他離開東京了。(所以、你再也見不到他了。)

(彼はもう東京を離れている。(だから、もう会えないよ))

- b. 他離開了東京。(隔一天就遇到了車禍。)

(彼は東京を離れた。(一日おいて交通事故にあった))

(47a) は結果としての状態(「彼はすでに東京にいない」)を発話時現在の時点に

関係づけ、パーフェクト性を表す。一方、(47b)は単に過去に実現した出来事を描写し、完結性を表す。

(48) 存続する場面のパーフェクト

- a. 我在日本住了十年了(, 還沒去過富士山)。
(私は日本に十年住んでいる(が、まだ富士山に登ったことがない))
- b. 我在日本住了十年(, 從沒去過富士山)。
(私は日本に十年住んだが、富士山に登ったことがない)

(48a)は、「私が東京に住んでいる」という状態がいまなお続いていることを含意し、パーフェクト性を表す。一方、(48b)は、発話時現在の状態より、過去の出来事のほうに注意を払うので、「私が東京に住む」は現在の状態を含意せず、従って、完結相過去である。

(49) 経験のパーフェクト

- a. 他去過日本(好幾次)。(彼は日本に(何度も)行ったことがある)
- b. 他去日本了。(彼は日本に行ってしまった)

(49a)では、「彼が日本に行く」は発話時現在より前の過去のある段階ですでに完了され、経験を表す。一方、(49b)は、「彼がいまここにいない」という状態が発話時現在まで続いており、出来事の結果を表す。

(50) 接近過去のパーフェクト

- a. 他剛剛才抵達東京(*了)。(彼はいまさっき東京に着いた)
- b. 他最近才知道這件事(*了)。(彼は最近このことを知った)

英語の場合と異なり、中国語の場合は、パーフェクトを表す「了₂」は「最近」(recently)や「剛剛」(just)のような時間副詞と共起しない。従って、(45)が示すような接近過去のパーフェクトは、中国語には存在せず、完結相過去が用いられる。

2.2.4 場面とパーフェクト性

Comrie (1976)によると、パーフェクトは、ある特定の時点の状態をその相対的な過去に起こったある場面に結びつけるが、この場面の性質によって、三タイプに分けられる。即ち、出来事(完結性)、状態、及び過程(不完結性)の三種類のパーフェクトである。この三つのタイプのパーフェクトは中国語においても「了₂」によって表されることを以下に示す。

a. 出来事のパーフェクト

(5 1) 他吃了三碗飯了。(彼はご飯を三杯食べた)

「三碗飯」という数量詞によって、場面「吃了三碗飯」は完結性の読みがとられ、出来事の場合と解釈される。更に、文末の「了」によって、「他吃了三碗飯」という状態が結果として発話時現在にも残留し、従って、結果のパーフェクトの解釈が生まれる。

ここで注意すべき点は、接尾辞的「-了₁」と終助詞的「了₂」がとるアスペクトの「作用域」(Scope)の相異である。「-了₁」が動詞句をその領域に取り込むのに対して、「了₂」は命題全体を領域に取り込む。言い換えれば、つまり、「-了₁」の作用域はそれが付加される動詞句にしか及ばない。例えば、(5 1)は、次のような論理形式表示で両者の作用域の相異が表示される。

(5 2) 了₂ [I_P他 了₁ [V_P吃三碗飯]]。

(5 2)では、パーフェクトの「了₂」が、完結性の「-了₁」をその作用域内に含む。このことは、意味解釈上、パーフェクト性は、先行場面の完結性を常に含むという事実と一致する。

b. 状態のパーフェクト

(5 3) a. 花很紅。(花は赤い)

b. 花紅了。(花は赤くなった／花が赤くなり始めた)

(5 4) a. 他有錢。(彼はお金持ちだ)

b. 他有錢了。(彼はお金持ちになった／彼はお金持ちになり始めた)

(5 3 a) (5 4 a) 共に述語が示す状態性により、恒常的・超時的場面を表す。一方(5 3 b)と(5 4 b)は、状態のパーフェクトと状態への「始動相」(Ingressive Aspect)という二種類の解釈が可能である。状態のパーフェクトの解釈においては、「了」によって、「花が赤い」という状態的場面が一まとまりとして捉えられ、さらにこの完結的な場面が発話時現在に関係づけられ、パーフェクトの読みがとられる。ここでの「了」は終助詞的な「了₂」である。一方、状態への始動相においては、「了」は接尾辞的「-了₁」であり、元来は完結相として機能していたものである。状態は恒常的・超時的な場面であるから、無標の場合、脱アスペクト的で、完結相とは共起しないはずだが、有標の場合においては、完結相が実質は始動相として機能するようになる。完結相が始動相へと変容する現象は、興味深い現象であるが、少なくともこのような場合は完結性は存在しない。

c. 過程（不完結性）のパーフェクト

(55) a. 他（在）吃飯了。（彼はご飯を食べ始めた）

b. 他吃（了）飯了。（彼はご飯を食べてしまった）

(55a) では場面「（在）吃飯」（ご飯を食べる）は、過程として不完結的に把握される。こうした文脈で、文末の「了」が生起すると、状態のパーフェクトの場合と同じく始動相の読みがとられる。つまり、「ご飯を食べる」という先行場面の発話時現在における完了が保証されておらず、完結性をもたない。(55b) の場合は、先行した場面が完了してその結果が発話時現在に残るというパーフェクト性をもつ。

以上の分析から、次の結論が得られる。つまり、完結性を表す出来事の場面における「了」だけが無標のパーフェクト性を持ち、状態及び不完結性を表す過程の場面における「了」は共に有標なパーフェクト性、即ち始動相をもつ。

3. 結論

以上、接尾辞的「-了₁」及び終助詞的「了₂」という二つの形態素が、テンス・アスペクトとどのような関わりをもつかについて考察した。その結論は以下のようにまとめられる。

I. 相対的テンス機能

接尾辞的「-了₁」も終助詞的「了₂」も、共に先行性を表す相対的テンス標識として機能する。

II. アスペクト的機能

接尾辞的「-了₁」も終助詞的「了₂」も、アスペクト標識として機能するが、前者は「完結性」(Perfectivity)を示すのに対し、後者は「パーフェクト性」(Perfect)を示す。

参考文献

- 張 麟声 (1993) 『漢日語言対比研究』、北京大学出版社、北京。
Comrie, B. (1976) *Aspect*. Cambridge University Press.
——— (1985) *Tense*. Cambridge University Press.
Hornstein, N. (1990) *As Time Goes By*. MIT Press, Cambridge, Mass.
胡裕樹・範曉他 (1995) 『動詞研究』、河南大学出版社、開封、中国。
工藤 真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現』
ひつじ書房、東京。
Li, Charles N. and Sandra A. Thompson (1981) *Mandarin Chinese: A Functional Reference Grammar*. University of California Press, Los Angeles.
劉 一之 (1995) 「“了”の語法意義」、『中国語学』242: 56~63、日本中国語学会。

マレー語の準動詞が作る構文

正 保 勇

1. はじめに

次に挙げる 3) から 12)迄の文に於ける太字の部分の動詞は、次の 1), 2)の様に、単独で使用される主節の動詞とは異なり、*telah, sudah, akan, belum*等のアスペクト助動詞と共に現れることがなく、*me-*他動詞の場合には、*me-*が付された形か、3人称の形でしか現れない。このような特徴を持つ動詞は、下の例が示す様に、別の先行する本動詞の直後か、若しくは間に別の要素が介在する形で現れることが多い。単独で現れる場合、その解釈上の主語は、本文の主語、或いは本文中の要素と同一指示的である場合と、不定である場合とがある。本論では、このような特徴を持つ動詞（これを今後準動詞と呼ぶことにする）が、本動詞／形容詞、或いは本動詞／形容詞を含むセンテンス、或いは又センテンス中の要素に対して有する関係に就いて探り、その類型化を行うことを目的とする。

1) Ayah Harun **menanganinya** kerana dia nakal.

2) Ayah Harun akan **menanganinya** bila dia merenget-renget meminta duit.

3) Beliau berkata, rawatan cara lama melalui 28 pusat serenti seluruh negara menunjukkan kurang 25 peratus berkesan **menangani** gejala itu. (Berita Harian 10/8/1996)

4) Othman Hafsham dari Cinematic berkata, ketika ini pihak bank masih tidak yakin dengan kemampuan pengusaha filem tempatan dan sukar melibatkan diri dengan industri perfileman negara. (Berita Harian 30/8/1996)

5) Katanya melalui pinjaman itu, penerbit filem akan bebas daripada unsur riba dan tidak terbelenggu dengan kadar faedah yang kadangkala tidak mampu ditanggung penerbit. (Berita Harian 30/8/1996)

6) "Oleh kerana godaan dan nafsu lebih mudah untuk diikuti berbanding dengan nilai murni, program latihan etika harus dijalankan berte-rusan menerusi latihan susulan dan seminar," katanya. (Berita Harian 30/8/1996)

7) Suara Johar Sdn Bhd (SJSB) melalui Best 104, stesen radio swasta pertama di negara ini mempunyai slogan barunya dikenali sebagai Sensasi Selatan kini mulai mendapat perhatian pendengar radio terutama di Lembah Klang. (Berita Harian 30/8/1996)

8)Penat menulis,dia membaca.

(An Illustrated Malay English Dictionary,P.356)

9)Berucap merasmikan Hotel Sheraton Labuan berharga RM 87 juta di sini hari ini,Perdana Menteri mahu semua hotel di Labuan menyumbang secara positif ke arah menjadikan segi kegiatan kewangan, tetapi juga merangkumi bidang pelancongan.

(Berita Harian 30/8/1996)

10)2 pelajar cedera dihempap kipas.(Berita Harian 22/6/1996)

11)Orang itu mudah menangis. (Kamus Komprehensif Federal,P.359)

12)Sajak baharu bukanlah satu hasil seni yang mudah dapat difahami.

(Kamus Dewan,P.838)

動詞／形容詞の直後に現れる準動詞を更に詳しく観ると、1) untuk 補文詞を必ず取るもの、2) untuk 補文詞の出現が随意的なもの、3) untuk 補文詞を取らないものと、3つのグループに分けることができる。本論では、「動詞／形容詞＋準動詞」のパターンを成す構文に就いて、準動詞が先行の動詞／形容詞に対して有する関係の類型化を行うと共に、先行動詞／形容詞が後続の準動詞に補文詞 untuk の出現を許すかどうかという面からの分類も合わせて行うつもりである。

次の13), 14), 15) は見かけ上は、「動詞／形容詞＋準動詞」の構文と考えられるかも知れないが、実際には異なる構文であると考えなくてはならない。

13)Keadaan semua mangsa yang dimasukkan ke hospital dilaporkan tidak membimbangkan dan stabil. (Berita Harian 13/8/1996)

14)Alagendra mengaku tidak bersalah. (Berita Harian 30/8/1996)

15)Janganlah melepaskan peluang melanjutkan pelajaranmu itu.

(Kamus Komprehensif Federal,P.391)

つまり、13) は16) の埋め込まれた文から“keadaan semua mangsa yang dimasukkan ke hospital” が上昇変形によって、主文の主語の位置に移動することによって派生したものである。従って、dilaporkanとtidak membimbangkan とは層を異にする2つの動詞が偶々同じ面上に並んだ構文である。

16)Dilaporkan keadaan semua mangsa yang dimasukkan ke hospital tidak membimbangkan dan stabil.

14) も13) と同じく、層を異にする動詞が偶々同じ面上に並んだものである。

14) の“tidak bersalah”は、次に示す如く、埋め込まれた下位の文の述部動詞

が、補文子が無形であるために、表面上は主節の動詞である“mengaku”と接触した形となっているのである。

17) Alagendra mengaku [CP ϕ *pro* tidak bersalah].

15) も上記の2例と同じで、“melepaskan peluang”と“melanjutkan pelajaranmu itu”とは層を異にしている。後者の動詞句はpeluangを修飾の係先とする修飾節中の動詞句である。底名詞であるpeluangとそれを修飾するmelanjutkan pelajaranmu ituの間を結紮詞yangで結ぶことができない類いの複合名詞句であるために、表面上は両動詞句が同じ面に位置している様に見えるのである。従って、この様に、層を異にする2つの動詞、或いは動詞と形容詞が偶々同一平面に並んだことにより生じた構文は、ここでの考察の対象とはしないことにする。

つまり、ここで考察の対象にするのは、単独で現れる準動詞、若しくは同一層内の文中で他の動詞或いは形容詞の直後か、介在要素を挟んで現れる準動詞が作る構文である。ここで、筆者が中心的テーマとするのは、「動詞／形容詞＋準動詞」の結合の類型化である。この「動詞／形容詞＋準動詞」構文のグループ別けはこれまでなされたことがなかった。これまで、無造作、無反省に同じ箱に入れられてきた種々雑多な要素に整理を施して、文法的カオスに秩序への方向づけを与えられればというのが本論の狙いである。ここでは、コーパスとして、主として、1996年8月から12月迄のBerita Harian紙の記事を利用したが、他の辞書、或いはそれ以外の時期の新聞記事からも一部例を採った。言うまでもないことであるが、ここに挙げた例には、新聞記事特有の構文がかなりある。

2. 「動詞／形容詞＋動詞」構文の類型化

次の19)の“bersedia”の後の“menghulurkan”の前には、20)の様に、“untuk”という補文子を被せた形も可能であるが、18)ではそれができない。

18) Selang beberapa hari orang tua saya datang memberitahu yang saya akan dikahwinkan dengan orang itu pada tarikh yang ditetapkan.

(Wanita/Berita Harian 20/8/1996)

19) Malaysia berdedia menghulurkan sebarang bentuk bantuan kepada kerajaan Peru dalam menyelesaikan krisis penahanan lebih 400 orang tebusan, termasuk duta negara ke Peru, Datuk Ahmad Mokhtar Selat sejak tiga hari lalu. (Berita Harian 21/12/1996)

20) **Malaysia berdedia untuk menghulurkan sebarang bentuk bantuan ke-**
pada kerajaan Peru dalam menyelesaikan krisis penahanan lebih 400
orang tebusan, termasuk duta negara ke Peru, Datuk Ahmad Mokhtar
Selat sejak tiga hari lalu. (Berita Harian 21/12/1996)

勿論, 18) も次の21) の様に言い換えることができ, 意味の上でも, ほぼその同一性が保たれているが, 21) の“untuk” に導かれる句は, 「～するために」という目的を表す副詞句として機能しているのであって, この点, 20) に現れる純然たる補文子としての“untuk” とは異なる。

21) **Selang beberapa hari orang tua saya datang untuk memberitahu**
yang saya akan dikahwinkan dengan orang itu pada tarikh yang
ditetapkan.

又, 目的を表す副詞句を作る“untuk” 句は, 20) の場合とは違い, 第1要素の動詞との間が離れたり, 他の要素で分断されても構わないという性格を持っている。22) に現れている“untuk” 句は21) の“untuk” と同じく副詞句を構成するものである。

22) **Untuk pengetahuan tuan, pada suatu hari ada orang datang ke rumah**
untuk melamar saya.

この様に, 「動詞／形容詞＋動詞」構文では, 第2要素の動詞に, 純然たる補文子としての *u n t u k* を取ることができるかどうかという観点から, 1) *u n t u k* 補文子をとることが義務的なもの, 2) *u n t u k* 補文子の出現が随意的なもの, 3) *u n t u k* 補文子を取ることができないものという3つのグループに分けられる。次節からは, この3つのグループ毎に, 第1要素の動詞, 或いは形容詞の種類と, それが後続要素の補文子に課す制限に就いて観ていくことにする。

2. 1. *u n u t u k* 補文子が義務的なもの

後続の準動詞に補文子“untuk” を常に要求するものは, 非常に数が少なく, 偶々出現形に *u n t u k* が付いていても, 殆どの場合, それを省くことが可能である。実際に, Berita Harian 紙に登場した例では, *mengelak, memutuskan* がある。次に, その例を掲げる。

23) **“Saya bukannya sombong apabila mengelak untuk ditemubual. . .” ka-**
tanya ketika ditemui di majlis pelancaran Wanita Hari Ini diTV3,
semalam. (Berita Harian 21/8/1996)

- 24)Katanya, beliau **memutuskan untuk menyemak semula kes itu** selepas membacanya di akhbar bahawa Mustapha menggunakan rantai besi untuk mencederakan pengguna jalan raya. (Berita Harian 5/6/1996)

2. 2. **u n t u k** 補文子が随意的なもの

前節でも述べた様に、後続の準動詞に **u n t u k** 補文子の付加が随意的なものは、非常に数が多く、**u n t u k** が付いた形で現れる準動詞の殆どが、それを省略しても構わないと言っても過言ではない。次の 25) から 32)迄の例は、後続の準動詞に **u n t u k** 補文子が現れている例である。

- 25)Kita haruslah berusaha mencari kesenangan.

(Kamus Komprehensif Federal P.542)

- 26)Oleh kerana saya pegang kata-kata itu akhirnya saya pun setuju

untuk bersanding.

(Wanita/Berita Harian 20/8/1996)

- 27)Mereka bercadang untuk mendaki Gunung Tahan.

- 28)Ia sentiasa cenderung untuk berbohong.

- 29)Dia berminat untuk membaca buku sejarah.

- 30)Saya masih belum mampu untuk membeli rumah.

- 31)Dunia perniagaan cuba untuk menghindarkan keadaan kemelesetan

ekonomi yang berpanjangan ini dengan menghuraikan secara bertena-
ga atau membuat penyusunan semula. (Radio Jepun 3/1/1996)

- 32)Siapa yang berani untuk menangkap kucing hutan itu ?

これらの例に於ける **u n t u k** は、全て次の様に省略することが可能である。

- 33)Kita haruslah berusaha mencari kesenangan.

- 34)Oleh kerana saya pegang kata-kata itu akhirnya saya pun setuju
bersanding.

- 35)Mereka bercadang hendak mendaki Gunung Tahan.

(An Illustrated Malay-English Dictionary, P.67)

- 36)Ia sentiasa cenderung berbohong.

- 37)Dia berminat membaca buku sejarah.

- 38)Saya masih belum mampu membeli rumah.

- 39)Dunia perniagaan cuba menghindarkan keadaan kemelesetan ekonomi
yang berpanjangan ini dengan menghuraikan secara bertenaga atau
membuat penyusunan semula.

40)Siapa yang berani menangkap kucing hutan itu ?

(An Illustrated Malay-English Dictionary, P. 46)

形容詞の後に, u n t k 付きの準動詞が現れる例を挙げると, 次の様になる。

41)Dia layak untuk memenangi hadiah pertama.

42)Pakaian mencolok mata tidak manis untuk dipandang.

43)Dia tidak mampu untuk membayar kereta mewah itu.

44)Kita sukar untuk menterjemah novel Jepun ini.

45)Kita mudah untuk membaca buku cerita ini.

2. 3. u n t u k 補文子を取らないもの

次の例に現れる berjaya, terpaksa, berhenti は, 後続の準動詞に u n t u k 補文子が付加されたものを取らない。

46)・・・kerana ia berjaya membawa banyak perubahan dan kemajuan pulau ini, kata Datuk Seri Dr Mahathir Mohamad. (Berita Harian 30/8/1996)

47)Kami terpaksa menunggu sebab hari hujan.

(Kamus Komprehensif Federal, p. 377)

48)Murid-murid berhenti bercakap bila guru mengajar.

(Kamus Komprehensif Federal, p. 200)

berjaya, terpaksaは次の例に観られる如く, 後に me - 形の動詞だけでなく, 人称形も取ることができる。

49)Pencuri itu telah berjaya ditangkap polis.

50)Penerbangan ke Peru itu terpaksa dibatalkan Perdana Menteri.

この点に於いて, berjaya, terpaksaは boleh, dapat, mahu, ingin, hendak, mesti, harus, perlu 等の助動詞と共通点を有しており, 助動詞に近いと言える。助動詞が後に人称形を従える例として, perlu, ingin が現れる文を挙げる。

51)Buku itu perlu awak beli.

52)Kereta mewah itu ingin saya beli.

次に, 形容詞が後に u n t u k 無しの準動詞を従える例に就いて観てみる。次にその例を掲げる。

53)Ibu pandai memasak kari ayam.

54)Schari sebelum raya kaum ibu sibuk memasak.

(Kamus Pelajar Bahasa Malaysia, P. 635)

55)Dia asyik membaca novel.

これらの形容詞は、孰れも、後に人称形を従えることはない。次例を参照されたい。

56)* Kari ayam pandai dimasak ibu.

57)* Kuih sibuk dibuat ibu.

58)* Novel itu asyik dibaca ayah.

従って、次の2文は意味を異にする。

59) Kucing pandai menangkap tikus.

60)* Tikus pandai ditangkap kucing.

最初の文は「猫は鼠を捉えるのが旨い」という意味であるが、後者は無理を承知で訳すとすれば、「鼠は猫に捉えられるのが得意である」という意味に解釈されることになる。

これらの形容詞と似ているものとして、elok, patutがあり、これらも次の例が示す如く、後に u n t u k 無し準動詞を従える。

61) Dia patut membayar hutang itu.

62) Awak elok membaca buku itu.

又、これらを準動詞と切り離して文頭に持って来ることも可能である。

63) Patut dia membayar hutang itu.

64) Elok awak membaca buku itu.

pandai, sibuk, asyik も、同じ様に、これらを準動詞と切り離して、文頭に持って来ることが可能である。

65) Pandai ibu memasak kari ayam.

66) Sibuk ibu memasak.

67) Asyik ayah membaca buku.

又、patut, elok は pandai, sibuk, asyik とは異なり、人称形を従えることが可能である。

68) Hutang itu patut dibayarnya.

69) Buku itu elok awak baca.

以上観てきた様に、pandai, sibuk, asyik は、berjaya, terpaksa と同じく、後に、u n t u k 無し準動詞を要求するが、前者は後者とは異なり、後続の準動詞が、人称形で現れることがない。もう少し正確に言えば、人称形で現れた時には、動作主を主語として取る文の意味と同一にはならないということである。これに対して、berjaya, terpaksa を含む文に於いては、動作主を主語に据えた 70), 71) の文は、目的語焦点化変形の掛かった 72), 73) の文と知的意味を等

しくする。

70) Polis telah berjaya menangkap pencuri itu.

71) Perdana Menteri terpaksa membatalkan penerbangan ke Peru itu.

72) Pencuri itu telah berjaya ditangkap polis.

73) Penerbangan ke Peru itu terpaksa dibatalkan Perdana Menteri.

従って, berjaya, terpaksaは, 助動詞的であるが, pandai, sibuk, asyikはそうではないと言える。

2. 4. 「動詞+非 u n t u k 準動詞」の類型

次に, u n t u k を取らない準動詞が作る構文に, どのようなパターンが見出されるかに就いて考察してみる。次に, その分類と, その例を示す。

A. 準動詞が「～するために」という意味で動詞と関連を持つケース。

74) Pada zaman dahulu orang-orang yang pergi naik haji terpaksa menunggang unta dari Judah ke Mekah.

(Kamus Pelajar Bahasa Malaysia, P. 482)

75) Minggu lalu kami sekeluarga pergi berkelah di Taman Templer.

(Kamus Pelajar Bahasa Malaysia, P. 321)

76) Hanya tinggal tiga hari sebelum Malaysia turun menentang Singapura dalam perlawanan pembukaan kejohanan Piala Tiger di Stadium Nasional, Ahad ini dan banyak petanda positif jelas terserlah.

(Harian Sukan/Berita Harian 29/8/1996)

B. 準動詞が付帯状況, 即ち動詞と同時に進行する事柄を表すケース。

77) Masyarakat antarabangsa tidak boleh mencontohi dasar luar Amerika Syarikat yang 'angkuh' terhadap negara-negara yang sedang bergerak menjalani proses berkenaan.

(Berita Harian 23/8/1996)

78) Puak Islam, Serb dan Croat Bosnia semalam mencapai persetujuan untuk tidak menghalang kubur mangsa pembunuhan beramai-ramai digali serta bekerjasama memberi maklumat mengenai kehilangan penduduk di seluruh republik bekas Yugoslavia itu. (B. H. 6/9/1996)

C. 準動詞が「～に際して」, 「～する場合に」という意味で動詞と関連を持つケース。

- 79) =3) Beliau berkata, rawatan cara lama melalui 28 pusat serenti seluruh negara menunjukkan kurang 25 peratus **berkesan menangani gejala itu**. (Berita Harian 10/8/1996)

D. 準動詞が「～に関して」, 「～に対して」という意味で動詞と関連を持つケース。

- 80) Tentera Thai **bertanggungjawab melakukan lebih 12 rampasan kuasa** sejak sistem pemerintahan beraja dimansuhkan pada 1932. (Berita Harian 30/8/1996)

E. 動詞が後続する準動詞の様態を表すケース。

- 81) Penduduk sebuah kampung di pinggir Nairobi, tidak menghiraukan dua penumpang yang terbunuh dan lima lagi yang cedera, sebaliknya **berebut-rebut melapah lembu yang mati** selepas sebuah trak merempuh binatang itu dan terbalik, lapor sebuah akhbar hari ini. (Harian Sukan/Berita Harian 29/8/1996)

- 82) Atlet angkat berat Iraq, Raed Ahmad **menyusup keluar** dari perkampungan Olimpik di Atlanta, untuk memohon suaka politik di Amerika Syarikat, lapor televisyen Perbadanan Penyiaran Australia (ABC), semalam. (Berita Harian 2/8/1996)

F. 準動詞が動詞の様態を表すケース。

- 83) "Oleh kerana godaan dan nafsu lebih mudah untuk diikuti berbanding dengan nilai murni, program latihan etika harus **dijalankan berterusan** menerusi latihan susulan dan seminar," katanya. (Berita Harian 30/8/1996)

G. 準動詞が動詞の原因, 理由を表すケース。

- 84) Penat **menulis**, dia membaca. (An Illustrated Malay-English Dictionary, p. 356)

85) Zura geram melihat perangai Shida yang mengada-ngada.

(Kamus KBSR Baru Bahasa Melayu, P. 184)

86) Sekurang-kurangnya 83 orang mati dipijak dan lebih 180 lagi cedera semalam selepas peminat bola sepak berebut-rebut masuk ke stadium untuk menyaksikan perlawanan kelayakan Piala Dunia 1998 antara Guatemala dan Costa Rica, kata pihak berkuasa.

(Berita Harian 18/10/1996)

H. 準動詞が「～するのに」, 「～で」の意味で動詞と関連を持つケース

87) Dia asyik membaca buku cerita saja.

(Kamus Pelajar Bahasa Malaysia, P. 29)

88) TELITI... pembeli sibuk menyemak dokumen perjanjian pembelian dan pinjaman perumahan semalam.

(Berita Harian 30/8/1996)

I. 準動詞が「～するのが」の意味で動詞と関連を持つケース

89) Pas rela menggadaikan masa depan umat Islam di negara ini apabila parti itu sanggup bekerjasama dengan DAP dan Parti Bersatu Sabah (PBS), kata Datuk Seri Anwar Ibrahim.

(Berita Harian 3/4/1995)

90) Asia bebas tentukan sendiri kematangan demokrasi.

(Berita Harian 23/8/1996)

91) Timbalan Perdana Menteri berkata, meskipun sebelum ini, usahawan Malaysia agak keberatan berbuat demikian berikutan wujudnya ketegangan di wilayah itu, pengaliran pelaburan di sana akan bertambah berikutan tercapainya perdamaian di antara kedua pihak berkenaan.

(Berita Harian 23/8/1996)

92) Menjelang musim panas, di Darwin, Australia misalnya, ada penduduk yang tidak malu-malu berbogel di khlayak ramai.

(Berita Harian 30/8/1996)

93) Saham Malayan Banking Bhd adalah saham yang elok dibeli kerana ia boleh meningkat sehingga harga RM24 tanpa sebarang masalah, kata seorang pengurus penyelidik dari sebuah syarikat pembrokeran di Lembah Klang.

(Berita Harian 21/8/1996)

J. 準動詞が動詞の内容の詳しい説明になっているケース

- 94)Seorang bomoh yang juga bekas tentera dihukum penjara lapan tahun oleh Mahkamah Tengah di sini, selepas mengaku **bersalah mero-gol gadis bawah umur** pada November 1995.

(Berita harian 15/11/1996)

ここで, “bersalah”は「罪を犯す」という意味だが, それに続く“merogol gadis bawah umur”という動名詞は, どういう罪を犯したかの詳細な説明になっている。

K. 準動詞が動詞の結果を表すケース

このケースでは第2要素は“menjadi”の場合が非常に多い。

- 95)Keseronokan cuti sekolah **berakhir menjadi tragedi** kepada sekumpulan enam orang daripada dua keluarga, apabila tiga daripada mereka lemas di kawasan perkelahan Taman Keluarga Matang, kira-kira 20 kilometer dari sini, petang ini.

(Berita Harian 22/8/1996)

- 96)Selayaknyalah Pak Sudin **dilantik menjadi Ketua Kampung** pula.

(Kamus Dewan, P. 721)

3. 動詞・・・準動詞のパターン

ここではこれまでの例とは違い, 第1要素と第2要素が連続しているのではなく, 両者が他の介在する要素によって分断されている場合に就いて観てみることにする。このパターンに属する例を幾つかの類型に分けると, 次に示す様になる。

A. 準動詞が「～する為に」, 「～するのに」の意味で目的を表すケース

- 97)Polis **mengambil masa kira-kira 15 minit memujuk dia menyerah diri**, yang ketika itu berada dalam rumah Khatijah,”katanya.

(Berita Harian 13/8/1996)

B. 準動詞が附帯状況, 即ち動詞と同時に進行する事柄を表すケース

- 98)Anwar **berkata demikian merasmikan Persidangan Parlimen Komanwel (CPA)** di bangunan Parlimen di sini, hari ini.

(Berita Harian 20/8/1996)

C. 準動詞が動詞の後に続く事柄を表す

99) Rakyat Labuan **mengambil peluang melihat** lebih dekat

100) Tiga lelaki menyamar anggota polis **memecah masuk** ke sebuah rumah Kongsy sebelum menggari mangsa di dalam bilik dan melarikan diri dengan barangan kemas dan elektrik berniali kira-kira RM 3,600 semalam.

D. 準動詞が動詞の結果生じる事柄を表すケース

101) Usaha Umno untuk **mengubah minda rakyat Kelantan menerima perubahan** dan pembangunan serta menolak Pas menampakkan tanda-tanda positif, kata setiausaha Agung Umno, Datuk Mohamed Rahmat, hari ini. (Berita Harian 3/4/1995)

4. センテンスを承ける準動詞

これまで観てきたのは、後続の準動詞と先行する動詞或いは形容詞との間の距離的隔たりの程度に差はあるにしても、後続の準動詞と先行する動詞或いは形容詞との間に或る種の関連が観られた。しかし、これまでの例とは異なり、後続の動詞が先行する動詞とだけ関わりを持つのではなく、後続の準動詞は寧ろその前で一応完結したセンテンス全体と関わるという性格を有する構文が別に存在する。次に掲げるのがその例である。

102) “Terlalu ramai orang ditempatkan di satu tempat **menyebabkan suhu begitu panas …**,” kata pegawai jawatankuasa Palang Merah Antarabangsa (ICRC), Sergio Natarajan, selepas melawat tebusan.

(Berita Harian 21/12/1996)

ここで、“menyebabkan” が関わってくるのは、先行する動詞の“ditempatkan”ではなく、その前で一応完結している、“Terlalu ramai orang ditempatkan di satu tempat”というセンテンス全体である。

5. 名詞に数衍的説明を加える準動詞

102) では、後続する準動詞が関連するのは、先行するセンテンス全体であったが、これとは別に、後続する準動詞が先行する名詞とだけ関連し、それに数衍的な説明を加えるという機能を有する構文がある。次はその様な例である。

103)Unit Pencegah Penyeludupan (UPP) Kelantan menahan 47 pendatang tanpa izin **dipercayai Rakyat Bangladesh** ketika mereka bersembunyi dalam belukar berhampiran Sekolah Menengah Arab Perol ,dekat Pasir Mas. (Berita Harian 15/11/1996)

104)Untuk pengetahuan tuan,pada suatu hari ada orang **datang ke rumah** melamar saya. (Wanita/Berita Harian 20/8/1996)

103)では、“47 pendatang tanpa izin”と“dipercayai Rakyat Bangladesh”との間に結繋詞 *yang* が省略されたと考えるのは無理がある。勿論、次の様に、新聞の見出し等では、できるだけ字数を省き、同時に簡潔な表現にする必要から、屢々、修飾要素が動詞の場合でも *yang* を省くことが起こる。例えば次の様な文がそれである。

105)Lelaki **mengamuk** serang mangsa bertubi-tubi.

しかし乍ら、*ber* -動詞を含む自動詞の一部を除き、動詞の前の *yang* が省略されることはない。例えば、他動詞句“memandu kereta”の前の *yang* を省略した文は、次例が示す如く、非文となる。

106)* Lelaki memandu kereta itu adalah cikgu kami.

こういう事から考えると、“dipercayai Rakyat Bangladesh”の前には *yang* が省略されたと考えるのではなく、「密入国取締りチームは・・・47人の不法入国者を捕らえたが、その不法入国者達はバングラデッシュ人であるとみられる」という文の流れになっていると考えるのが妥当であろう。115)の例は、*ada* の後での *yang* の省略と説明されることもあるが、そうすると、この *ada* という動詞に限って何故 *yang* の省略が起こるのかといったことに対する、充分納得のゆく説明をするのは難しいという問題がある。従って、この場合も、

103)の場合と同様、“orang”の後の“**datang ke rumah melamar**”の部分は、“orang”を主語として承け直して、補足的な説明の機能を果たしていると考えるのが妥当と思われる。

それでは、次の様な例に於ける、“**dikuasai jutawan Malaysia Robert Kuok**”は、どの様に考えたらいいであろうか。

107)Syarikat **dikuasai jutawan Malaysia Robert Kuok** yang berpangkalan di Hong Kong dan disenaraikan di Bursa Saham Filipina(PSE),akan mendirikan sebuah menara pejabat dan kediaman di pusat perniagaan Makati. (Berita Harian 22/8/1996)

107)の“syarikat”は、1)ここで扱った他の例とは異なり、文頭の位置を占めていること、2)初出の名詞である、3)後でそれに先行する部分全体を主部

として承けると考えられる述部動詞 (akan mendirikan …Makati) が現れることから、この名詞を “dikuasai jutawan Malaysia Robert Kuok” という動詞句の主語として承け直すと考えるのには、主語としての資格の不備という点から、無理がある。従って、この例の場合には、 “dikuasai jutawan Malaysia Robert Kuok” の前に *y a n g* の省略が起こった非常に希な例と考えなければならない。この “syarikat” という名詞はもう一つ “yang berpangkalan di Hong Kong dan disenaraikan di Bursa Saham Filipina(PSE)” という *y a n g* 付きの節による限定も受けているということも、前半での *y a n g* の省略を促した要因の一つではあろう。次の例も、*y a n g* の省略されたものと考えなくてはならない。

108) Sebuah lori **kebetulan berada di belakang** dikatakan tidak dapat mengelak lalu terlanggar mereka. (Berita Harian 5/6/1996)

109) “Melalui peruntukan **diwartakan pada 15 Mei 1986** itu, denda tidak melebihi RM5,000 dan penjara tidak lebih dua tahun atau kedua-duanya sekali dikenakan terhadap mereka didapati bersalah,” katanya dalam sidang akhbaranya di Pusat Islam di sini, hari ini. (Berita Harian 5/6/1996)

110) Abdul Hamid berkata, melalui peruntukan **dikenali sebagai Akta 326** itu, setiap al-Quran yang dicetak perlu mendapat kelulusan badan terbabit terlebih dahulu sebelum diedar atau dijual kepada orang ramai. (Berita Harian 5/6/1996)

108) は、107) の場合と同じ理由で、*y a n g* の省略の例と考えられる。109) と 110) では、準動詞が名詞と *i t u* の間に挟み込まれた形になっている。次の例が示す如く、指示代名詞の *i t u* は修飾句や修飾節を締め括る形で一番最後に置かれるのが普通である。

111) Buku hijaunya itu adalah kamus bahasa Perancis-Malaysia.

112) Keretanya yang merah itu adalah kereta nasional Malaysia.

このことを参考にして考えると、109) と 110) に於ける準動詞の部分は、それに先行する名詞を被修飾句とする修飾部と見做されるので、108) と同じく、*y a n g* の省略のケースと考えられる。この様に、*y a n g* の媒介無しに、いきなり先行する名詞を修飾する機能の準動詞は、フォーマルな文章には滅多に現れることがないが、新聞等の記事では最近控えめではあるが、その存在を主張しつつある構文の一つである。

6. センテンスに掛る準動詞

3章で述べた準動詞は、センテンスの最後の位置を占め、先行するセンテンス全体を自らの主語として承け直すという機能を果たしていた。このような、準動詞とは逆に、センテンスの前に置かれて、後続のセンテンスに対して、副詞節相当の機能を果たす準動詞が見られる。次にその様な例を掲げる。

113) **Bercakap kepada Berita Harian** selepas menyampaikan ucap utama sempena Persidangan Kebangsaan Pegawai Pendidikan Daerah/Bahagian di Johor Bahru, semalam, beliau pernah menerima laporan laporan membabitkan seorang guru yang tidak menjalankan tugasnya selama sebulan. (Berita Harian 6/9/1996P)

114) **Menjawab pertanyaan lain**, Dr Wan Zahid yakin persidangan itu dapat menghasilkan resolusi yang jitu ke arah memartabatkan pendidikan bertaraf dunia. (Berita Harian 6/9/1996P)

115) Ada yang mereka pukul kepalanya sampai pening, ada yang mereka lakukan terlebih dahulu ke kamar yang dipenuhi gas, sehingga **keluar dari sana** ia pun lemas.

113) や 114) の様な例は、最近特に新聞等で多く見受けられる構文であるが、ここには英語の分詞構文の影響があると考えられる。しかし、この様な構文は、英語に於ける程、自由に使える訳ではない。例えば、115) では、“*keluar dari sana*” が、「そこから出てきた時には」という意味の副詞節相当の機能を果たしているが、この様な構文は文法的にはマージナルな地位にある。同様に、次の文もその文法性に就いては揺れがあり、この様な構文の文法性を疑う向きもある。

116)* **Tiba di sekolah**, dia dapati Amin, kawannya, belum datang.

115) の様な構文は話し言葉に多く出現する形である。例えば、次の両例は映画の台詞から採ったものであるが、115) と同じく、準動詞の部分が副詞節相当の機能を果たしている。

117) **Datang dulu** pandai buat janji. (Kaki Bakar)

118) **Petik jari berderet-deret datang tau.** (Jimi Asmara)

次の例では、“*waktu fajar sudah menjelang*” から、動詞を倒置させ前に出した形が、副詞節相当の機能を果たしているが、この場合の“*menjelang*” は“*sudah*” が付いている点から考えると、準動詞ではなく、本動詞であると見做せる。

119) **Sudah menjelang waktu fajar** barulah ia dapat tidur.

(Kamus Utama Ejaan Baru(1973), P.194)

6. 副詞句を構成する準動詞

準動詞がそれを包摂する文の主語との関連を断つと、副詞句相当の機能を果たす場合がある。この様な機能を有する準動詞の中には、前置詞に非常に近い性格を獲得しているものもある。次にその例を掲げる。

120) "Kementerian memberi penekanan serius terhadap disiplin terutama membabitkan guru dan kakitangan sekolah.

(Berita Harian 6/9/1996P)

121) Yahaya dihukum penjara selama lapan tahun, berkuatkuasa mulai tarikh dia ditangkap.

(Berita Harian 15/11/1996)

122) Semalam, Setiausaha Parlimen Kementerian Kesihatan, Datuk K Kumaran, berkata beliau mengarahkan bahagian kejuruteraan kementerian menjalankan kajian berhubung perkara itu.

(Berita Harian 3/4/1995)

参考文献

正保勇 (1993). 「関係詞YANGに関する一考察」. 『東京外国語大学論集』46.

—— (1994). 「マレーシア語の品詞」. 『言語研究』IV. 東京外国語大学 (1993年度教育研究学内特別経費).

0.

周知のごとくロシア語においては、文型研究は70年代に盛んに行なわれ、アカデミー文法80年版〔1〕（80年文法と略す。以後同じ）において一つの成果を生んだ。しかし、90年代末の今日までも研究者の間で、完全な見解の一致を見てはいない。

我々は文型研究の現状については先に触れたので〔1〕詳細は割愛するが、問題は、60年文法〔2〕以来今日に至るまでの様々な分類の持つ矛盾の解決と分類原理そのものの問題とに分かれる。Белашапкина〔3,428〕の言うように、文の分類、つまり文型研究においては、どのような原理も単独では意味、形態の双方を遺漏なく含み込む記述はできない。

ちなみにアカデミー文法に関しては、60年文法（伝統的な分類）はより意味・機能を重視し、80年文法は、述定を成立させるのに最低必要な要素のみを分類基準としており、形態を中心とする。そのため、60年文法では、例えば普遍人称文が、表現形式は異なっても、一定の「意味」を表現する独立の型とされるが、一定の意味を持たない定人称文は型としては認められていない。他方80年文法では二肢文の内の N_1-V_2 型の *речь* ことばにおける実現であるとされ、独立の文型としては認知されない。これでは、多様な現実を分析したとはいえないのではないのか。

管見によれば、分類における見解の相違は、一肢文において多いのである。

小論は、最終的には賛否にかかわらず、後代のロシア語研究のいわば出発点となった60年文法の文分類の原理を解明すること、先の拙論〔1〕で扱わなかった一肢文を対象として、普遍人称文に関する結論を検証し直すことを目的としている〔2〕。

小論が我々のテーマである言語における普遍性／一般性／超時間性の問題を解決する糸口になればと思う。

1.

まず 60年文法〔2,5-119〕以来、Гвоздев〔4,85-99〕や伝統文法に定着した一肢文の分類を、Валгина〔5,431〕を例にして挙げよう〔3〕。

1)определенно-личные предложения 定人称文（〔2,5-119〕にはない）

2)неопределенно-личные предложения 不定人称文

Нам пишут о новых достижениях строителей.

3)обобщенно-личные предложения 普遍人称文

Что имеем — не храним, потерявши — плачем.

Любишь кататься, люби и саночки возить.

4)безличные предложения 无人称文

Вечереет. — Не спится, няня: здесь так душно!

5) инфинитивные предложения 不定法文

Тебе искать. Быть дождю. Молчать!

6) номинативные предложения 名辞文

Ночь. Тишина. Двенадцать часов.

7) неполные предложения 不全文 ([5,431] にはない)

— Вы завтра дежурите? — Я.

ロシア語統語論の一大特徴は一枝文の存在であるとされるが、このうち1)2)3)7)を小論では扱い、文の主語（あるいは動詞の示す動作主体）と動作主（以後実際の／現実の動作主とも表記）との照応関係を扱う。なお、紛らわしい場合には例文中の該当する部分には下線を施してある。

では文（型）の記述・分析に移ろう。

1.1 定人称文

— Что скажете, Иванов?

この文型は、60年文法にはないので、様々な研究者の記述をまとめる[4]。

これは、主要成分が直説法現在形、未来形の一、二人称形か命令法で表される主語のない一枝文で、三人称、過去形の文はない。任意の人や物に関係してしまう可能性があるからである。定人称文では、文の隠れた1、2人称の主語と動作主との照応は、文脈に頼る必要（がある場合が不全文）がなく、動詞の形により判断されるので完全文である。

では、定人称文と同様、決して文中に主格主語の現われない不定人称文における照応関係はどうであろうか。

1.2 不定人称文

В этой семье мне всегда рады. Вам обязан предоставить отпуск.

「不定人称文とは、主要成分が直説法現在・未来時制三人称形か過去複数形で表され、不定の人称によって行なわれる動作を表す一枝文である、（中略—中澤）不定人称文は、文中で個人的だがしかし一般化された動作 обобщенном действии、行動が動作主の正確な表示とは無関係に述べられるときに用いられる」これが、60文法の定義であり[2,5]、他の研究者の定義も同工異曲である。[5]

不定人称文の動作主については後に検討するが、動作主は「意図的にことはречьから排除され、不定のものとして意図的に表される」[6,371]。それゆえ話し手（書き手、聞き手、読み手）の注意は動作に集中するのである。

では、Щерба [7,111] にみられるように不定人称文の下位分類とされることもある普遍人称文の場合はどうであろうか [6]。

1.3. 普遍人称文とは60年文法[2,8]の定義では、「一枝単文のうち、主要成分が現在・未来形の2人称単数形（他の人称形はまれ）の動詞によって表され動詞の表す動作がすべての、任意の人称に関係する、あるいは関係しうるもの、

、（中略－中澤）、不定人称文とは異なり、普遍的な意味の一、二称単数・複数の主語を成分として持ちうる。しかし、普遍人称文の最も普通の形は主語のない形である。それゆえ、そのような文は大部分が一枝文に属する」である。

これは、他の研究者にあってもほとんど変わらない。

ところで、60年文法をはじめとする定義の中に「他の人称形はまれ」「普遍的な意味の一、二称単数・複数の主語を成分として持ちうる」という記述があるのは何を意味するのであろうか。

これから研究書、その他の記述を検討してこの疑問を解明していこう。主要成分が直説法、命令法、仮定法で表されるものの順に検討する。なお、説明中で「まれ、頻度数が高い」という箇所は、大半の研究書に記載されているものを記している。まだロシア語全体における一枝文の頻度数については我々の知る限りない。

1.3.1 普遍人称文の表現

I 一枝文

A 直説法現在形／未来形

1. 現在／未来 1人称単数形－非常にまれである。

Хочу－ казню, хочу－ милую.

2. 現在形／未来 2人称単数形－もっとも頻度数が高い。

Слезами горю не поможешь. (諺)

ロシア語ではこの形態の意味が拡大されて一般・普遍的な人称の広い意味をもつ。

3. 現在形／未来 3人称単数形－比較的まれである。

В глаза говорит сладко, за глаза－ гадко. (諺)

4. 現在形／未来 1人称複数形－頻度は高くない。

Что имеем－ не храним, потерявши－ плачем. (諺)

未来 1人称複数形は学術文献などで、共感を惹起しあたかも共同動作に参加を呼びかける感じを与える。

Рассмотрим две точки зрения на этот вопрос. Сравним приведенные примеры.

5. 現在形／未来形 2人称複数形－頻度数低い

За четверть часто до захождения солнца, весной, вы входите в рошу с ружьем без собаки. Вы отыскиваете себе место... (Тургенев)

6. 現在／未来 3人称複数形－まれではない。

Птицу узнают в полете, человека－ в работе. (諺)

主に用いられるのは文学作品や話言葉であるが、主要成分が直説法 3人称複数形の文は、ある動作の通常性を表すために科学文献においても用いられる。

Тензодатчики делают из тонкой проволоки, складываемой《змейкой》.

7. 過去単数形－稀である [8, 20] [9, 151]。その代わりに現在／未来形とともに助詞が *бывало* を用いられる [4, 88]。

Принял присягу, покажи отвагу. (諺)

8. 過去複数形－まれである [7, 151]。

Но вот вы собрались в отъезжее поле, в степь. Верст десять пробирались вы по проселочным дорогом!

Б 命令法－かなり広範に見られる。

Не учи ученого. (諺)

В 仮定法－多くはない。

Много бы взял, да ненадобно. [8, 155]

II 二 肢 文

普遍人称文といえはふつう一肢文と考えらる。しかし、一般的な人称の意味で用いられる代名詞主語をもつ二肢文も存在する。この種の文は文学的な記述や日常会話にも特徴的である。

Ты ждешь час, другой, а его нет.

形態を重視する立場からは、このような文は典型的な普遍人称文の意味をもとうとも普遍人称文ではなく、意味的、文体的な変種にすぎないとも考えることができるだろう。

しかし、文が動詞文でなく名辞文ならば、普遍的な意味を持とうが、文の主体の人称は、人称代名詞を用いて統語的に示すしか方法がない。

Когда ты молод, все кажется прекрасным. [4, 88]

III. 固定した表現。

動詞が形式的、意味的に完全に現実（の動作主）への従属性から解放されてしまえば、そこにはすでに述定はなく、もはや文（普遍人称文）ではなくなり成句的な結合と見なされる。これが下の会話体に特徴的な例である。

Не украшай платье, украшай ум. (諺)

Не учи безделью, учи рукоделью. (諺)

1.3.2.

ところで上にみたように、諺や日常の言語、学術文献において、直説法 3 人称複数形現在／未来形の動詞が普遍人称文と見做されることがあり、しかも決して珍しくない。

В лес дров не возят. (諺)

Читальный зал в библиотеке проветривают регулярно. (日常の言語)

Различают три вида подчинительной связи...; Словосочетания по

структуре делят(разделяют) на простые и сложные. (学術文献)

この場合、形態上不定人称文と区別できない。このような文をどう考えるべきであろうか。これに対して下の3つの見解がある。

1) 60年文法や Кленина Булахов Гневко などは、人称の意味の「拡大」解釈により普遍人称文とする [2,12] [8,151] [10,43] [9,19]。

Не очень-то нынче старших уважают. などの文は、文全体が普遍人称文固有の普遍性を持ち、普遍性のある主語と共起しないからである。また 2) 形式と意味の面からみて、これらの文は普遍性と不定性をともに含むので、不定・普遍人称文 неопределенно-обобщенные предложения である [11] とする考えもある。それに対して、3) 主要成分が二人称単数の文のみを普遍人称文とすべきだという Скобликова [12] がいる。彼女によれば普遍人称文の最大の意味要素は、(話し手、聞き手を第一とする) 任意の人の、文に述べられた観察への個人的な関与 личная причастность の意味なのである。だから話し相手の共感を誘う効果を狙って、完全に個人的な、反復された過去の動作までが普遍人称文で語られることがあるのである。

Бывало, стоишь в углу... и думаешь: 《Забыл про меня Карл Иванович》. (Л.Н.Толстой) ここで個人的関与の意味を保証するのは動詞 2人称単数形の述語だけなのである [12,109-113]。だから Цыплят по осени считают.

Обещанного три года ждут. などの文は、抽象的、一般的な内容をもつもののここには話し手、聞き手の個人的な関与の意味はないので普遍人称文ではないとする。

「共感、、、」は語感の問題で慎重に対処しなければならないが、ここで問題になるのは、一般性、普遍性とはそもそも一体何を意味すのかである。いままでみてきた文における主語・主体と動作主との照応関係を通して普遍性の問題を考察しよう。

- | | | |
|-----------|------------|-------------------------------|
| 1) 固定した表現 | Sub (関係なし) | $S_1 S_2 S_3 \dots S_N$ |
| 2) 人称文 | Sub (関係確定) | $S_1 S_2 S_3 S_4$ |
| 3) 定人称文 | Sub (関係類推) | $S_1 S_2 S_3 S_4$ |
| 4) 不定人称文 | Sub (関係類推) | $(S_1 S_2 S_3 S_4 \dots S_x)$ |
| 5) 普遍人称文 | Sub (関係あり) | $S_1 S_2 S_3 \dots$ |
| 6) 不完全文 | Sub (無関与) | $S_1 S_2 S_3 S_4$ |

ここで記号 Sub は文の主語/主体、 $S_1 S_2 S_3$ は動作主、... は他に動作主があこと、 S_N は無限の数の動作主、 S_x 有限の動作主を指す。() はある範囲内に動作主がとどまることを示す。

1) 普遍人称文が固定し、いわば成句化した表現においては、言語単位なら本来あったはずの主語、主体と現実の動作主との間にはなんの関係もない。それはすでに法、時制(どんな時制でも用いられる)や人称(単数形しかない)を失い語や語結合のレベルに転化している。

2) 人称文では Л.Н.Толстой родился 28-го августа 1828 года. に典型的に何

えるように、文の主語と動作主との照応は容易に確定する。

3) 定人称文では、文の主体と動作主との関係は動詞の形から確定する。しかし関係はまず類推推定され、その後確定される。

4) 不定人称文では「、、不定の人称によって行なわれる動作」[2, 5]の動作主は誰でも構わないのかというと、決してそうではない。不定人称文ではふつう拡大文であり、様々な理由から表現されなかった主語の照応先が示唆される。限定詞(限定状況語や補語詞)は、動作主を類推させたり活動範囲を表すという重要な役割を果たし、ふつう本来主語が占めるはずである、述語に先行する位置を占めるのである。非拡大文はまれであるが、その場合には、主要成分たる非他動詞が物理的に感知される動作を表現する。つまり、文外の状況・環境が動作主を暗示する。Звонят。「ベルが鳴っていますよ(これは、当然今一定の場所を含意する)」

このように不定人称文の動作主は決して無制限のもの、任意の人物ではなく、不定ではあっても、ある活動領域や分野内にその存在が絞られてくるものでなければならない。しかも、その特定化は動詞の形態からなされるのではなく、Белашапкина [13, 55-58]の言うように、様々な統語的な手段による。

この点で、不定人称文はすでにみた定人称文とも、また不完全文とも異なっている。

5) 普遍人称文は、仮に字面では話し手自身の「具体的な」動作が語られようが、その語り手に限らず、誰でもある状況になったら必ず行なう典型的な動作の行なわれ方や状態の現われ方を描くの用に用いられる。典型性が普遍性の意味の基礎となる。批評文や評論では普遍人称文が判断により大きな客観性を与えるのである。

Читая 《Заметки литератора》, с особой отчетливостью осознаешь значение таких произведений, как 《Спутники》 и 《Кружилиха》, в развитии нашей послевоенной прозы(газ.).

6) 不完全文とは、意味的に欠如する統語的な位置の存在する文をさす。何らかの文の要素(主要成分、あるいは二次的成分)は何が欠如しているかを改めて述べなくとも、文脈、状況から自ずと明らかになる[5, 206]。

(1) - Вы завтра дежурите? - Я.

(2) - Вы завтра дежурите? - Завтра.

(3) - Вы завтра дежурите? - Дежурю.

すぐ分かるようにこの種の文は欠如する要素は何でもよく、固有の文型をもたない。そもそもこの文は主語、主体の問題に関して無関与なのである。他の文とはレベルを異にする。

以上からいわば「帰納的に」だが一つの結論がでた。つまり、一肢文における動作主の普遍性、一般性とは、主体、主語と現実の動作主との照応の任意性、自由さであると。だから照応の自由さが保証されれば、いかなる文でも、たとえ主語を持とうが文は普遍性を獲得するのである。下の例で確認しよう。

а. Когда пашут, руками не машут. 普遍人称文

6. На возвышенных местах уже пашут. 不定人称文

この例の 6.における уже存在に注目されたい。文 a.の動詞は特定の時、場所に関係せず、つまり超時間性を示しているが、文 6.では具体的な時、所と関係している。そして、文 6.は不定人称文と解釈するのが自然である。ちなみに、不定人称文では、動作が行なわれる一般的な条件を示す状況語（時、場所、条件、原因等など）がほぼ必ず用いられるのである。

В прошлом году ввели новые правила пользования библиотекой.

В школе проводят интересный эксперимент.

このような限定詞がないと不定人称文と普遍人称文と相違はあいまいなものとなり、中間的なタイプと取られる場合もでてくる。

以上から、現象的には普遍人称文は普遍性を表す文であるといえることが分かった。今度はそれを言語の構造の面から導けないであろうか。

ここで問題になっているのは文と現実との関係照応である。文と現実との関係といえば、最も重要なのは述定の概念である。

2. 文と述定

文は語や語結合とは異なり、文法的な意味をなす述定の存在により、（話し手・書き手の考える）現実と関係し、コミュニケーションの単位となる。具体的には述定は、叙想性、時制、人称という 3つの面で文を現実と相関させる。したがって、文と現実との関係を考えるにはこの 3つの点からみなければならない。

では叙想性、時制、人称はロシア語の構造の中でどのような体系をなすのであろうか。この問題を研究した Jakobson R. [15, 48-49] にならおう。彼は、「転換子と動詞範疇とロシア語動詞」という論文で、欠性二項対立の原理を援用して叙想性、時制、人称を構成する項目を有標項と無標項との対立に分けて分類している。（-の前が有標項、-の次が無標項である）[7]

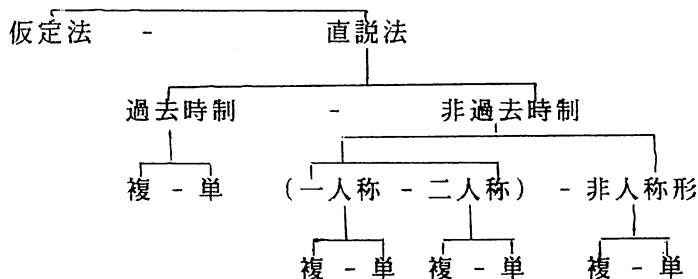
叙想性: 假定法 - 直説法

時制 : 過去時制 - 現在時制

人称 : 人称形（一人称 - 二人称）- 非人称形

数 : 複数形 - 単数形 （模式ではそれぞれ複、単と略）

これを小論に合うように構造化しよう。



この模式から何が読み取れであろうか。これから言語現実の観察の結果と照合してみよう。

2.1. 叙想性

模式の解釈で一般論として言えることは、無標項であればあるほどその照合先の選択が自由、あるいは制限が解除されるということである。

Jakobson R.は動詞の法と述べているが、ここでは事実上主要成分の法と解釈する。仮定法は上の模式で最も高いレベルの有標項であり、先にみたとおり仮定法における普遍人称文が極めて少ないことを証明している。

2.2 時制

普遍人称文は現在形、未来形で現われることが多い。模式より明らかなように、非過去時制（現在形、未来形）は無標項であり、それが確認できる。過去時制は有標項であり、一般性を獲得しにくい筈である。にもかかわらず、普遍人称文で用いられているのはなぜであろうか。この場合にはほぼ必ず動詞が複数個用いられており、文→文という統語構造、意味的には、原因→結果や環境→そこで必然的に起こる事件という構造を持っている。この構造が普遍性をもたらしていると考えられる。

2.3. 人称

模式からは非人称形が普遍人称文には多いという結論がでそうだが、ロシア語では非人称構造は無人称文に割り当てられており、人間主体を持つ場合には人称形が優先される。今までの例でみたように普遍人称文には2人称単数形が多い。これは、非人称文を除いたモードでは2人称単数が最も弱い無標項であることから当然である。

この間の事情を Виноградовは「2人称の形態は1人称よりも抽象的である。ある具体的な話し相手に対する直接の関係を失うことによって、それは一般的な意味を得るのである」と表現している [16, 365.]

3. 定性と不定性

以上みた限りにおいて、60年文法の一肢文の分類は、文の主格主語（ないしは主体）と動作主との照応関係に従っている。つまり、現実の動作主との照応の確定度・特定化の度合いが何らかの手段で希薄になれば、「具体的な動作主と対応した人称文⇒定人称文⇒不定人称文⇒普遍人称文、そして完全に薄れれば⇒固定した表現」となりうるのである [8]。

ロシア語の意味的なカテゴリーである定性・不定性の対立を統語レベルにおいて実現する手段が上の一肢文の対立である。

この対立を、一肢文の対立以外にロシア語では、単数形／複数形、完了体／不完了体、移動の動詞の定動詞／不定動詞、形容詞の短語尾／長語尾など多くのものが表している。ロシア語の諸々の単位には定性・不定性の対立が大きな

比重を占めている。

論理・意味的なカテゴリーに従うゆえに、60年文法の一肢文の分類、特に普遍人称文は、截然とした形態的な区別になじまない。それゆえ、形態中心の80年文法では、 N_1-V_x のことばに於ける実現形とされ、文型と見做されなかった。またロシア語では意味的には定性と不定性の区別は極めて自然であり、60年文法を克服して成立したはずの80年文法が世に出てすでに15年が経過したにもかかわらず、60年文法式の文型の考えが広範に支持されているのであろう。

4. 結語

1) 普遍人称文は、(無人称文、不定法文、名辞文を除く) 文が述定(時制、叙想性、人称)の少なくとも一つが現実との結び付きを失なって成立した文である。現実との直接的な結び付きを失うことが普遍性の獲得につながるのである。

2) 文の主語/主体と現実の動作主との照応関係の希薄さの点で、小論が対象とした一肢文は以下の関係にある。

(完全に希薄>より密接な関係の順で配置)

固定した表現>普遍人称文>不定人称文>定人称文≡人称文

3) 60年文法の一肢人称文の分類は、主体/主語と現実の動作主との照応の定性/不定性に対応している。

注

[] は注を、[] は文献を示す。括弧内の初めの数字は、注、文献の番号を、後の数字はその注、文献に挙げられた参考文献のページをさす。なお直接引用は「」に入れてある。

1. 「現代ロシア語における普遍人称文について」1995年度東京外国語大学外国語学部教育研究学内特別経費プロジェクト報告『言語研究』№6, 1996年3月

2. 小論の完結性のため、先の拙論の記述を一部反復することがある。

3. 例文の出典は明記していないが、我々が集めたものを中心に、60年文法や他の文献から採用した。例文の原則として1つとし訳は添えなかった。

4. 例えば [4, 85] [9, 10] [8, 144] [14, 329]。

5. [4, 89] [8, 148] [14, 331] においても大同小異である。

6. Е.С.Хмелевская [9, 15] によれば、不定人称文は最初に Н.Гречにより存在在を指摘され、Д.Н.Овсянко-Куликовскийによって неопределенно-личные глаголыという語を与えられた。しかし、彼にあっては不定人称文と普遍人称文とは区別されなかった。この区別は Шахматов А. А. Синтаксис русского языка. изд. 2-е. Л., 1941. стр. 65. によってなされたのである。

7. Jakobson R. [15, 48-49] の用語を小論に合うように変えてある。

条件法→仮定法、現在時制→非過去時制(→の右が改変後の用語)。

なお彼はあくまで動詞のカテゴリーを分析している。最終的には統語レベ

ルでの分析が必要なことは言うまでもない。

8. Валгинаは、論証はしていないものの、「文のタイポロジーは、定性－不定性という論理・意味的な指標に依存している。、、、（中略－中澤）定性－不定性は一肢動詞文では動作が動作主からどのくらい抽象化されるかにより明らかにされる。この論理・意味的な基礎に基づいて、伝統的な一肢動詞文の分類がなされた〔5,161〕』と同様なことを述べている。ただし、普遍人称文を動詞文としているが誤りである。

文 献

1. АН СССР Русская грамматика. Т. 2. М., 1980.
2. АН СССР Грамматика русского языка. Т. 2. М., 1960.
3. Белошапкова В. А. Современный русский язык. М., 1981.
4. Гвоздев А. Н. Современный русский литературный язык. М., 1968. Т. II.
5. Валгина Н. С. Синтаксис современного русского языка. М., 1991.
6. Пешковский А. М. Русский синтаксис в научном освещении, изд. 7-е. М., 1956.
7. Щерба Л. В. Грамматика русского языка. 稲垣敏夫訳 1959年『ロシヤ文法』白水社。
8. Клемина А. В. Простое предложение в современном русском языке. М., 1989.
9. Гневко В. Т., Кавченко З. Ф., Хмелевская Е. С. Современный русский язык. Минск, 1975.
10. Булахов М. Г. Козырев И. С. 監修 Русский язык. ч. 2, Минск., 1979.
11. Бабайцева В. В. Односоставные предложения и синтаксис. М., 1964.
12. Скобликова Е. С. Современный русский язык. М., 1979.
13. Белошапкова В. А. Общность семантического наполнения нулевых позиций субъекта и объекта в русском предложении. В кн.: Русский язык за рубежом. 1987. № 2.
14. Лекант П. А. Современный русский язык. М., 1996.
15. Jakobson, Roman. 1984. *Russian and Slavic Grammar Studies 1931-1981*, Berlin • New York • Amsterdam : Mouton.
16. Виноградов В. В. Русский язык. М., 1972.

1. Introduction

Le recensement des fréquences du vocabulaire fondamental du français a souvent attiré l'attention de linguistes, tandis que celles des différentes constructions phrastiques ont été relativement peu remarquées. La raison n'en est pas très claire, mais on se rend compte facilement que les types de constructions qui se rencontrent fréquemment, sont très peu nombreuses. Il est vrai que les constructions sont organisées par les prédicats, par les signifiés organisateurs prédictifs, et que, par conséquent, les signifiés prédictifs et leur fréquence importent pour avoir un panorama plus ou moins détaillé du fonctionnement du français. Mais il ne faut pas oublier que différents signifiés prédictifs, qui sont d'ailleurs nombreux, se réduisent à un nombre très peu élevé de types de constructions. Sur le plan non significatif, c'est la présence d'un nombre très restreint de phonèmes qui permet la production infinie de phrases. Sur le plan significatif, c'est la présence d'un nombre limité d'unités significatives, monèmes, (bien que ce soit un nombre relativement élevé), qui soutient la production en question. Sur le plan significatif, mais de constructions syntaxiques, ce qui importe, c'est indiscutablement la présence d'un nombre extrêmement limité de types de constructions qui reflètent un nombre limité de types de signifiés prédictifs organisateurs.

Pour jeter un coup d'œil à l'ensemble des constructions phrastiques du français, rappelons d'abord que la plupart des phrases comportent un élément verbal fini (les infinitifs ne sont pas considérés comme éléments verbaux mais plutôt nominaux du point de vue de la construction phrastique), mais il n'en est pas moins vrai que se rencontrent de temps en temps des séquences d'éléments qui n'ont aucun élément verbal mais que l'on ne peut pas ne pas considérer comme indépendantes de ce qui les précède et de ce qui les suit dans le discours, indépendantes du point de vue de l'organisation phrastique. On doit ainsi reconnaître un type de phrase non verbale (par exemple, *Mais que faire d'un Portugal simplement progressiste ?*).

Ensuite, les phrases qui restent comportent donc au moins un élément verbal fini. Les éléments verbaux finis, sont, en français au moins, presque toujours munis d'une fonction sujet. Mais il y a des phrases où les éléments verbaux fonctionnent comme centres syntagmatiques (donc comme centres de l'organisation formelle de phrase) mais ne sont pas munis d'une fonction sujet. Ces phrases on peut les appeler phrases à centre syntagmatique sans sujet (par exemple, *Voilà un beau sujet de dispute pour le prochain «sommet» européen*).

Les phrases qui restent sont toutes munies d'une fonction sujet, mais il y a deux sortes de sujets, l'un dont le paradigme est ouvert et l'autre fermé. Les phrases avec un sujet à paradigme fermé sont celles qu'on appelle traditionnellement impersonnelles: elles comportent un sujet impersonnel *il* (par exemple, *Il faudra au moins plusieurs semaines pour trouver un compromis*). Mais il y a aussi des phrases avec un autre type de sujet dont le paradigme est fermé. Il s'agit du *ce* que comportent les phrases du type dit clivé (*C'est à Freud qu'il faudrait recourir pour expliquer le comportement des Européens*).

Les phrases qui restent et qui comportent un sujet personnel sont très variées. Il y a des phrases avec un *être* non auxiliaire (par exemple, *La révolution khmère est jeune, trop jeune sans doute*), celles avec un verbe plus un attribut (par exemple, *L'influence française restait certes importante*), celles du type passif (par exemple, *Au début de ce mois, M.Arafat a été reçu à Moscou*), celles du type avec *se*, de type pronominal (par exemple, *Pékin s'interroge*), celles seulement avec un sujet (par exemple, *La révolution khmère est-elle mal partie?*), celles avec un complément d'objet indirect (*La «guerre civile» 1939-1945 a servi à lancer la C.E.C.A.*).

Les phrases qui restent sont celles dites directement transitives actives, non pronominales, non impersonnelles (par exemple, *Le prince Souvanna Phouma a joué un rôle fondamental*). Ces phrases sont, en effet, les plus importantes du point de vue de la fréquence. Elles ont 1241 occurrences sur le total de 3005. (Notre corpus est constitué des 119 éditoriaux du journal *Le Monde* des 1-2.9.1974 au 15.8.1975). Nous nous proposons dans cet article un sous-classement formel détaillé des phrases transitives actives qui organisent au moins un objet direct.

1.1. Critères de classement

Parmi les constituants de phrase, il faut tout d'abord éliminer tous les éléments qui sont en principe communs à toutes les phrases. Ce sont les éléments dits circonstanciels. Les éléments comme *à Paris* ou *en 1997* dans *Pierre travaille à Paris en 1997* ne caractérisent pas, en effet, un ensemble de phrases du point de vue de la construction. Ces éléments ne sont pas spécifiques d'une sous-classe de constructions. Ils assument ainsi des fonctions non spécifiques. Les éléments non spécifiques typiques sont les circonstanciels de lieu, de temps et de manière. Cela ne signifie pas que toutes les fonctions temporelles, locatives ou de manière, soient non spécifiques. *De 1900* de *Cela date de 1900* ou *à Paris* de *Pierre va à Paris* caractérisent bien des sous-classes. Ce sont les localisations spatio-temporelles simples qui doivent être considérées comme non spécifiques. L'important est donc de voir s'il y a une sélection de verbes en fonction de l'élément en question.

Précisons que le caractère obligatoire de l'élément ne prouve pas sa spécificité fonctionnelle. Dans *Pierre se comporte bien*, par exemple, une fonction de manière re-

présentée par *bien* est indispensable au prédicat *se comporter*. Cela ne signifie pas que cette fonction serve à sélectionner une sous-classe de verbe homogène (dont *se comporter*), mais simplement que le verbe *se comporter* (et peut-être aussi quelques autres) ont sémantiquement besoin d'un élément de manière. L'important est de voir que l'élément en question n'est combinable qu'avec une sous-classe de verbes. Il est clair que l'élément de manière comme *bien* est combinable avec toutes sortes de prédicats qui ont difficilement quelque chose de commun et d'homogène du point de vue de la construction. Précisons toutefois que la spécificité, ou non, des éléments dits circonstanciels est loin d'être éclaircie.

Passons plutôt aux éléments manifestement spécifiques. D'abord, la fonction sujet. Elle est en principe assumée par les éléments dits dépendants positionnels; les nominaux sont les représentants typiques. Un sujet détermine presque tous les prédicats et ainsi il est présent dans presque toutes les constructions, mais il est aussi vrai qu'il y a nettement des constructions qui n'acceptent pas de sujet, bien qu'elles ne soient pas très nombreuses. Le sujet est donc spécifique d'une très grande sous-classe de prédicats. La fonction objet est aussi une fonction typiquement spécifique; elle est assumée par les six dépendants positionnels énumérés ci-dessous. La fonction attributive qui est typiquement assumée par les adjectifs est aussi spécifique et caractérise une sous-classe de prédicats. Le locatif directionnel comme dans *Pierre va à Paris* est aussi spécifique. Et en général, concernant les syntagmes prépositionnels, quelle que soit la préposition utilisée, ceux qui comportent un élément directionnel devraient être considérés comme spécifiques. C'est souvent dans les paradigmes d'éléments directionnels qu'on trouve des éléments indiscutablement spécifiques comme ceux qui assument une fonction attributive, par exemple. En pratique, on peut dire que les éléments dont les paradigmes comprennent des éléments adjectivaux ou dépendants positionnels doivent être considérés comme spécifiques. Concernant les syntagmes prépositionnels, à part le facteur directionnel et leur paradigme, on ne trouve pas de critère plus ou moins opératoire. C'est, à notre avis, après avoir recensé un nombre plus ou moins élevé de constructions et après avoir analysé les compatibilités de différentes fonctions qu'on peut espérer entrevoir le fonctionnement de facteurs qui servent à mettre en relief d'autres fonctions spécifiques. Ce que nous nous proposons de faire dans le cadre de cet article peuvent, pensons-nous, éclaircir quelque chose de la spécificité fonctionnelle.

2. Les phrases transitives actives avec un objet direct (1241 occurrences)

Parmi les phrases transitives, il y en a qui ont 2, 3 et 4 arguments.

Les phrases à 2 arguments sont celles qui organisent, à part la fonction sujet, un objet direct. Cette sous-classe est nette en ce que les deux fonctions spécifiques caractéristiques sont celles qui sont assumées par les dépendants positionnels. Ainsi l'objet peut être: N(nominal), Vinf(infinitif), *de*-Vinf(préposition *de* plus infinitif), *que*-V(conjonction

de subordination *que* plus verbe fini), DD (discours direct), et DI (discours indirect). Les phrases organisant, à part le sujet, un objet direct et autre(s) fonction(s) spécifique(s) sont de 1241 occurrences, et celles organisant seulement un sujet et un objet direct sont de 1016.

2.1. N-V-N (553 occurrences)

Il est remarquable que plus de 18% de toutes les occurrences ont la construction de N-V-N, que les constructions qui ont comme partie N-V-N sont de 750 occurrences (25%) et que celles qui ont comme partie N-V-Objet sont de 1241 occurrences (41%). Bien sûr, dans toutes ces occurrences l'échange de positions du sujet et de l'objet ne donnent pas d'énoncés distincts acceptables, mais on voit facilement qu'un des fondements, de loin les plus importants, de l'organisation syntaxique est dans la pertinence positionnelle organisée autour du prédicat. Il faudrait accepter que formellement N1-V-N2 soit syntaxiquement distinct de N2-V-N1. Concernant, la construction N-V-N, il sera très intéressant de voir quels genres de traits sémantiques sont dominants dans les fonctions sujet et objet, mais non moins important est de voir que le cadre formel N-V-N n'est pas fondé sur ces traits sémantiques.

- (1) Le prince Souvanna Phouma a joué un rôle fondamental : [...].
- (2) Ses détachements policiers et militaires [...], et organisent avec l'«autre armée» des patrouilles mixtes.
- (3) Le conseil politique de coalition, qui définit en quelque sorte les bases de l'action du cabinet, a adopté un programme inspiré des thèses de la gauche, que le gouvernement a approuvé en juillet 1974.
- (4) La longue maladie, l'an dernier, du premier ministre a créé un vide à Vientiane, sans pour autant mettre en péril la coalition.
- (5) En avril, enfin, le roi a dissous l'ancienne Assemblée nationale, comme le réclamait le Pathet-Lao.
- (6) Depuis plusieurs jours, l'armée révolutionnaire lance de petites attaques au carrefour routier de Sala-Phoukoun, entre Vientiane et Louang-Prabang.
- (7) Mardi, une grenade a tué, à Vientiane, deux personnalités : M.Boun Om, frère du prince Boun Om, le grand féodal du Sud, et un des directeurs de la Banque nationale, membre d'une grande famille de droite et beau-père de M.Kamphai Abbay, ministre de la santé.
- (8) Déjà, le premier ministre multiplie ses consultations, et [...].
- (9) Conforté par les victoires de ses amis khmers et vietnamiens, le Pathet-Lao estime peut-être le moment venu d'avancer quelques pions.
- (10) Il a déjà marqué tant de points, qu'il est assuré de la victoire aux élections de 1976.
- (11) Les réfugiés regagnent librement leurs villages.
- (12) Les Vietnamiens ont, de leur côté, près de cinquante ans de pratique derrière eux.
- (13) Qu'avons-nous appris ?
- (14) Encore celle-ci connaît-elle les vicissitudes que l'on sait.
- (15) L'affaire de Suez et la guerre froide ont propulsé l'Euratom et le Marché commun.
- (16) La France en a la primeur parmi les pays occidentaux.
- (17) La chute de la livre, dit-on à Londres, a franchi le «seuil psychologique».
- (18) Les premières provoqueront à n'en pas douter des réactions violentes des syndicats et des travaillistes les plus européens.
- (19) Le fait que chacun des trois principaux partis soit lui-même divisé sur l'Europe com- plique encore la tâche du chef du gouvernement.
- (20) Le renforcement du pouvoir de M.Lopez Rega a un autre côté inquiétant.

2.2. N-V-Vinf (246 occurrences)

Dans les 246 occurrences, les verbes dits modaux sont très fréquents: pouvoir (134), vouloir (13), devoir (55).

(1) Une grenade et quelques escarmouches peuvent suffire à provoquer une crise politique.

(2) Il a, d'autre part, su s'attirer les bonnes grâces des dirigeants thaïlandais, qui, réalistes, ont compris, alors que la guérilla se renforce dans leur pays, qu'il valait mieux s'adapter à la nouvelle Indochine plutôt que vivre sous l'ombrelle américaine.

(3) La question, à l'évidence, doit être posée, surtout si l'on compare la situation au Vietnam du Sud et au Cambodge.

(4) M. Giscard d'Estaing a voulu aller plus loin.

(5) Onze ans plus tard, M. Hollstein pensa pouvoir provoquer une «mutation brusque» à partir de l'Europe agricole: donner au Parlement de Strasbourg les pouvoirs politiques de contrôle des «ressources propres» de la Communauté.

(6) Comme au «bon vieux temps» de la guerre, la Maison Blanche a cru pouvoir utiliser la base d'Utapao -- juridiquement thaïlandaise -- sans en référer au gouvernement de Bangkok.

(7) Elle entend profiter des déconvenues de M. Kissinger pour prendre une part très active à la négociation sur le Proche-Orient et s'y présenter comme le défenseur désintéressé de tout le monde arabe.

(8) Le Caire et Amman préfèrent donc miser à fond sur les tractations diplomatiques en cours, espérant que celles-ci aboutiront, sinon à un dégel, du moins à la convocation de la conférence de Genève.

(9) L'économie étant intimement liée à la politique -- comme le souligne, dans son interview au «Monde», l'émir Sabath, -- les responsables de la principauté souhaitent encore resserrer leurs liens avec la France dans le domaine de la politique étrangère.

(10) Mais la police française ne laisse-t-elle pas faire?

(11) Le premier ministre ne saurait pour autant se reposer sur ses lauriers.

(12) Il espère du même coup désarmer les critiques d'une opposition puissante qui lui a toujours reproché d'être l'«homme de Paris».

(13) M. Brejnev croyait atteindre son objectif en six mois, avant Noël 1973.

(14) Les garnisons locales, composées de soldats originaires des villes et des bourgades en colère, ne souhaitent pas intervenir.

(15) Les arguments en faveur d'un tel commerce ne doivent pas être sous-estimés.

(16) Les Neuf veulent seulement bavarder entre gens de bonne compagnie, verre et fourchette en main.

(17) L'intervention turque à Chypre, le samedi 20 juillet dernier, devait mettre le feu aux poudres à l'intérieur de la coalition.

(18) M. Tombalbaye doit faire face, en effet, à de graves difficultés.

(19) Mais cette invasion ne fait, en somme, que remplir un vide.

(20) On ne saurait toutefois s'étonner de la prise de position -- sur le fond -- du Vatican.

2.3. N-V-de-Vinf (80 occurrences)

Le paradigme de *de-Vinf* comprend un nominal positionnel. Le *de* ici ne fonctionne pas comme un indicateur de fonction mais comme quelque chose qui supporte le fonctionnement des infinitifs dans un paradigme nominal de fonction objet. Rappelons que les infinitifs n'ont pas toujours besoin de *de* pour fonctionner dans un paradigme nominal. (Cf. 2.4.)

(1) Depuis plus d'un an, le Pathet-Lao n'a cessé de marquer des points de façon pacifique.

(2) Ce dogmatisme anonyme -- car qui dirige, et quel est le rôle, par exemple, de M.Khieu Samphan? -- risque de faire perdre aux Khmers rouges l'important capital de sympathie qu'ils avaient amassé pendant cinq ans de lutte courageuse.

(3) On n'a pas fini de mesurer les répercussions de l'installation à Saigon et à Phnom-Penh d'équipes révolutionnaires.

(4) La France a tenté, sans apparement y réussir, de jouer un rôle dans cette nouvelle donnée, ne serait-ce que pour y conserver quelques cartes.

(5) La raison d'Etat commande d'étouffer les sentiments que l'idéologie inspire.

(6) M.Kissinger avait décidé d'appliquer à Cuba sa politique des «petits pas» qui, au Proche-Orient, a connu des fortunes diverses.

(7) Les Etats-Unis acceptent maintenant d'élargir le débat économique international aux matières premières et au développement.

(8) Pour le moment, M.Kissinger continue de parler en «maître», avec l'atout inattendu que lui confère la déroute de la monnaie avec laquelle l'empire américain comme ses différentes «provinces» paie son pétrole.

(9) La netteté du vote de jeudi ne permet plus de douter de la volonté des électeurs d'outre-Manche.

(10) Les accusés, insultant les juges qu'ils récusent, achèvent d'exaspérer une opinion publique déjà portée à exiger des mesures de rigueur extrême.

(11) [...], mais l'on n'en continue pas moins de fêter M.Giscard d'Estaing à Varsovie comme un champion de la politique de détente.

(12) Peut-être M.Brejnev, dans sa hâte d'en finir, a-t-il décidé de ne plus insister sur ce point.

(13) Dans ces conditions, la guerre civile ne risque-t-elle pas de se prolonger ?

(14) M.Callaghan refuse de venir à Kampala sous la contrainte.

(15) Les dirigeants africains n'apprécieraient guère d'avoir à se solidariser avec un chef d'Etat dont ils estiment qu'il leur porte tort.

(16) La présidente, elle, a proposé de «limiter» les hausses à 80% et de les étaler sur six mois.

(17) Au reste, en avançant des arguments d'ordre surtout économique, Ottawa ne cesse d'affirmer qu'un Québec autonome ne serait pas viable.

(18) En fait, l'exclusion ne risque pas plus d'être prononcée que ce ne fut le cas pour Pretoria.

(19) Même si l'acquiescement des ses partenaires n'est pas dénué de réserves mentales, il permet d'aller de l'avant.

(20) Cette année, plus que jamais, il risque même de souligner l'impuissance de l'Organisation face aux problèmes qu'elle a pour vocation de régler.

2.4. N-V-*que*-V (125 occurrences)

(1) Divers incidents ont cependant montré que l'équilibre politique était fragile.

(2) Bangkok a compris qu'il était de son intérêt de vivre en bons termes avec des capitales résolument anti-impérialistes.

(3) Il admet encore que les «aspirations légitimes des pays intéressés dans cette zone» puissent être tenues en considération.

(4) Les dirigeants koweïtiens ne cachent pas qu'ils sont très désireux de «conclure des affaires».

(5) Nul ne nie que tribalisme et politique imprégnent intimement chaque événement de la vie quotidienne à Djibouti.

(6) Il a seulement indiqué que la seconde moitié de septembre lui paraissait être la période la plus favorable.

(7) Il estime que, en temps de crise surtout, les partis politiques sont plus responsables, moins démagogiques lorsqu'ils participent au pouvoir.

(8) Les argues assuraient même que les électeurs bouderaient le scrutin.

(9) Tous ces exemples récents prouvent, si besoin en était, que la presse ne saurait être elle-même sans déplaire aux pouvoirs, quels qu'ils soient.

(10) L'accord prévoit qu'il sera fait appel aux Etats voisins pour le rapatriement des réfugiés.

- (11) Qui sait mieux que les Français qu'il n'y a plus de Pyrénées ?
- (12) Elle n'a pas supporté que l'opposition utilise cette affaire pour réclamer sa démission.
- (13) Moscou affirme que M.Giscard d'Estaing aurait alors promis de mettre un terme aux «provocations» de son ami, le ministre de l'intérieur.
- (14) Le nouveau texte prévoyait, en effet, que serait préalablement mise sur pied une constitution qui devrait être approuvée île par île.
- (15) Le Parti de l'indépendance, devenu aux élections de 1973 l'opposition officielle, demande maintenant que le peuple tranche par référendum.
- (16) M.Poniatowski a bien indiqué que «le Québec sera ce qu'en feront les Québécois».
- (17) Il exige que les Nations unies annulent la résolution 237 qui fit d'Israël un Etat membre.
- (18) Le ministre de l'économie et des finances précisa même que le prêt saoudien serait de 6 à 8 milliards.
- (19) Sa levée en 1975 prouve que les pays qui y avaient souscrit n'ont plus peur.
- (20) Pourtant chacun sent que le grand règlement de comptes approche.

2.5. N-V-DD (8 occurrences)

Dans (1), (2) et (5), ci-dessus, le reste de la phrase (partie non soulignée) peut être considéré comme en discours direct.

(1) Un progrès dans les relations bilatérales des deux pays ne serait plus désormais subordonné, a-t-il déclaré, à une levée totale de l'embargo économique américain -- qui pose des problèmes de règlement financier très complexes, -- mais à un simple assouplissement de l'attitude de Washington en ce domaine, que concrétiseraient des envois de vivres par exemple.

(2) Le contrôle aux frontières sera renforcé, a annoncé le ministre de l'intérieur.

(3) Mais, alors que la spéculation fait rage à nouveau contre la devise anglaise, le premier ministre, qui a déjà connu de pareilles situations, a déclaré lundi: «Nous rejetons les solutions de panique et les avis de ceux qui voudraient nous voir prendre des décisions mélodramatiques propres à faire de bonnes manchettes dans les journaux mais inefficaces.»

(4) En mars, lors de la visite de M. Kim Dong Jo, ministre des affaires étrangères, M.Chirac déclarait au sujet de la paix en Asie: «La position de la Corée du Sud n'est pas éloignée de la nôtre.»

(5) Cette semonce s'accompagne d'un appel à la vigilance: ne faites pas le jeu de l'ennemi qui cherche à nous diviser, dit en substance Algérie-Presse-Service.

(6) «Nous ne sommes ni les banquiers ni les maîtres d'école de l'Europe», disait récemment M.Hans Apel, ministre des finances du gouvernement de Bonn.

(7) Il y a quelques jours, M.Kissinger, agacé par la «vague de critiques déferlant sur la C.I.A.», observait: «Des critiques bien plus dures nous seraient adressées si l'Italie devenait communiste. Tout le monde dirait que les Etats-Unis n'ont pas fait le nécessaire pour la sauver.»

(8) Reçu à l'Elysée pendant près d'une heure, le lundi 14 octobre, par M.Giscard d'Estaing, le général Syad Barre, président de la République de Somalie, a déclaré: «Nous avons toujours officiellement soutenu que l'indépendance devait être donnée au peuple de la Somalie française, et j'en ai parlé avec le président Giscard d'Estaing. Je ne l'ai jamais fait d'une façon polémique, mais d'une manière amicale.»

2.6. N-V-DI (5 occurrences)

(1) On ne sait quand les travaux seront suffisamment avancés pour que la conférence aborde sa dernière étape.

(2) Dans ces conditions, on voit mal comment des régimes particuliers pourraient être refusés à d'éventuels nouveaux membres.

(3) On voit mal, en particulier, comment des élections pourront être organisées en octobre.

(4) Nul ne voit comment le gouvernement pourrait sans lui espérer parvenir à l'objectif qu'il s'est fixé: mettre fin au déficit à la fin de 1975 -- si tant est que cet objectif puisse être atteint.

(5) Cette abstention massive, qui constitue peut-être un record historique, indique en tout cas à quel point la confiance des Américains dans leurs institutions et leur personnel politique est entamée, et pas seulement par les scandales récents.

3. Les phrases transitives actives à 3 arguments (210 occurrences)

Il s'agit des phrases avec un sujet, un objet et une autre fonction spécifique.

3.1. N-V-N-Vinf (5 occurrences)

(1) [...]: ayant obtenu la démission du président du Sénat, M. Lopez Rega verrait éventuellement son propre gendre, M. Raul Lastiri, président de la Chambre des députés, succéder le plus régulièrement du monde à l'actuel chef de l'Etat si celui-ci venait à démissionner

(2) Ayant, au fil des crises qui l'ont secouée depuis un peu plus d'un an, opté pour des solutions économiques de plus en plus socialistes, la jeune démocratie a vu s'accroître la défiance des capitalistes nationaux et des investisseurs étrangers envers les changements de structure.

(3) [...], et, si l'on peut penser que le président ougandais, ancien sous-officier de l'armée britannique, cherche surtout à prendre sa revanche sur ceux qui lui donnaient naguère des ordres, on voit mal Londres risquer pour un homme de compromettre ses rapports avec ses anciennes colonies.

(4) La lecture simpliste des événements, proposée à Moscou par la «Litera-tournaïa Gazeta», voit «l'hystérie anticommuniste de Mario Soares servir de bouillon de culture à la prolifération du bacille fasciste».

(5) La gauche unie, payant le prix de ses divisions, a vu une partie des ses électeurs l'abandonner et même, vraisemblablement, «voter utile» dans certaines circonscriptions rurales en soutenant le candidat caramanliste.

3.2. N-V-Vinf-N (5 occurrences)

3.1., ci-dessus, et 3.2. peuvent être considérés comme des variantes, la différence étant seulement celle de l'ordre. Dans (3), ci-dessous, si *des informations* n'est que l'objet de *diffuser*, il faut dire que le prédicat *laisaient* n'organise que deux arguments. Mais on ne peut pas tout à fait nier le fait que *laisaient diffuser* fonctionne comme une seule unité de sorte qu'on peut et doit reconnaître aussi un lien entre *laisaient* et *des informations*. Cela est encore plus vrai pour les exemples de *faire* (cf. 3.4., 4.3., 4.4. et 4.5.).

(1) [...]: intégrés au système, maniant les sommes fabuleuses des cotisations obligatoires, et gérant les œuvres sociales des entreprises, ils font bien souvent passer leurs intérêts personnels avant ceux de leurs mandants.

(2) [...]: il [...], et fait jouer la solidarité financière des Neuf.

(3) Depuis des semaines, ils [...] ou laisaient diffuser des informations propres à introduire un doute sur la véritable personnalité d'un homme qui, en raison de sa résistance à l'envahisseur italien en 1935, était tenu pour un héros de l'Afrique.

(4) Les perspectives de réouverture du canal de Suez laissent espérer des lendemains prospères pour le port de Djibouti, qui reste une des clés de la mer Rouge depuis le départ des Britanniques d'Aden.

(5) D'autre part, les sérieuses difficultés qu'éprouve la junte d'Addis-Abeba à gérer l'héritage qu'elle a confisqué, le 12 septembre dernier, à l'empereur Haïlé Selassié font peser une menace d'insécurité supplémentaire aux

frontière du territoire français des Afars et des Issas.

3.3. N-V-Vinf-que-V (6 occurrences)

(1) Au lendemain de la grève générale lancée par la Confédération générale du travail (C.G.T.), le puissant syndicat unique d'obédience péroniste, Mme Isabel Peron a fait savoir que les augmentations de salaires prévues dans les conventions collectives -- certaines atteignaient 135% en une seule fois avec effet rétroactif -- étaient inacceptables.

(2) L'un des principaux partis d'opposition -- le Front national uni -- a d'ores et déjà fait savoir qu'il demeurait «dans l'expectative» après la décision du président Abdallah.

(3) Il le fait proclamer officiellement au moment où la presse d'outre-Rhin s'inquiète de la «dégradation du pouvoir» du président de la République française.

(4) Sa force de caractère, sa détermination, laissent prévoir qu'après une phase de relative déshérence le pouvoir se trouve placé en des mains fermes.

(5) Pour l'instant, M.Schmidt, qui a exprimé son «respect» pour la politique anti-inflationniste du cabinet Rumor, laisse entendre qu'il n'en est pas question, car les dirigeants britanniques ne manquent pas de la détermination nécessaire pour combattre le mal.

(6) La France fit savoir, par la voix du général de Gaulle cette fois, qu'il n'était pas question de se servir des institutions du traité de Rome pour changer la nature de l'entreprise.

3.4. N-V-Vinf-de-N (1 occurrence)

(1) Pour Bagdad, le fait que les pays membres de la Communauté européenne, à l'exception de la France, aient adhéré à cette Agence laisse mal augurer du dialogue euro-arabe.

3.5. N-V-N-A (9 occurrences)

(1) La radicalisation du nationalisme basque depuis le début des années 60 rendrait-elle caduque l'autonomie accordée, après bien des réticences, aux quatre provinces euzkadiennes par les républicains de 1936?

(2) Leur activisme, redouté à Madrid, ne laisse pas non plus, loin s'en faut, Paris indifférent.

(3) Les modérés du parti, et notamment le chancelier de l'Echiquier, M.Healey, jugent l'augmentation rapide des salaires responsable en grande partie de la hausse vertigineuse des prix.

(4) Cette nouvelle rigidité imposée aux pays acheteurs rendrait encore plus difficile le rétablissement d'une situation où l'inflation des coûts entretient et accentue la récession.

(5) [...], mais il la voulait réelle:[...]

(6) Pragmatique, le général Spinola a apparemment jugé ce compromis satisfaisant, en dernière analyse.

(7) [...], et l'on garde présentes à l'esprit les frictions des dernières années.

(8) Mais la récession actuelle rend impérative une collaboration dont les deux pays ont jugé important d'affirmer le principe en s'engageant dans une politique vigoureuse d'entente et d'entraide pour trouver des remèdes à la crise.

(9) Après des années de rapports distants et même parfois moroses -- les visites ministérielles étaient exceptionnelles, et la coopération stagnait, -- la France et l'Algérie mettent actuellement les bouchées doubles, comme si elles voulaient rattraper le temps perdu.

3.6. N-V-de-Vinf-de-N (1 occurrence)

Dans (1), ci-dessous, il y a formellement deux syntagmes en *de* qui sont compatibles. Mais les fonctions des deux syntagmes sont bien distinctes, le paradigme de *de-Vinf* comprenant des nominaux.

(1) Il a [...], cru de bonne guerre de polémiquer outrageusement contre les démocrates, alors qu'on attendait de lui, dans la situation actuelle, un programme d'action énergique et la détermination d'un chef tenant fermement la barre d'Etat.

3.7. N-V-N(A)-Vinf (1 occurrence)

Il est difficile de considérer comme adjectif *beau* de *avoir beau*-Vinf, surtout parce que A (=adjectif) indique la fonction attributive et aussi que les adjectifs ne peuvent pas être reconnus comme susceptibles d'assumer la fonction objet. Ce classement est donc provisoire. *Beau* devrait être considéré comme un nominal, ou on devrait reconnaître une synthématisation de *avoir beau*-Vinf.

(1) On a beau lui prêter parfois l'intention de revenir à la vie active, de se «rendre utile» (un message de courtoisie du président Mao lui aurait donné l'idée qu'il pourrait encore faire un excellent ambassadeur à Pékin...), sa fibre politique est usée, et les épreuves nerveuses qu'il a traversées ont passablement entamé l'énergie de cet homme de soixante-deux ans.

3.8. N-V-N-à-N (76 occurrences)

Remarquons que parmi les constructions à 3 arguments, c'est de loin la construction N-V-N-à-N qui est la plus fréquente. La fonction à-N sera dans beaucoup de cas qualifiée de datif ou de locatif directionnel. Ici aussi il sera intéressant de voir quels traits sémantiques sont dominants dans les fonctions sujet, objet et à-N.

(1) En février, la C.E.E. dépêcha une mission à Moscou.

(2) La crise de l'énergie, contrairement à ce qu'on aurait pu penser, n'a pas donné de coup de fouet à l'Europe.

(3) Paris, après tout, accorde-t-il plus de prix à l'indépendance qu'à cette détente que les Chinois, pour leur part, jugent trompeuse?

(4) Enfin, le chef du gouvernement soviétique rend visite à des hommes d'Etat dont les positions sont très éloignées de celles du Kremlin.

(5) On la compare volontiers et superficiellement au Congrès de Vienne.

(6) [...]; les commerçants de la capitale libanaise lui ont fait écho en observant, mercredi et jeudi, une grève générale en signe de «protestation contre l'insécurité et l'instabilité».

(7) L'émirat a consacré des crédits de l'ordre de 1500 millions de dollars à l'équipement de son armée jusqu'en 1980.

(8) Il reprochait à différents ministres leurs tergiversations en face de problèmes économiques urgents.

(9) Celles-ci -- et le continent noir en général -- saurent gré au gouvernement britannique de sa modération.

(10) Au dernier «sommet» de l'OTAN, la France n'a nullement contesté à l'Espagne le rôle qu'a voulu -- vainement -- lui reconnaître le président Ford dans la stratégie alliée.

(11) Le M.F.A. donne ses préférences aux formations «réellement dévouées à la construction du socialisme».

(12) On la compare volontiers et superficiellement au Congrès de Vienne.

(13) Il n'a consacré qu'un minimum de temps à la discussion toujours recommencée de la construction européenne.

(14) Après une période de confusion, et incapables de surmonter leurs divergences, ils faisaient appel à un professeur nommé Salazar.

(15) Chacun, pour commencer, a «tiré la couverture» à lui en choisissant dans l'acte final les dispositions qui lui convenaient le mieux.

(16) De leur côté, les voisins de la Rhodésie -- Botswana, Zambie, Mozambique et Tanzanie -- invitent les nationalistes à la prudence.

(17) En même temps, la presse soviétique [...] et ne ménage ses critiques ni au parti de M.Souares ni au major Melo Antunes.

(18) Le pardon d'hier sauve la mise à M.Richard Nixon; il ne lui sauve pas la face.

(19) Là, pour réduire les mouvements gauchistes ou contenir la puissance syndicale, des dirigeants font appel à l'action civique.

(20) Le sénateur Kennedy, quant à lui, a demandé par écrit des explications à M. Henry Kissinger.

3.9. N-V-N-à-Vinf (16 occurrences)

(1) Hantée par les ambitions soviétiques et par l'image d'un monde «bipolaire», où la vie des nations serait chaque année davantage soumise au libé arbitre de l'Union soviétique ou des Etats-Unis, la Chine invite de façon plus pressante que jamais les pays d'Europe occidentale à accélérer leur unification économique, politique et -- l'écho est plus récent -- militaire.

(2) Mais le refus persistant du gouvernement de Jérusalem d'envisager la restitution du Golan, même dans le cadre d'un accord de paix, avait incité le président Assad à prôner la reprise des hostilités.

(3) Diverses raisons ont sans doute conduit le gouvernement de Damas à s'accorder un répit de six mois.

(4) La France a tout intérêt à accueillir des fonds qui contribueront à équilibrer sa balance des paiements.

(5) D'autre part, pour «calmer» la faim des pays pauvres, si l'on peut dire, il [...], et exhorte les autres nations industrialisées à faire de même.

(6) Pays asiatique, elle [...] et les invite seulement, après s'être dégagés de la tutelle d'une «superpuissance», à ne pas laisser la voie ouverte aux ambitions d'une autre, autrement dit à ne pas laisser l'U.R.S.S. profiter du vide laissé par les Etats-Unis.

(7) Elle a poussé les sénateurs à envisager d'élire -- contre les vœux de M. José Lopez Rega, l'homme fort du pays -- un président de leur Assemblée, lequel succéderait le cas échéant à Mme Peron.

(8) Mais, la péninsule étant divisée, la France a-t-elle intérêt à négliger une partie au profit de l'autre ?

(9) Une menace modérée, suivie d'un geste ambigu de conciliation, expose surtout son auteur à n'être pas pris au sérieux.

(10) La chute, après une période faste, des deux tiers des revenus du cuivre, lequel fournit les trois quarts des recettes de l'Etat en devises, la préoccupante stagnation de l'agriculture, la multiplication par quatre des dépenses d'achat de produits pétroliers, amènent Kinshasa à rechercher des sources de financement extérieures, notamment européennes.

(11) Mais dans le monde d'aujourd'hui la désorganisation progressive du système des paiements (qu'atteste la nouvelle chute de la livre sterling et du dollar), la réduction des échanges, qui atteint particulièrement l'Allemagne fédérale, dont l'économie est la plus sévèrement touchée par la récession, l'aggravation du chômage qui résulte, dans tous les pays industriels, de la baisse brutale de la production, conduisent chaque pays à se crisper un peu plus sur ses positions et sur ses intérêts immédiats.

(12) Mais lorsque M. Giscard d'Estaing se rendra au Canada, à la fin de 1976 ou au début de 1977, premier président français à faire le voyage depuis le général de Gaulle, il aura quelque peine à expliquer toutes ces nuances.

(13) Les deux parties ont donc intérêt à conclure un accord et se préparent à une longue et complexe négociation par étapes.

(14) La France, qui doit faire face à la hausse du coût de ses importations en matière énergétique, a donc intérêt à s'assurer une part de ce marché, faute de quoi sa balance commerciale avec l'Algérie se dégraderait rapidement.

(15) Sur le fond, la «morale naturelle» dont elle se réclame -- quels que soient la civilisation et l'état des mœurs -- la conduit à limiter abstraitement la mission de la femme sur la Terre.

(16) Disposant d'une population importante, de ressources considérables en dehors même du pétrole, dotés de gouvernements forts, ces trois pays n'ont guère de peine à utiliser les fonds importants que leur vaut depuis un an l'exploitation de l'or noir.

3.10. N-V-de-Vinf-à-N (16 occurrences)

(1) Le 25 avril, une manœuvre politique de grande envergure permettait au ministre de ne plus voir son avenir dépendre de la seule faveur de Mme Peron: ayant obtenu la démission du président du Senat, M.Lopez Rega verrait éventuellement son propre gendre, M.Raul Lastiri, président de la Chambre des députés, succéder le plus régulièrement du monde à l'actuel chef de l'état si celui-ci venait à démissionner.

(2) Le gouvernement finlandais de coalition de centre-gauche, présidé par M. Kalevi Sorsa, secrétaire général du parti social-démocrate, a demandé, jeudi 29 mai, au président Kekkonen de dissoudre le Parlement et de décréter des élections législatives anticipées.

(3) [...]: il a demandé à l'actuel chef de l'Etat d'être, dans trois ans, son candidat à la présidence de la République.

(4) Le professeur britannique, accusé d'avoir écrit un livre dans lequel il présentait le général Amin comme un «tyranneau de village», ne doit, pour l'instant, d'avoir échappé à la peine capitale qu'à l'habileté de la diplomatie britannique, et, plus encore sans doute, aux pressants appels à la clémence adressés au président ougandais par plusieurs de ses collègues africains.

(5) [...]; ils lui reprochent d'avoir démobilisé son peuple par la réouverture à grand spectacle du canal de Suez et de faire, pour un règlement, une aveugle confiance à l'Amérique.

(6) Aujourd'hui, M.Schmidt promet à l'Italie de soutenir ses efforts pour obtenir une consolidation de sa dette auprès de la C.E.E., dette qui expire le 19 septembre prochain.

(7) L'aide qui lui sera donnée lui permettra-t-elle de renverser la situation linguistique existante ?

(8) [...]; cela lui permettait, par ailleurs, de témoigner des égards particuliers au visiteur sans offenser le Canada.

(9) Le changement de direction survenu à la tête de l'Etat, le départ de M.Foccart, les déclarations de M.Abelin sur la réorientation de la coopération, lui permettent de le faire sans perdre la face.

(10) L'intervention de la Communauté permettra en particulier aux ménagères britanniques et italiennes d'acheter leur sucre au prix européen, trois fois et demie inférieur au prix mondial.

(11) Le président Costa Gomes demandera à M.Giscard d'Estaing d'être, auprès de ses partenaires européens et des Américains, l'avocat de la conciliation, seule susceptible d'éviter une radicalisation du processus politique portugais.

(12) Le ministre a en tout cas demandé à Madrid de ne plus introduire ses agents en territoire français, et pris, d'autre part, des mesures afin que les révolutionnaires basques ne prennent plus Hendaye pour une ligne arrière ou une base logistique.

(13) La persistance des querelles tribales et régionales et des controverses byzantines entre partis politiques, la lente détérioration d'une économie particulièrement fragile, n'avaient pas permis au directoire militaire de redresser la situation.

(14) La préparation du vol conjoint a permis aux Américains et aux Soviétiques de découvrir les principales caractéristiques des cabines du concurrent, devenu partenaire, et, la confiance s'établissant progressivement, des techniciens et des astronautes américains ont pu se rendre à Baïkonour, tandis que leurs homologues soviétiques étaient invités à Cap-Kennedy

(15) Annoncée au cœur de l'Afrique noire et à quelques semaines de la session de l'ONU, elle permettra à Paris de désamorcer les critiques que lui valent traditionnellement dans les enceintes internationales ses bonnes relations avec le gouvernement de M.Vorster.

(16) Paradoxalement, la révolte des Blancs a permis aux autorités de Lisbonne de constater que le FRELIMO, dont le chef avait lancé à ses hommes un appel au calme, était un partenaire «réaliste» avec lequel il était possible de «coopérer étroitement».

3.11. N-V-que-V-à-N (2 occurrences)

(1) Quant à l'U.R.S.S., l'expérience lui a montré que les positions des puissances dans le monde arabe n'étaient jamais acquises une fois pour toutes, qu'il fallait prendre son

parti des vicissitudes qui affectent les Etats de cette région, et donc tenir en permanence plusieurs fers au feu.

(2) On leur concédera que si les Egyptiens voulaient brandir autre chose que des foudres de carton ils n'auraient pas -- face à leur opinion publique et au monde extérieur -- la partie très facile aujourd'hui.

3.12. N-V-DD-à-N (2 occurrences)

(1) «L'Europe doit être capable de se défendre par ses propres moyens», a confié, voici quelques semaines, M.Mao Tse-toung à M.Tindemans, le premier ministre de Belgique.

(2) «Il y a des ventes d'armes, et nous avons une capacité à en vendre, mais je ne pense pas que ce soit un secteur dans lequel nous devons accentuer notre effort», avait répondu dans ces colonnes, le 3 mai dernier, le candidat Giscard d'Estaing à une question que nous lui posions.

3.13. N-V-N-de-N (27 occurrences)

Comme on voit dans 3.13. et 3.14., le troisième argument le plus fréquent, après celui en à, est celui avec de. Les prépositions de et à sont, on le sait, les plus importantes et les plus "incolores". Il est ainsi normal qu'elles sont les plus fréquentes pour indiquer les deux troisièmes arguments les plus importants. Dans l'ensemble des constructions il est évident que l'absence de l'indication relationnelle (= dépendants positionnels) et les indicateurs relationnels à et de sont les plus importants; ces trois facteurs caractérisent dans la plupart des cas les cadres formels des constructions phrastiques françaises.

(1) Washington n'a aucunement tenu compte de la nouvelle situation créée en Asie du Sud-Est par la victoire des révolutionnaires indochinois.

(2) Il a, sur le plan intérieur, tiré dès 1963 les conséquences de ses choix en interdisant le parti communiste tunisien.

(3) Le Front pour l'indépendance du Sahara et du Rio-de-Oro(F.Polisario), dont les dirigeants passent pour avoir de fortes sympathies à Alger, a, en revanche, fait la preuve d'une certaine représentativité.

(4) On aurait attendu d'un homme qui se veut champion de la cause libérale dans le monde une attitude différente: la liberté et la démocratie ne se divi- sent pas.

(5) Le président Sadate a sans doute fait preuve d'un excès d'optimisme quand il a déclaré que la décision de M.Rabin signifiait que «le processus de la paix va être relancé».

(6) Fort heureusement, l'extrême droite néofasciste, très largement discréditée, n'a pas tiré profit de ce mécontentement.

(7) Peut-être aussi a-t-il tiré les conclusions de l'évolution constatée tout au long des débats.

(8) Les pressions exercées ces derniers jours par la Syrie et plusieurs pays arabes en faveur d'une solution rapide en portent témoignage.

(9) La Corée du Sud a plus que jamais besoin de capitaux étrangers pour financer son développement.

(10) L'Elysée a souvent fait état de sa volonté d'avoir une politique équilibrée à l'égard du Sud comme du Nord.

3.14. N-V-N-de-Vinf (18 occurrences)

(1) Mais ils avaient pris soin, à la veille des élections, d'imposer aux partis une «plateforme d'entente» qui fixe de manière autoritaire les rapports entre les «deux pouvoirs», le civil et le militaire, dans les trois ans qui viennent.

(2) M.Giscard d'Estaing n'a pas tort de parler de «fraternité» à propos des relations entre Paris et Varsovie.

(3) M.Fanfani accuse aujourd'hui les journalistes italiens d'avoir permis la victoire des communistes en dénonçant la corruption du gouvernement démocrate-chrétien.

(4) M.Agostinho Neto, chef du M.P.L.A., a une fois encore accusé le Zaïre, deux jours avant la signature de l'accord, de préparer l'invasion de l'Angola.

(5) Le premier ministre a accusé les oppositions de «céder à la panique», mais elle a elle-même cédé à la peur.

(6) Sans doute le chef du gouvernement travailliste a-t-il raison de ne pas céder à l'affrontement, tout au moins publiquement, mais son inaction est pourtant à l'origine de la nouvelle crise.

(7) Des congressistes péronistes, qui retrouvent soudainement leur voix et leur courage, accusent aujourd'hui l'ancien secrétaire privé de Mme Isabel Peron d'avoir lui-même organisé et financé les commandos de lutte anticommuniste, les trois A, responsables depuis six mois de plusieurs centaines de crimes impunis.

(8) Il aura besoin de la ménager s'il veut aller jusqu'au bout de l'ambitieuse autobiographie qu'il a entrepris de rédiger et qui n'en est qu'à l'année 1945...

(9) Mais, même s'ils apparaissent comme les défenseurs d'un souverain quelque peu dilettante et féodal, les dirigeants chinois ont beau jeu de dénoncer le nouveau statut du Sikkim comme « un acte flagrant d'expansion colonialiste ».

(10) Dès lors, la Turquie a beau jeu de rappeler que son régime actuel est plus démocratique que celui de son rival de l'Ouest.

3.15. N-V-N-*comme*-N (2 occurrences)

(1) Mais celle-ci mettait comme condition à la livraison la conclusion d'un contrat lui ouvrant pour cinq ans le marché anglais.

(2) Le ministre des affaires étrangères de M.Giscard d'Estaing a donc présenté la construction européenne comme sa «grande tâche», et les réunions régulières des chefs de gouvernement comme le moteur de toute politique européenne.

3.16. N-V-N-*auprès de*-N (1 occurrence)

(1) Mise à part la Yougoslavie, qui, en ce domaine comme en d'autres, s'est démarquée depuis longtemps de la diplomatie soviétique (le gouvernement de Belgrade a même conclu, voici plusieurs années, un accord commercial avec la C.E.E.), aucun Etat socialiste n'a installé d'ambassade auprès de la Communauté, même si certains d'entre eux, telles la Hongrie et surtout la Roumanie, n'hésitent pas entretenir avec elle des contacts techniques plus ou moins poussés.

3.17. N-V-N-*pour*-N (1 occurrence)

(1) Enfin, l'affaiblissement de la puissance américaine offre, lui aussi, un contexte nouveau pour les conversations franco-chinoises.

3.18. N-V-N-*avec*-N (2 occurrences)

(1) [...] le gouvernement de Belgrade a même conclu, voici plusieurs années, un accord commercial avec la C.E.E. [...]

(2) Neuf pays de l'Amérique latine et caraïbe entretiennent déjà des relations avec La Havane.

3.19. N-V-N-*contre*-N (2 occurrences)

(1) Contre eux, le procureur a réclamé cent vingt-sept années de prison.

(2) Pratiquement négligée par la première administration Nixon (1969-1973), l'Amérique latine, sans trouver pour autant la stabilité interne, a fait front à plusieurs reprises contre les prétentions ou les initiatives de Washington.

3.20. N-V-N-*dans*-N (8 occurrences)

(1) Dans le corbillon, il a mis un cadeau d'anniversaire: le retour de la France dans le «serpent» monétaire.

(2) L'exaspération des antagonismes socio-confessionnels à Beyrouth place, au contraire, les chrétiens libanais, et bien qu'ils s'en défendent, dans une position de plus en plus comparable à celle des «faucons» de Jérusalem.

(3) Elle a [...] et maintenu un pays, officiellement catholique à 80%, dans un climat feutré et hostile à toute réforme.

(4) Mais cependant le recours qu'il offre à M.Caramanlis retient les Grecs dans le camp occidental, pendant que les Etats-Unis, plus intéressés par la plus grande importance que présente la Turquie pour la défense en Méditerranée orientale, dispensent leurs faveurs à Ankara.

(5) Alors que le président américain se débat encore dans les remous provoqués par le pardon accordé à M.Nixon, les révélations du directeur de la C.I.A., M.William Colby, selon lesquelles le gouvernement des U.S.A. a autorisé l'agence américaine de renseignements à dépenser au moins 8 millions de dollars pour tenter de saboter l'entreprise de Salvador Allende, puis le gouvernement qu'il présida, mettent l'administration Ford dans une position difficile, aussi bien à l'intérieur qu'à l'extérieur.

(6) Par contrecoup, il a gravé dans l'esprit de ses concitoyens l'image de ce qu'il est: un politicien honnête, mais sans élan ni vision d'avenir; un pré-sident par accident plus que par vocation.

(7) Enfin, M.Brejnev a investi trop de capital personnel dans la détente pour y renoncer ou même pour en ralentir le rythme.

(8) De leur côté, les Québécois avaient introduit un élément de dramatisation dans leurs négociations avec la France en insistant beaucoup sur l'éventuelle création d'une usine d'enrichissement d'uranium, dans la «belle province», avec la participation française.

3.21. N-V-N-en-N (4 occurrences)

(1) Mais une telle stratégie laisse en l'état les défis auxquels le gouvernement de l'Union doit faire face.

(2) Les discussions ont aussi mis en relief la volonté de Séoul de trouver de nouveaux partenaires économiques.

(3) [...]: il [...], met en compétition les intérêts opposés de la France et de l'Italie, et fait jouer la solidarité financière des Neuf.

(4) Son entreprise [...], et ne transformera pas sa victoire en une revanche des conservateurs.

3.22. N-V-N-sur-N (6 occurrences)

(1) Mais la France, qui avait fait passer le frisson de l'Histoire, le 9 mai 1950, au salon de l'Horloge, par la voix de Robert Schuman, jeta une douche glacée sur l'Europe, le 31 août 1954, en rejetant le traité sur la Communauté de défense.

(2) Ses excentricités n'en attirent pas moins l'attention sur la nature du pouvoir politique en Afrique noire.

(3) Mais le discours du représentant d'Ankara a attiré l'attention sur un fait que les organisateurs de la conférence n'avaient sans doute pas prévu lorsqu'ils se lancèrent dans cette entreprise il y a deux ans: le conflit le plus sérieux qui couve en Europe aujourd'hui n'oppose pas l'Est à l'Ouest; c'est un conflit entre deux membres de l'alliance atlantique, et personne ne semble en mesure de l'atténuer dans un avenir prévisible.

(4) [...] -- les Etats-Unis imposent un embargo effectif sur les ventes d'armes à l'Afrique du Sud depuis 1963, -- mais elle amorce son virage au moment où le régime de Pretoria lui-même, en perte de vitesse et de «crédibilité», cherche à ouvrir un dialogue avec les Etats noirs modérés.

(5) Les révélations de la presse sur la fortune qu'il a accumulée au cours de son ascension politique ont jeté un doute sur son intégrité, et son refus de se prêter à une véritable enquête a fini d'indisposer l'opinion.

(6) [...], mais, cependant, on ne fonde pas seulement une coopération sur l'histoire et le sentiment.

3.23. N-V-N-devant-N (1 occurrence)

(1) La guérilla sécessionniste de l'Erythrée, qui, dans l'indifférence générale, continue de faire de nombreuses victimes, place l'Afrique devant un choix impossible entre le principe du soutien aux luttes de libération et la crainte viscérale de la «balkanisation».

3.24. N-V-N-*que*-V (2 occurrences)

Remarquons qu'ici *que*-V n'est pas un dépendant positionnel comme c'est le cas, par exemple, de 2.4. et de 3.11., le paradigme ne comprenant pas de nominaux dans les exemples ci-dessous. Le paradigme de *que*-V de (1) comprend plutôt à-N et celui de (2), *de*-N.

(1) Les pays arabes eux-mêmes ont encore tout intérêt que le Liban continue -- envers et contre tous -- d'être ce qu'il est: un refuge politique pour tout le Proche-Orient, une fenêtre ouverte sur l'Occident, et un port de commerce.

(2) Le ministre d'Etat français a bien pris soin chaque fois qu'il en eut l'occasion, lors de l'étape québécoise de son voyage, de lever son verre en premier lieu au Canada, en second lieu, mais «particulièrement», au Québec.

3.25. N-V-*de*-Vinf-*pour*-N (3 occurrences)

(1) Selon eux, l'alliance occidentale a pour objectif de défendre ses membres contre le communisme.

(2) Dans un monde idéal, la montée des périls économiques et financiers aurait pour effet d'amener les nations à se serrer les coudes.

(3) Ces conflits internes aux Etats-Unis auront au moins pour résultat d'éclairer d'un jour plus vrai la mort tragique d'Allende.

3.26. N-V-*que*-V-*de*-N (1 occurrence)

(1) Ayant décidé que les «régions» n'étaient plus affaire de territoire mais d'idéologie, elle en a conclu qu'il y avait une «région arabe», que l'Europe englobait les Etats-Unis et le Canada -- il s'agit sans doute, enfin, des fameux Etats-Unis d'Europe ! -- mais qu'Israël ne se trouve nulle part, tout en gardant sa place au sein de l'Organisation internationale.

4. Les phrases transitives actives à 4 arguments (6 occurrences)

Il est rare de reconnaître des phrases à 4 arguments proprement dites. Mais en 4.1. et 4.2., 2 locatifs directionnels sont organisés. En 4.2., l'adverbe *loin* comporte un facteur directionnel. Les exemples de 4.3. à 4.5. sont factitifs. Dans ces cas-ci, l'ensemble *faire*-Vinf fonctionne en quelque sorte comme une unité. Et non seulement Vinf mais aussi les éléments directement liés à *faire* et à Vinf peuvent être considérés comme assumant des fonctions primaires.

4.1. N-V-N-*en*-N-*contre*-N (1 occurrence)

(1) Implicitement, en rappelant leur attachement aux principes et aux pratiques des Nations unies, les Neuf ont mis en garde les pays arabes contre une invalidation d'Israël à la prochaine assemblée générale.

4.2. N-V-N-Ad-*dans*-N (1 occurrence)

(1) Comme un bon joueur de tennis, il renvoie la balle très loin dans l'autre camp, et son tir paraît même suffisamment ajusté pour qu'il puisse préciser que le nombre des participants à cette conférence, qui «aura lieu au début de 1975», sera de dix à douze et que la Communauté économique européenne y sera représentée «en tant qu'elle-même».

4.3. N-V-Vinf-N-à-N (1 occurrence)

(1) Leur enthousiasme leur fait mépriser les accusations de ceux qui leur reprochent de mettre en place une dictature autoritaire et militaire.

4.4. N-V-Vinf-que-V-à-N (2 occurrence)

(1) Elle a fait savoir aux gouvernements socialistes qu'elle était prête à en- gager des négociations commerciales avec chacun d'eux, et, dans cette perspective, leur a transmis un schéma d'accord commercial.

(2) A qui fera-t-on croire que les documents d'Helsinki sont promis à la même efficacité ?

4.5. N-V-Vinf-N-par-N (1 occurrence)

(1) Elles fait entériner par les Occidentaux, et notamment les Etats-Unis, la situation territoriale et politique établie en Europe de l'Est après la guerre mondiale.

5. Récapitulation

Récapitulons les constructions examinées ci-dessus.

2. Les phrases transitives avec un objet direct (1026 occurrences)

2.1. N-V-N	553
2.2. N-V-Vinf	246
2.3. N-V-de-Vinf	80
2.4. N-V-que-V	124
2.5. N-V-DD	8
2.6. N-V-DI	5

3. Les phrases transitives à 3 arguments (222 occurrences)

3.1. N-V-N -Vinf	5
3.2. N-V-Vinf -N	5
3.3. N-V-Vinf -que-V	6
3.4. N-V-Vinf -de-N	1
3.5. N-V-N -A	9
3.6. N-V-de-Vinf -de-N	1
3.7. N-V-N(A) -Vinf	1
3.8. N-V-N -à-N	76
3.9. N-V-N -à-Vinf	16
3.10. N-V-de-Vinf -à-N	16
3.11. N-V-que-V -à-N	2
3.12. N-V-DD -à-N	2
3.13. N-V-N -de-N	27
3.14. N-V-N -de-Vinf	18
3.15. N-V-N -comme-N	2
3.16. N-V-N -auprès de-N	1
3.17. N-V-N -pour-N	1
3.18. N-V-N -avec-N	2

3.19. N-V-N	-contre-N	2
3.20. N-V-N	-dans-N	8
3.21. N-V-N	-en-N	4
3.22. N-V-N	-sur-N	6
3.23. N-V-N	-devant-N	2
3.24. N-V-N	-que-V	2
3.25. N-V-de-Vinf	-pour-N	3
3.26. N-V-que-V	-de-N	1
4. Les phrases transitives à 4 arguments		(6 occurrences)
4.1. N-V-N	-en-N -contre-N	1
4.2. N-V-N	-Ad -dans-N	1
4.3. N-V-Vinf	-N -à-N	1
4.4. N-V-Vinf	-que-V -à-N	2
4.5. N-V-Vinf	-N -par-N	1

Il faut d'abord remarquer que les constructions à deux arguments sont de loin les plus fréquentes. Et parmi ces constructions-ci, c'est celle de N-V-N qui sont les plus importantes. Dans l'ensemble des phrases réalisés en français, l'indication relationnels par les prépositions ou les consjonctions de subordination ont une très grande importance. Mais, concernant les fonctions spécifiques qui caractérisent les sous-classes de constructions, les indicateurs fonctionnels sont nettement moins importantes que les dépendants positionnnels, et cela du point de vue de la fréquence. A part les cas comportant un dépendant positionnel nominal attributif, le troisième argument est nécessairement un élément autonomisé (= élément dont le rapport est indiqué par un indicateur fonctionnel). Et les constructions à 3 arguments sont beaucoup moins fréquentes que celles à 2 arguments. Et rappelons aussi que les deux autonomisés les plus fréquents sont ceux dont les fonctions sont indiquées par *à* et *de*.

Bibliographie

- Corbeil, J.-C., *Les Structures syntaxiques du français moderne*, Paris, Librairie Klincksieck, 1968.
 Martinet, A. (dir.), *Grammaire fonctionnelle du français*, Paris, Didier, 1979.
 Pinchon, J., *Les Pronoms adverbiaux «en» et «y»*, Genève, Droz, 1972.
 Roy, G.-R., *Contribution à l'analyse du syntagme verbal: étude morpho-syntaxique et statistique des coverbes*, Paris, Klincksieck, 1976.
 Salkoff, M., *Une Grammaire en chaîne du français, analyse distributionnelle*, Paris, Dunod, 1973.

教育改善推進経費

言語研究 VII

1997年3月

編者 在間 進, 敦賀陽一郎

発行所 東京外国語大学
〒114 東京都北区西ヶ原4-51-21
電話 03-3917-6111